

# ATACAMA CROSSING (CHILE) 2011

## インカへの道

宍戸 生司

RACING THE PLANETが企画する4DESERTSシリーズには、中国のゴビ砂漠(ゴビマーチ)、エジプトのサハラ砂漠(エジプトレース)、チリのアタカマ砂漠(アタカマクロッシング)、南極の氷床(ラストデザート)の4つの砂漠レースがある。砂漠マラソンと言えば、MDS(Marathon Des Sables=サハラマラソン)が有名なレースである。私はサハラマラソンには、2006年の2007年の2回に出場し完走している。4DESERTSシリーズでは、ゴビマーチ2008とサハラレース2009に完走を果たしており、南極レースの出場権も得ている。サハラマラソンがピクニックに感じられると言うアタカマクロッシング。このレースは、数ある砂漠マラソンの中でも、別格に位置付けて見る砂漠ランナーが多い。レース中には、標高が3000mを越える地点があり、昼夜の寒暖差は40℃以上にもなる。砂漠マラソンと言っても、アンデス山脈の雪解け水が流れる川を下り続け、塩湖の硬い地面の上を乗り越え、岩壁を登り、時には大砂丘も下って行く。日本の裏側の南米に、どんな素敵な砂漠が広がっているのか、とても楽しみである。

アタカマクロッシング2011は、今年の3月6日から12日の7日間の日程で、南米チリのアタカマ砂漠の中を約250kmの距離を6つのステージに分けて行われた。主催者から指定された装備と、レースに必要な衣・食・住は、すべて自らが準備し、バックパックに詰めてレースに参加し、約10Km毎に設けられたCP(チェックポイント)を通過して行き、その日のBP(ビバークポイント)を目指すのが砂漠マラソンのルール。水は1日に決められた量(約9ℓ)が支給され、BPに着くと寝場所は簡易テントが設置されている。8畳ほどのスペースに、8人前後の選手がテントメイトになり、一週間の野宿生活しながらレースすることになる。このテント中で選手は寝起きを共にし、会話はほとんど英語になる。レースに出場できる唯一の条件は、英語が話せることとなっている。私の英語は会話と言うより、英単語とボディーランゲージで押し捲るレベルだから、会話とはほど遠い。荷物の重さは個人差もあるが、約6~15kg。BPではお湯がもらえるので、このお湯を使ってアルファ米等を作って食べて、レースを続けて行く。またBPには医療テントやサーバーテントもあり、ケガの治療や世界各国から来た自分宛てメールの送受信ができるようになっている。

今回のレースでは、日中の気温は約45℃まで上昇し、明け方は5℃まで下がり、その気温差が約40℃もあった。スタート地点の標高は3200mを越え、コースの地形は砂丘地帯だけではなく土漠や礫砂漠もあり、オアシス地帯に入らなければ太陽の強い日差しを遮るものは全くない。アタカマ塩湖の硬い大地を踏越え、アンデス山脈の雪解け水が流れる渡河しながら川沿いに下るコースもあり、とても変化に富んだコース設定になっていた。平坦な道

もあれば起伏の激しい峠もあったが、夜空には南十字星や天の川の星が無数に広がるのを見ると、宇宙を感じずにはいられない。今回のレースには世界33ヶ国の国と地域から110名の選手が集まり、250km先のサンペドロデアタカの村にある教会のゴール地点を目指し、レースが繰り広げられた。

3月1日(火)～2日(水)

今日は当直明けだが、夜の飛行機で一路サンペドロデアタカ目指し、成田～ニューヨーク～リマ(経由)～サンチャゴ～カラマへと40時間以上の空の旅が続く。カラマからサンペドロデアタカの町までは約100kmの距離があり、バスで1時間半の道のり。昨日は11件の救急出場があり寝不足、自宅に帰宅して昼ご飯を食べた後、下の娘(月紅:ルナ)と仲良く昼寝をした。15時50分新川崎駅発の成田空港行の電車に乗るために30分前に家を出たが、嫁さんと子ども達も駅まで見送りに一緒に来てくれた。途中線路沿いの駅に行く道を歩いていると、鹿島田駅近くの防犯ブザーを悪戯小僧の月桜(ナオ)が押ししまい、ベル鳴動。駅前交番に立ち寄り嫁さんが警察官に事情説明をしていると、月桜が突然大泣きを始めた。3歳児の目には、お巡りさんは憧れには映らず、怖い存在として認識されているのだろうか。

雨もポツポツと降り出して、濡れながら駅に着き、家族とは駅のホームでお別れ。月紅を乳母車から抱き起こしながら上の娘(利菜:リナ)に、「私が留守の間ママの手伝いをするように」と話しをしたが、役に立つであろうか。3日は月紅の初節句、4日は月桜の4歳の誕生日があるが、今回は一緒に祝うことができない。家族にお祝いのイベントがあるのに、一緒に祝えないのは本当に心苦しい。19日には利菜の小学校卒業式があるから、その時は家族みんなでお祝いしてあげようね。ゴビマーチに行く時は、駅のホームで嫁さんに泣かれたが、今回は家族が笑顔で見送ってくれた。

新川崎駅から成田空港ターミナル駅までは1時間50分、2リットル容器のペットボトルに焼酎のお茶割りを用意し、愛妻弁当をつまみに電車で揺られた。成田空港では、今回のアタカマクロッシングに出場する樺澤さんと佐藤さんと待ち合わせている。彼らとは、エジプトレースの時も空の旅は一緒だったが、今回も行きフライトは同じ便を予約して、ともにサンペドロデアタカ入りをする。20時10分発のニューヨーク行きの飛行機に乗り込み、12時間の機上人。ニューヨークに着いてからは、4時間のトランジットで飛行機を乗り換えてサンチャゴ(チリの首都)行きのフライトになる。空港内を移動し、手荷物検査を受けて飛行機を待っていたが、1時間半前になってもフライト予定の便が表示されない。樺澤さんが異変に気がついたので、私が他のお客に英語で話しかけるとフロントに案内された。どうもサンチャゴ行きの飛行機があるターミナルビルを間違えたいらしい。空港内のエアポート・トレイン(モノレール)に乗って、ターミナル8からターミナル4へ移動した。

3人とも少し小腹が減ったので、空港内で本場のマクドナルドを食べることにした。本場の味は一味違うのか、日本で食べるマックより美味しく感じる。コーラーはMサイズでも、やはりアメリカンサイズで大きかった。手荷物検査をして中に入り、22時15分発の飛行機

の搭乗アナウンスを待つが、警報機がターミナル管内に響き渡っている。爆発物が仕掛けられたのか、テロでも発生したかと一瞬嫌な予感がしたが、何事もなかったようだ。飛行機は到着しているが一向に搭乗開始のアナウンスではなく、「0時まで待ってください、2時まで待ってください」と搭乗時間を延長するばかり。ようやく2時半になってフライトすることができたが、サンチャゴからカラマまでのトランジット時間が気になる。飛行機はリマ(ペルーの首都)を経由したので、一旦、飛行機から降機して休憩。時間は10時半になっていた。日本からの時差が何時間あるのかも分からないが、空港内のBARでビールを飲んでタバコを吸った。外国の空港では、どこの空港でも空港施設内禁煙にしているところが多い。リマの空港内のBARの中は、喫煙席と禁煙席に分かれていたが、BARは関係ないのであろうか。それよりも、席に座ってタバコを吸っていると、窓越しの日差しがとても暑く、皮膚が焼かれる感覚が妙に懐かしい。砂漠へ近づいている高揚感が、堪らなく愛おしく思えた。BARを出て空港内のショップを見ていると、売店でアルパカの縫いぐるみが売られていた。触ってみると、毛の感触がとても軟らかく気持ちがいい。値段を見ると10000と値札が貼られていたが、ペルーのお金は持ち合わせていない。今考えれば、BARでの支払いを米ドルでしたので、縫いぐるみも米ドルでできたような気がする。月紅のお土産に、買って帰りたかった。

リマからサンチャゴに向かうお客も、5時間近く飛行機待ちをしていたらしい。佐藤くんの話によれば、飛行機は12時にフライトするとアナウンスが入ると、待合所では歓声があがったそうだ。空港でよく見かけた光景だが、待合所付近にはコンセントが多くあり、座り込んでPC(パソコン)をしている人の姿。電源があれば、世界中のどこにいても、PCで情報が集められメールの送受信が可能になる。

サンチャゴに着いてからは、チリの国内線に乗り継いでカラマまでのフライトになる。ここで問題なのが、荷物のロストパゲージと食料品の没収。幸い3人ともロストパッケージはなく、預けたスーツケースも回収できた。いよいよ手厳しいと聞いている手荷物検査、私と佐藤くんはそのままX線検査を無事にスルーできた。樺澤さんだけがスーツケースの荷物の中身を検査されていたが、問題はなかったようだ。先に日本を出国した岩瀬さんからのメールでは、持込食料品にチェックをし、バナナチップを犠牲にして検査をすり抜けたとのこと。また、「食料品の持込がありますか」筆問用紙に、NOにチェックしていた外国人は、ほとんどが係員に呼び止められずスルーしていたとの情報もあり、私はNOにチェックしていた。後日判明したことだが、荒井くんは私と同様に食料品にチェックをせずに検査場を通過しようとしたところ、X線の検査をしたら「スーツケースの中に固形の食料品が見える」と空港職員に呼び止められそうだ。DRYマンゴー等の4つの食料品を没収されて、23000円の罰金を支払ったと話していた。ご愁傷様！

国際線の出口で、「飛行機を乗り換えるチケットを持っていたよな」と、空港職員に英語で話しかけられた。「これから飛行機を乗り換えて、サンチャゴからカラマに行く」と空港

職員に言うと、国内線の乗り継ぎターミナルまで荷物をカートに載せて案内してくれた。乗換の途中に両替所に立ち寄り、米ドルからチリのペソに両替しておく。カラマに着くのは夜中になるので、どうしても現地通貨が必要になる。案内してくれた空港職員にお礼を言うと、「チップをよこせ」との返礼。佐藤さんに1000ペソ支払ってもらい、終了！ 私はチップを要求してこなければ、荷物1つ1つに対して各自でチップを支払うつもりでいたが、お金のために親切の押し売りをしている行為のように感じたので、支払う必要なしと判断した。空港職員は、「1000ペソは約2米ドルだぞ」とさらにチップを要求していたが、英語が分からない素振りをして対応し、一件落着。

カウンターで添乗員に発券してもらったエア・チケットには、搭乗口22ゲートと印字されていたが、出発ゲートは25だった。発券されてから搭乗するまでに1時間もないのに、こんなにいい加減でいいのですか。カラマ行きのロビーまでやって来ると、BARがあったのでチリ・ビールを注文し飲んでみたが、あまり美味しいとは言えず一杯だけで終了。ここのBARではタバコが吸えなかった。機内では飲み物と軽食のサービスがあったようだが、寝ていたのが気がつかず。寝ている間に飛行機は着陸態勢に入っており、カラマ空港に着いたのは22時を過ぎていた。飛行機のタラップから降り、歩いて空港施設内に移動するが、思っていたより外は寒くない。夜の帳が下りているので周りの景色は暗く、電灯の明かりしか見えなかったが、この空港も砂漠の中にあるのだろう。それにしても、夜空に浮かぶ星の数が桁違いに多い。

ここからタクシーでカラマ市内に移動してから、今晚宿泊する宿を探すことにした。この時間帯では、サンペドロデアタカマ行きのバスも運行はしていないだろう。仮にサンペドロデアタカマ行きのバスに乗れたとしても、現地で深夜に宿を探すことになるので、カラマで1泊してからサンペドロデアタカマ入りすることに決定する。空港内で野営する意見もあったが、もう40時間以上も飛行機の座席や空港内の椅子に座っていたので、ベッドの上で身体を休めたいのが本音。機内食には飽きたので、普通の食事がしてみたい。

飛行機の中で樺澤さんの隣席に座っていた男子大学生の旅行者も、カラマに移動すると言う。彼も一緒に、カラマ市内へタクシーで移動することになった。彼は大学の卒業旅行と称し、南米を一人旅しているそうだ。荷物は小さなバッグバッグを1つだけを背負っていたが、我々の荷物は各々がスーツケース1個とバッグバッグ1つを携行しているので、タクシー1台にはとても荷物は載り切らない。タクシー2台に分乗し、一路市内の安宿を目指すことになった。彼はスペイン語少し話せるようで、市内の安宿までタクシーで連れて行って欲しいと運転手に話を進めている。とても心強い人と旅で巡り会うのも、天の采配だと感謝する。空港からカラマ市内までは約6kmの距離があるが、タクシーの運転手から提示された料金は5000ペソだった。私が事前に調べたタクシー料金とほぼ同額だったのでOKサイン。大学生の彼は、「地球の歩き方」の本に、カラマ空港から市内までのタクシー料金が18000ペソと書いてあり、ペソの持ち合わせが少なくなっていたので5000ペソで助かったと

喜んでいて、貧乏旅行をして、自分だけの旅をして行くスタイルほど、楽しい旅はない。決められた日程で、観光ガイドに案内された旅では、その過程を楽しむことができないからである。タクシーで約6kmの道のりを、18000ペソ(約36米ドル)支払う日本人観光客がいたのであろうか、どのような基準で「地球の歩き方」にカラマ市内までのタクシー料金が記載されていたのか、甚だ疑問に思った。ちなみに、明日集合場所になっているサンペドロデアタカマまでは、カラマ市内から約100km離れているが、私が事前に調べたバスの料金は1000ペソ(約2米ドル)になっている。

タクシーに10分ほど揺られていると町中に入り、通りに面している2階建ての建物の前で車は止まった。時間も遅いせいか町を歩く人は見かけず、歩道には野良犬がウロウロしているのが、やたらと目に付く。タクシーの運転手に連れられてきた安宿のブザーを押し、応対に出てきた宿の主人に2人部屋1室の値段を聞くと、16000ペソだった。部屋の中も見ずに部屋を2部屋借りたが、私と大学生が案内された部屋は、入口から入った一番手前ある窓ガラスが破損してない部屋だった。樺澤さんと佐藤くんは2階の一室に案内されたが、どんな部屋かは見に行かなかった。部屋ではただ寝るだけなので、ベッドに身体を横たえることができればOKと割り切っていたので、問題はない。

部屋に荷物を置いてから4人で食事に出かけたが、どこが町の中心なのか分からない。とりあえず空港から来た道と反対方向に歩いて行く。カラマの町中には野良犬が多く、常に私の視界には2~3匹の犬の姿が入っていた。この野良犬、人に危害を加えることはなさそうで、どの犬も痩せこけている。時計は23時を過ぎていたが、安宿から200mぐらい歩くと1件のレストランを発見、迷わず店に入った。大学生はウユニ湖へ行くバスのチケットと時刻表を確認する為、バスの営業所を探しに行ってしまった。店には3人で入り、スペイン語のメニューを眺めてみたがチンプンカンプン。私は、メニューの写真に出ていたホットドッグとビールを注文した。店にいる間に2回ほど電気のブレーカーが落ちたのか、店内が真っ暗になったが、無事にホットドッグが運ばれて来た。ホットドッグに齧り付くと、チーズがたっぷり入っており、久々に美味しいホットドッグに出会えた幸福感と満足感が、口の中に広がった。「この値段でこの味だったら、日本でも必ず売れる」と断言できる美味しさで、私の味覚にはマッチしている。明日の朝食もホットドッグを食べてから、サンペドロデアタカマへ行くのも悪くない。大学生が店に戻ってきたが、バスのチケットは購入できなかったと話していた。ちょうどバスの営業所(チケット販売所)も店を閉めるところだったらしく、門前払いされたようである。

4人でレストランを出て安宿に戻り、部屋のベッドに潜り込んだ。日本を出国してからシャワーを浴びていないが、睡魔の方が勝っていて身体を休めるのを優先した。砂漠に入れば、1週間は風呂なしシャワーなしの生活が始まるのである。「明日は早朝から、カラマ市内を徘徊するか」と思いながら、眠りに落ちていった。深夜に大学生の携帯電話が鳴り、その都度、私は目を覚す。電話の呼び出し音なのか、時報がセットされていたのか分から

ないが、優しい音色の音が鳴る度に、私は浅い眠りから覚めていた。物音にここまで敏感なのは職業病なのであろうか。当直勤務中に仮眠室で寝ていても、救急出場の指令音が鳴った瞬間に、習慣的に身体が反応して目が覚めるのだから仕方がない。

3月3日(木)

大学生は朝5時に起床し、ウユニ湖行きのバスか旅行の手配をすると昨夜話をしていた。朝5時に、彼の携帯電話から例の優しい音色が聞こえてきたが、身動き一つしないで眠り続けている。私は眠っている人を見ると、いつも羨ましく思う癖がある。20分ほど時間が経っても起きる気配がないので、彼に声をかけて起こしてあげた。彼はそのまま身支度を整えてからバスの営業所まで歩いて行き、ウユニ湖を目指すと言う。ウユニ湖行きのツアーはサンペドロデアタカマの町に行けば、数多くツアーが組まれているらしいのだが、時間が惜しいとのこと。6時前に彼と一緒に安宿を出て、バスの営業所まで歩いて行った。相変わらず街中では野良犬を多く見かけたが、まだ夜が明けていないので歩道上で丸くなって寝ている。町の中にはバスの営業所が何ヶ所もあり、バスを待つ人は営業所の前で並んでいる。営業所自体は開店しておらず、8時頃までは待たなければならないようだ。

町外れの方に、もう1件バスの営業所があると言うので、彼と一緒に歩いて行く。途中のバス停で、5~6名の男女がバス停のベンチを占領して毛布に包まって寝ていた。また、何人かの路上生活者が、道端で寝ている姿も目にした。歩いている道の反対側に、救急車が3台停まっている。そこは病院であり、救急車の運転席に乗って仮眠している人がいた。チリでは、救急車は病院から出場するのであろうか。宿から1kmほど歩くと、平屋建ての警察署のような建物があった。パトカーとかバイクは見当たらなかったが、警察官は腰から拳銃をぶら下げている。大学生の彼は警察署に入って行き、スペイン語で「ウユニ湖行きのバスに乗りたい、バスの営業所はどこか」と警察官に聞いていた。警察官から、「8時にならないとバスの営業所は開店しないよ」と言われ、彼がガッカリしている。その様子を見かねたのか、1人の警察官が「Follow me」と言って外に彼を連れ出した。どうもバスの営業所まで連れて行ってくれるらしい。私も彼と警察官の後を着いて行き、横断歩道を渡って道路を挟んだ警察署の向かいに来ると、警察官が1台のタクシーを停車させた。警察官がタクシーの運転手に何事か話し、彼と私にタクシーに乗れと言っている。私は「NON」と断り、彼は「SOLO」と身振りを交えて1人だと言うと、警察官も理解したようだ。彼とはここでお別れ、素敵な旅を続けて下さいね。私は一人でカラマの町の探検に出かけた。

1時間近くカラマの町を歩いてみたが、特段観光に値する建物や場所には出会えなかった。早朝の夜明け時間帯であるから、全ての店屋が閉まっており人通りはなく、野良犬が道端で寝ているだけ。カラマの町は、砂漠の高原にある標高2700にあるオアシスの町であり、世界最大のチュキカマタ銅山が、町に活気を与えていると言うが、今は町全体が寝ている時間なのだ。このカラマの町から北に16kmにチュキカマタ銅山があり、世界最大級の露天

掘り銅山として、チリ経済を支えるほどの埋蔵量を誇っている。チリ共和国アタカマ州コピアポ近郊のサンホセ鉱山にて、現地時間2010年8月5に発生した坑道の崩落事故は、記憶に新しい。その銅山も、この付近(100kmぐらい離れている)場所にあるらしいと聞いた。

時折、バスや車が通り過ぎはするが全く面白味に欠けている。安宿に戻ってレースの準備をすることにした。9時に私の部屋に集合になっているから、1時間ぐらいは食料品の仕分けができる計算になる。チリの税関では、開封してある食料品やドライフルーツ、肉類等は持ち込み禁止になっていたの、スーツケースに入れた食料品は未開封のままチリに持ち込んでいた。レース前に、1日単位で1週間分の食料品を小分けにする作業が、まだ残っているのだ。

スーツケースの中から日本から持ち込んだ全ての食料品を取り出し、ベッドの上に広げてみた。食料品、粉末飲料、サプリメント類の総重量は約5kg。パッケージを次々に開封して行き、1日毎に7日分の食料品を並べていく。私のレース中の食事は、アルファーマイとインスタントラーメン、スナック菓子がメインとなる。1週間の砂漠レースを乗り切るだけのエネルギーを得られれば良いのだが、レース中には食欲不振に陥り、何も食べられなくなることもある。エジプトレース2009では、胃がアルファーマイを全く受け付けなくなり、お湯を注いだけで満足し、何度ご馳走様をしたことか。今回のレースでは、行動食のスナック菓子を多目に用意しているが、私の50ℓ容量のバッグバッグに全ての装備品が納まりきるのが心配の種である。

アルファーマイは味付けを変えられるように、白米のものしか購入せず、スープ類を数多く用意した。重量はかさむが、白米にレトルト食品をかけて食べる作戦なので、その日の体調でメニューを変えても対応が利く。白米が喉を通らなくなったら、白米をスープに入れて雑炊のようにして食べれば良い。油脂成分の濃いカレー類は、胃への負担が強くスパイスにより刺激もあるが、今回は挑戦することにした。レース中は毎日40km前後の距離を踏むので、足に行く血流が多くなり、消化に回る血流が不足になりがちになる。胃へのダメージが強い食品は、血流不足と消化不良で下痢を誘発するので、砂漠レースでは敬遠されている。レース中は下痢するのは当たり前と割り切って、今回はカレー類にチャレンジし、食欲不振の時の強い見方になるか、試して見る価値はあると思う。

1週間分の食料品を縦に並べて、チップロックに1日分毎に小分けしていく。小分け作業の合間にお腹が減ってきたので、スナック菓子を朝飯代わりにつまみ食した。私はレースに持っていく食料品を、特に試食したりはしないので、初めて食べる食品も中にはある。間違っても、アルファーマイだけは試食は絶対にしない。アルファーマイには悪いが、砂漠レースでは良いイメージがない。

食料品の小分けをしていると、8時半頃に樺澤さんが部屋に入ってきた。佐藤くんも起きよう、出発の用意を整えば宿を引き払うことにする。サンペドロデアタカマ行きのバスは、営業所でバスのチケットを買わなければならないが、出発時間が何時になるの

か今のところ分っていない。バスのチケットを買って、カラマの町で朝ご飯を食べてからバスに乗ってもいいと考えていた。安宿を引き払い、背中にバッグバッグを担いで、スーツケースをガラガラ押しながら歩道を進んで行く。安宿の近くには高校があるらしく、高校生のカップルが前から歩いて来た。チリの人の顔立ちは日本人とよく似ていて、すれ違った女子高生は、日本の女子高生と変わらないような制服を着て歩いていた。通りに売店があったので、1.6リットルの水を1本買う。この水、ガス入りとガスなしがあるようで、以前フランスでガス入りの水を飲んだことがあるのだが、私の口には合わなかったのを思い出した。樺澤さんと佐藤くんも、水とスナック菓子等を購入していたが、私も腹に溜まるような食べ物を買っておけば良かった。

「朝、カラマの町を歩いていた時に見つけた教会がある」と、2人に言ったら、「時間があるから見に行こう」と言う話になった。その教会は、特別に珍しい造りをしているとかではなく、普通の教会であったが、少し寄り道をして教会へ立ち寄る。教会をバックに記念撮影をしていたら、野良犬くんが「何をしているのだ、この日本人!」とばかりに、私たちの近くをウロウロと歩いていた。凸凹したレンガ畳みの歩道を、一列になってバスの営業所へ向かって連なる。最初に比較的大きいバスの営業所に行ってみたが、バスは8時半に出発しており次は12時発になっていた。バスの値段は2500ペソ(約5米ドル)と掲示板に表示されており、約100km離れたサンペドロデアタカマの町まで格安で移動できる。次に訪れたバスの営業所では、13時半にバスが出発する予定になっていた。少し離れた場所にもう1つバスの営業所があるのを、早朝に確認しておいたので、そこまで3人で歩いて行く。スーツケースをガラガラ押して、バッグバッグを担いでの移動は、思っている以上に疲れる。野良犬も道の脇で、珍しそうに私たちを眺めていた。3つ目のバスの営業所に着くと、バスがエンジンをかけて止まっている。9時半出発のスペイン語の文字が表示されており、サンペドロデアタカマ行きとなっていた。「急げー」と2人を煽るようにして、慌ててバスの営業所に入り、サンペドロデアタカマ行きのバス・チケットを購入した。受付のお姉さんにバスの座席に名前を書くように言われたが、私たちの外には名前は2名しか書かれていない。このバスは約30名乗りのバスのようなのだが、乗客は5名だけということになる。

バスに乗り込む前に、荷物をバスのトランクに入れようとハッチを開けたら、バスの後方から大きな声で呼び止められた。バスには自分で荷物を積み込むのではなく、バスの運転手が荷物を積み込んで、引換券の紙を渡す手はずになっていたらしい。何はともあれ、これでようやく集合場所になっているサンペドロデアタカマの町まで行けることになった。バスは9時半過ぎにカラマの町を出発し、町中を軽快に走って行く。バスの車窓からは駅のような建物と線路が見え、10分も経過しないうちに、景色が町中の風景から砂漠の1本道に変わっていった。バスはどこまでも続く1本道を、時速100km/hオーバーで走り続ける。車窓から見える砂漠の景色は、モロッコで見た砂漠の原野に似ているが少し違う。アタカマ砂漠では、地平線の上に大きくアンデス山脈が聳え、空との天境線になっている。アンデ



ス山脈の頂付近には雪が被っていて、南米が夏の季節だとは思わせない風貌を呈していた。爽やかな青空が広がり、バスの車窓越しに受ける太陽の光は強く、砂漠に帰還して来た嬉しさに、気分は盛り上がる。素敵な砂漠レースの舞台が整っていると、感じずにはられない。

「走り、出したら～♪ 何か答えが、出るだろうなんて、俺も当てにはしてないさあ、してないさあ～♪」…男達のメロディー(SHOGUN)、昔私が子供の頃に放映していた探偵のテレビドラマで、「俺たちは天使だ」の主題歌になっていた曲を口ずさみ、自分を鼓舞していた。この歌の歌詞にあるように、砂漠レースに出場するからには、「男だったら、流れ弾の1つや2つ、胸にいつも刺さっている」…人には触れられたくない心の傷があり、「どうせ一度の人生さ」…自分が行動を起こしたら途中で止めて後悔しない、「運が悪ければ死ぬだけさ」…その通り。ゴビフレンズの船尾さんも、この歌が好きなのだが、私も大好きで砂漠でよく歌っている曲である。

佐藤くんから携帯電話を借りて、家に電話をしてみると、何回かの呼び出し音の後に嫁さんが電話に出た。今、サンペドロデアタカマに向かっている途中のバスの中で、11時頃に町に着くと言うと、まだホテルに着いていないことに驚いていた。家を出てから丸二日と7時間経過しているのだから、驚いて当然だ。今日は、月紅の初節句(桃の節句)の日だったので、前祝をしてから日本を出国してきたが、来年は一緒に祝えるようにしよう。そんな話をして電話を切った。

車窓から外の景色を眺めていると、砂漠の中に動物の白骨化した死体が見えた。ここはカラマの町からだいぶ離れた場所だが、砂漠では水なしでは人間でも同じ運命をたどることになるだろう。また、道路沿いに祠のようなものや、十字架が砂漠に立てられているのが、時折車窓から見えた。道路工事中に亡くなられた方のお墓なのであろうか。バスが砂漠の1本道を突き進むに連れ、耳に耳閉感があり、標高が上がっているようであった。何回も生唾を飲んで空気抜きをしていると、遠くに間欠泉が噴出しているようなものも見える。豆粒のように見える人の姿は、観光客が訪れているらしく、その方向から、1台の四輪駆動車が砂埃を巻き上げて砂漠の中を走っていた。

バスに揺られてから約1時間半、ようやくサンペドロデアタカマの町が、眼下のオアシスの中に見えてきた。この町は、チリでも最も古い町であり、現在ではチリ北部の観光拠点の町として多くの観光客で賑わっているとのこと。また、ボリビアとの国境も近く、ウユニ湖への観光や、ボリビアへ抜ける通り道になっている。バスが高速運転から減速し、アスファルトの道から土の道へ進路を変え、アタカマの町に入っていく。家の造りは、日干し煉瓦(アドベ)で造られた平屋建てが多く、カラマの早朝と比べ人通りが多い。バスが町の凸凹道を進んで行くと、大きなサッカー場の前の空き地に止まった。バスから降りて外に出ると、「むっ」とする砂漠特有の空気と暑い日差しが照りつけている。預けた荷物をバスの運転手から受け取っていると、バスが止まった場所の前には、いくつかの露天が出て

いるのに気がついた。露天には、飲み物やお土産が売られており、子供たちの姿も見える。町の中心街がどの方向にあるのか分からないまま、3人でスーツケースとバッグバッグを持って右往左往する。いくらか遠回りになったが、樺澤さんの後について歩いていると、知らない間に町の入口に来ていた。そのまま歩いていると、通りの左側に救急車が3台止まっていた。ここは消防署ではなく、病院のようだ。そのまま真っ直ぐ歩いて行くと、通りから抜けた場所に公園のような広場があり、その一角の左手奥に、白塗りの建物の教会があった。この教会は何度も写真で見たことがあり、毎年アタカマクロッシングのゴール地点になっている場所だと、すぐに気がついた。教会の前で私と樺澤さん、佐藤くんで写真を撮っていると、村上さんと偶然に出会った。村上さんは1週間前から現地入りしており、高度順化をしながら観光をして、レースに備えていたそうである。村上さんが宿泊しているホテル(La Casa De Don Tomas Hotel)は、選手の集合場所になっているホテルでもあり、私たちが今日からそのホテルに宿泊するつもりである。村上さんからホテルの場所を聞くが、要領を得ない。村上さんが持っていたホテルのパンフレットを貰い、サンペドロデアタカマの地図と照らし合わせると、ようやくホテルの場所が分かった。重い荷物を持ちながらの移動は本当に疲れる、助かった。村上さんは、そのまま町へ徘徊に出かけたので、3人でホテルに向かう。町のメインストリートには、お土産物屋、ツアー会社、レストランが立ち並んでいるが、この町にも野良犬が多くいた。

ホテルは、町の中心街から400mほど離れた場所にあった。家族と一緒に家を出てから、56時間かけて集合場所になっているホテル(La Casa De Don Tomas Hotel)に到着したことになる。ホテルのフロントに行くと、主催者(RACING THE PLANET)のスタッフとレースに出場する選手が5~6名がラウンジで椅子に座っていた。ホテルのフロントで3人部屋が空いているか聞いてみると、椅子に座ってPCをしていた外国人女性が近づいてきて「アタカマクロッシングにようこそ、私はAlina Brownですが、レースに出場する選手ですか」と聞いてきた。彼女の名前には聞き覚えがあり、主催者側からメールが来ると、最後に彼女の名前が載っていたのを思い出した。Alinaさんに、私たち3人が今日このホテルに泊まれないか、ホテルのフロントに交渉してもらった。今回のアタカマクロッシング2011の出場選手は110名おり、1つのホテルに選手やスタッフ全員を宿泊させる広さがないうえに、宿泊するホテルが3ヶ所に分散しているのである。

ホテルンカウンターでAlinaさんに、「私の名前はSeijiです。Samanthaに会いたいのですが」と言うと、カウンターの後ろにある食堂との間仕切りから、「Hey Seiji~♪」と顔だけ出して微笑んで声をかける女性がいた。Samanthaとのエジプト以来の再会に、自然と笑みがこぼれる。Samanthaは食堂でPC作業をしていたようで、私たちがホテルに来たことに気がつかなかったようだ。食堂から出てきたSamanthaにハグを要求され、私は照れながらもSamanthaとのサハラレース2009以来の再会を喜んだ。SamanthaはRACING THE PLANETのスタッフであり、英語が話せない私にも、分かりやすい英語でいろいろと説明してくれ、話

し相手になってくれる心強い女性である。Samanthaとの再会を喜んでいる間に、Alinaさんにホテルのフロント係に交渉してもらった結果、3人部屋で1泊することができた。1泊170米ドル、3人で割れば5000円ちょっとの料金、日本ではビジネスホテル並みの値段であるが、この町では高級ホテルに泊まれる。チェックインは15時からであったが、部屋の鍵はすぐに貰えたので、部屋に腰を下ろすことができた。

シャワーを浴びて休憩することもなく、早速、町に出て昼ご飯を食べに出掛ける。町を歩いていると、昼の日差しが思っていたほど肌には痛くは感じない。世界一雨が降らない地域だけあって、空は青く澄み渡り、爽やかに吹く風が心地いい。日干し煉瓦で造られている壁や家を見ると、数100年単位の年季を感じる。建物や家に関して、日本を木の文化と表現するならば、この町のものは煉瓦の文化とでも呼ぶべきか。砂漠では、日干し煉瓦造りの家をよく見るが、建築材料になり得て容易に手に入る安価なものは、日干し煉瓦になるのだろう。ホテルも日干し煉瓦でできていたが、建物の中に入るとヒヤッとして涼しく、とても過ごし易かった。

町の繁華街から、少し離れた場所のレストランに入った。店の前にはスペイン語でメニューが書かれていたが、文字が読めないので何の料理なのか意味が伝わらない。店に入れば写真付きのメニューが出てくるかと思っていた。お店の人にメニューを頼むと、外の看板を店の中に持って来ようとしている。とにかく肉が食べたいと3人の意見は一致していたので、スペイン語の本を見て肉料理(ビーフ)の意味の単語を探して、それらしい料理を注文した。後は酒さえ飲めれば満足なのだが、出来れば高地なのでビールは避けたい。チリではワインが有名であるが、私はほとんどワインを飲んだことがない。お酒はビールとワインしかないようで、カウンターの近くの冷蔵庫にビールがあったので、自分でビールを取りに行き、お店の人に合図をした。樺澤くんは下戸、佐藤くんもアルコールは好きではないようなので、コーラーを注文していた。

最初に、パンとパンに付けて食べるタレのようなものが運ばれてきた。日本で例えるなら、お通しのような存在とでも表現すべきか。このタレのような野菜を刻んだドレッシングは、店によって独自の味付けが施しており、私の口には合う。肉料理は、1つの大きな丸皿にステーキとトマトスライスとライスが盛り付けられていた。ステーキは塩コショウのみで味付けされており、ライスは細長い米だったがバターライスのような味付けはされていない。ボリュームもあり、とても素朴な味付けで美味しく感じられた。

お店を出てからからは、サンペドロデアタカマの町を徘徊しながら、お土産物屋をのぞき回る。村上さんと会ったサン・ペドロ教会近くに、民芸品売りを発見した。道の両側に、お店が50mほどの長きに渡り立ち並び、上にはアーケードのような天幕が張られている。アルパカやリヤマの毛で作られたセーターや帽子、ポンチョ等も売られている。石で作られた動物の置物や、高山病に効くココアの葉や飴もあった。私の目を引いたのは、チェスのように駒がある双六に似た玩具。買うか買わないか迷ったが、玩具のルールが分からないの

で買うのを断念したが、今でも気になっている。

お店をゆっくり見て歩いていると、アーケードを抜ける直前に、奴が現われた。奴が不敵な笑みを浮かべながら、樺澤さんと佐藤くんと話をしている。奴の名前は岩瀬さん(ケン)、今までに世界20数カ国へ旅行に行った経験を持つ彼も、南米は始めて来たと言う。サハラレース2009に出場した時に、樺澤さん、佐藤くん、岩瀬さん、村上さんの4人に、次の砂漠レースはアタカマに行こうと誘ったのは、私である。みんな砂漠レースに魅せられて、再び日本から遠く離れた地に集まって来た。ケンも合流して、4人で休憩することになった。

アーケードを抜けると、その先にはバスで降りた場所があり、サッカー場があった。バスを降りた時には他のバスも数台停車していたので気がつかなかったが、消防車が1台止まっていた。この消防車の脇にある平屋建ての建物が、この町の消防署のようである。サッカー場の脇には売店があり、日除けがされたテラス型のスペースに、椅子とテーブルが置いてある。みんなでペットボトルのコーラーを、グラスに注いで廻し飲みながら話し込む。このコーラーは、グラスに注いでも泡立たず、この場所の標高が高く気圧の関係による現象なのかと不思議に思った。

一旦宿泊するホテルに戻り、再び町へ行き夜ご飯を食べに出掛けた。夜ご飯は、またまた肉にしようと話がまとまり、「Lomo a lo Pobre」を食べに行こうと盛り上がる。ケンの話では、地球の歩き方の本にLomo a lo Pobre の記事があり、恋焦がれていたようだ。Lomo a lo Pobre は、薄切りの大きなビーフステーキにフライドポテト、その上に目玉焼きが載っている料理で、塩とコショウであっさりしていると説明書きがされていた。何件かのレストランを廻り、店の入口の看板のメニューに「Lomo a lo Pobre」と書かれているのを発見。店内にお客は一人もおらず、美味しい料理を食べせせるのか少し不安になる。何度か店の前を通り過ぎ、その店に決めて4人で突撃。Lomo a lo Pobre を4つ注文し、ケンと何のワインを飲むか相談する。ケンはスペイン語を少し勉強してきたらしく、店の主人にワインの値段を確認し、どのワインが美味しいのか聞いていた。店の主人は3本のワインを持って来て、何やら説明していたが、主人が美味しいと言うワインに決めて注文した。そのワインを飲んでみると、美味い！今までワインを敬遠しがちだったのは、私の人生で間違いだったことに気が付いた瞬間であった。

店のテレビではサッカーの試合が映し出されていたが、4人の会話は砂漠レースの話しや、砂漠フレンズの話になる。ケンと2人で、ワインボトル2本を空にした。お会計は1人頭6000ペソ(約12米ドル)、物価も安い。夕焼けが町を包み込む頃に店を出て、お土産屋を4人で徘徊した後、樺澤さんと佐藤くんはホテルに戻り、私とケンは酒屋へワインを買いに行くこととした。ホテルでも飲んだ暮れるつもりである。酒屋でワインを買った後、ケンと2人でポンチョを売っている露天に立ち寄って、お買い物。町の露天で売られているポンチョを何度も見ている間に、次に出場を考えている南極レースには、ポンチョを着て走りたい衝動に駆られてきた。お店の人にポンチョを取ってもらい試着してみると、意外に暖かい。私

が気に入ったポンチョは、オレンジ色が眩しいアミーゴ風のポンチョ。毛糸のようなもので作られたポンチョも試着してみたが、これは子供のアルパカの毛で作られた品物だと、お店の人が説明していた。アルパカの毛で作られたポンチョはグリーンで、着心地も良く軽いのに暖かい。アルパカのポンチョは嫁さんにと考え、私の分と2つ、ポンチョを迷わずお買い上げした。

ケンと2人して千鳥足でホテルに帰る途中に、レストランで食事をしている一人の男を見かけた。彼はシンガポールの選手で、名前はThaddeus Lawrence(ローレンス)と言い、サハラレース2009で一緒だった選手だ。ケンがローレンスに声を掛けると、本人以上に周りの友人たちが驚いていた。久々の再会を喜び合い、「また明日」と言って分かれた。

ホテルに戻り部屋に帰ると、先に帰ってきていた樺沢さんと佐藤くんがベッドの上に荷物を広げていた。レースに持って行く装備の最終確認をしていたようだ。私は買ってきたポンチョを樺沢さんと佐藤くんに見せびらかし、「来年の南極レースは、このポンチョを着て走るんだ」と話すと、羨ましそうな視線を送っていた。彼らが翌日にポンチョを買いに行ったことは、容易に想像が付くだろう。ホテルのフロントでワインを飲んでいると、近藤さんが到着した。近藤さんはRACING THE PLANETの日本事務局を担当しており、今回はエジプトレースに続いてスタッフとしてアタカマまでやって来た。近藤さんと佐藤くんも加わり、レース前のゆっくりとした時間が流れていった。チリの公用語はスペイン語で、佐藤くんが指差しスペイン語帳を持っていた。ケンがハペロという言葉が載っていたと嬉しそうに笑い出し、その意味は、「○ナニー野郎」という意味だと書いてあると言う。何でこんな言葉が本に載っているのか不思議であったが、使ってはいけない言葉として載せてあるのではと言う意見があり、みんなは納得。そんなのはお構い無しに、ケンと2人してお互いにハペロと言って罵り合った。ホテルのフロントで、ワインを飲みながらハペロと罵り合う日本人をみて、スペイン語が分かる人はどう思ったかは想像におまかせします。サンペドロデアタカマでは日が沈むのは夜の19時過ぎ、20時を過ぎると天空に数え切れない数の星が瞬き始める。ホテルの外に出ると、夜空に星をちりばめた天の川が流れていた。飲んでいるせいか寒さはあまり感じない。この寒さなら防寒着はいらないかなと頭の片隅に考えが過ぎた。

3月4日(金)

朝5時に目が覚め、外に出ると満天の星空が浮かんでいた。持参した中華スープに、お湯を注いで飲むためにホテルのフロントへ行く。フロアーの椅子には外国人選手が座っており、コーヒーを飲みながらパソコンをしていた。朝食は7時半からなので、まだまだ時間はあるが、その前にレースの荷物準備とシャワーに入りたい。樺沢さんに南十字星とさそり座を教えてもらった。これ以降、毎日星空を見上げると南十字星を自分で探して見るようになった。日本では見られない星座である。また、オリオン座が日本で見るのと逆の形に見える。樺沢さんに理由を聞いたが、私の頭では理解できなかった。

7時半過ぎに、ホテルのフロントに朝ご飯を食べに行った。近藤さんと村上さんも加わり、5人で談笑しながらの食事になる。ゆっくりと食事をした後、ホテルの部屋に戻り再び荷物の準備を行った。一区切りついたところで、昨日買った絵葉書に嫁さん宛てに手紙を書いていく。海外に出ると、その国から絵葉書を嫁さんに出すようにしているのだが、この絵葉書は無事に海を渡って家までたどり着くであろうか。エジプトレースの時にカイロから出した絵葉書は、未だに家には届いていない。絵葉書を受け取って、嫁さんが微笑む顔を想像しながら、今の気持ちを文字にした。

ポンチョを着て写真を撮ってもらいに、ホテルの中庭に出た。樺澤さんも佐藤くんも、やはりポンチョが欲しいようだ。ポンチョを着て写真を撮っていると、「SEIJI～」と声を掛けられた。声のほうを振り向くと、Tah Ming Tan(タン)さんの懐かしい笑顔が炸裂していた。タンさんとはMDS2007で出会い仲良くなった外国人選手の一人である。年齢は50代半ばだが、砂漠フレンズには年齢性別は関係なく親友になれるのが魅力だ。樺澤さんや佐藤くんも同じMDS2007に出場しているが、タンさんの印象は薄く覚えていないようだった。MDS2007では、私とタンさん、ジョン、ネイさんの4人で表彰式には参加せず、モロッコのワルザザードの町でタジンや郷土料理を食べながら飲んだ暮れ、町中を泥酔しながら徘徊したのを思い出す。タンさんはマレーシアから来ており、今回は友人のJagjts Singh (Jack)さんを伴っての出場。いろいろと話をしていると、懐かしさが込み上げてきた。砂漠レースに出場していると、外国人の友人との再会がとても楽しく貴重を感じる時間にもなっている。タンさんはマレーシアではDoctorをしている。タンさんの人柄はとても優しく気さくな人なので、医者をしている人のようには見えない。ジャックは整形外科のDoctorだそうだ。

佐藤くんから携帯電話を借りて、家に電話をした。今日は息子の月桜の4歳の誕生日。日本から遠く離れた町からでも、電話で子供と話すことができることに感謝。日本との時差は12時間あるので、今の時間は日本では3月4日の21時頃になる。電話で嫁さんと話してから、月桜に電話を代わってもらい、「誕生日おめでとう」と言うと、「Oh～、SEIJI、父ちゃんどこにいるの、砂漠にいるの」と電話口から声が聞こえてきた。4年前、月桜が生まれて3週間後には、モロッコで開催されたMDSのスタートラインに立っており、タンさん達と砂漠にいたのを思い出した。月桜とは、お土産にチョコレートを沢山買って帰る約束をし、電話を切った。

ホテルの部屋に戻りレースの準備をしていると、10時前に樺澤さんと佐藤くんは自転車屋にマウンテンバイクをレンタルしに行き、町の郊外へサイクリングしに出掛けていった。私はケンが10時頃にホテルに荷物を置きに来ると言うので待っていたが、時間が過ぎても現れない。「昨日ワインを飲ませ過ぎたから、朝、起きられなかったのかなあー?」、あのムーチョ・ハペロと思いつつ、ケンを迎えに行くことにした。町までトボトボ歩き、町の入口の店屋がある十字路の角を曲がろうとしたら、十字路の反対側の角からハペロのケン

が現われた。スーツケースをガタガタと引き擦り、いつもの笑顔を醸し出している。今日の夜までに、アタカマクロッシングに出場する選手達は、サンペドロデアタカマの町にある各自指定されたホテルに宿泊しなければならない。私たちはLa Casa De Don Tomas Hotelが、宿泊ホテルに指定されていたので移動する必要は無い。昨日3人で泊まった部屋が、偶然にも樺澤さんと佐藤くんが宿泊指定されている部屋になっていたのも、荷物置場と休憩所に行ることができる。ケンの荷物を部屋に置き、早速町に繰り出した。まずは町の郵便局へ行き、絵葉書のAir Mailを出しに行った。

サンペドロデアタカマの町は人口約5000人の小さな町で、観光で成り立っている。町全体を歩いても1~2時間で歩ききってしまう広さしかない。お土産物屋を廻るのにも飽きたので、昨日の酒屋で水を買って町外れに行くことにした。酒屋の前まで歩いてくると、酒屋の向かいの角に朝から泥酔している大人5~6名が騒いでいる。ものすごくテンションが高く、手にはワインボトルを持っており、通行人の観光客をからかって遊んでいた。乳母車に2歳児くらいの子供を乗せているが、子供もキャッキヤと笑っている。そのうちの1人が、私たちにリロリロリロと言って、両手の指をピストルの形にしてビームを発射する仕草をして攻撃してきた。私が大笑いをしていると、ケンがリロリロリロ攻撃に応じて遊び出す。ケンの対応に満足したのか、今度はエア・テニスの動作をして試合を申し込んでくる。その後もエア・サーベルを「シャキーン」と言って拔出し切りつけてきたり、なんとも愉快的な酔っ払い集団であった。

酒屋に入って、ケンは水を買って私はアイスを買った。アイスクリームが入っている冷蔵庫は、私が子供時代に駄菓子屋にあったタイプの冷蔵庫だった。ガリガリ君のコーラー味を探してみたが、あるはずも無く、マンゴー味の棒アイスにした。ケンと2人で、町外れまで歩いてみることにする。途中、Oasisで羊の群れを放牧し終え、家を買える途中の老人が歩いていた。このような光景は、これから何十年も続くのであろう。Oasisの先には用水路が流れていて、水は茶色く濁っている。この水を手で触ってみると、水は非常に冷たかった。おそらく遠くに見えるAndes山脈の雪解け水が、川を流れて山の土砂を削りながら砂漠を通り、この用水路で町に引き込んでオアシスを潤わせているのだろう。

町外れに来ると、大きな墓地があった。墓地は塀で囲まれていたが、裏側には土漠と石が交じり合った砂漠が続いており、リカンカブール火山がそびえ立っているのが臨める。山頂付近には雪が積もっており、富士山に似た形をしているが、標高はそれよりも高い。他にも雄大なAndesの山々が展望でき、しばらくの間景色に魅了されていた。右方向の岡のような小高い山の上に、人工的な建築物が見える。土塀か日干し煉瓦のようなものを積んだように見えるが、人がいるようには見えない。後で分かったことだが、見えていたのはプカラ遺跡と言い、サンペドロデアタカマの町から3kmほどの場所にある、1200年頃のプレ・インカ時代の遺跡だったと判明した。また、樺澤さんと佐藤くんは、プカラ遺跡までチャリンコを蹴って見物に行っていたそうだ。太陽の日差しは暑くは感じないのだが、確実に

皮膚を焼いているのが分かる。つまり、日差しが痛く感じているのだ。

腹が減ったのでケンと二人で町に戻り、どこかのレストランで昼ご飯を食べることにした。町中で店を探していると、レストランの前で試食のPizzaを持っている女性店員がいた。試食のPizzaを食べてみると、これが抜群に美味しい。ケンと2人で、迷わずこの店でPizzaを食べることにした。PizzaとPasta(カルボナーラ)、ワインボトルを注文して空腹に耐える。運ばれてきたお通しのようなパンにタレをつけながら、ワインのつまみにして空腹を満たしていく。そんな時、「Hey SEIJI〜♪」と店に入って来たタンさんとJackに声を掛けられた。2人も同じ店に食事に来たようだ。タンさん達とは隣のテーブルになり、タンさんとは懐かしい話に華が咲く。同じMDS2007に出場した香港のJohn(ジョン)は、翌年もMDSに出場し完走したとタンさんから聞いた。私はMDSのレース中に、「今度MDSに来る時は、30回記念大会にしたい」とジョンに話をしたことがある。その時彼は、「俺の頭には、SEIJIがMDS30回大会に出場することはインプットした」と答えていたのが印象的だったとタンさんに話をした。タンさんもMDSの30回大会への出場に、興味をそそられたような会話が続く。

Jackは、今年の5月に日本で初めて行われる100マイル(160km)レース「ULTRA-TRAIL Mt. FUJI(ウルトラトレイル・マウントフジ)」(UTMF)に出場するそうだ。富士山麗を時計回りにぐるりと一周するレース、その前にも来日して花見をすると話していた。Jack、あなたは本当にDoctorの仕事をしているのかい。

ワインをボトルで追加し、注文したPizza、Pasta(カルボナーラ)を味わうと、期待を裏切らない味で美味しい。店内も雰囲気がよく居心地は快適で、今後の食事はこのレストランでしか食べなくなった。食事を終え、一足先にタンさんとジャックに別れを告げて店を出た。ケンと2人で町を歩いていると、後ろから私達を呼ぶ声が聞こえた。樺澤さんと佐藤くんが、チャリでの観光を終えて、戻って来たのだ。昼ご飯の美味しかったレストランの話をし、2人を店に案内した。2人はレストランの前にチャリを止めて店内に入り、タンさんとジャックが食事をしている隣の席に座った。先ほどまで私達が座っていた席である。外の窓からケンと2人で4人に手を振り、昼下がりの町の酒屋にワインを買いに出かけた。

午前中に遭遇した酔いどれチリ人と接触したかったが、彼らの姿は町角から消えていた。酒屋で昨日飲んだワインの銘柄を言って、ワインを探す。ケンは、ワインをデジカメで撮影しており、店の女主人に話しかける。そして、この店の女主人にムーチョ・ガバ(すごい美人さん)と煽てるが、ほとんど動じない。昔、看板娘だったであろう彼女は、ムーチョ・ガバと言われて「当然」と言う態度を崩さないのだ。ケンと悪乗りして店のカウンターに入り込み、ムーチョ・ガバと記念撮影を開始。酒屋に配達に来ていたチリ人のトラック運転手が、私達の行動を見て腹を抱えてゲラゲラ笑っている。ワインを2本と水を購入し、ホテルへ戻った。

ホテルに戻って来てから、フロアー内でケンと2人して買って来たワインボトルを開けた。レース前に昼間から飲んだ暮れていると、明日から砂漠での野宿生活が始まるとは、到底



考えられない。気持ちよくワインを飲んでいると、フロアーにSamanthaが来たので、ビビビビビィ〜と両手で指差しビーム攻撃を開始。Samanthaもビビビビビィ〜攻撃で反撃して遊んでいると、荒井くんがホテルに到着した。「この酔っ払いのオッサン、チリまで来て何してんだ」と言わんばかりの冷たい視線を感じた。荒井くん「ホテルに荷物を置くなら樺澤さんの部屋に置けばいい」と教え、部屋に案内をする。彼は昼ご飯をまだ食べていないと言っていたが、これから食事に出掛けると夜ご飯が食べられなくなってしまう。15時にチェックインできるので、みんなで17時半頃にホテルのフロアーに集合して夜ご飯を食べに行く約束をした。16時前まで飲み続けて部屋へ移動したが、ケンとは同じ部屋になりバディーになった。私は夜ご飯に行くまでに、レースに持って行く荷物の最終確認をしながら準備をする。荒井くんは2人部屋に1人で泊まることになったが、隣室になった。彼も食事前にレースの準備をするようだ。

樺澤さんと佐藤くんは部屋で寝てしまったのか、結局5人で集合時間通りにフロアーに集まった人間はいなかった。18時過ぎに5人で、あのレストランに食事に出かけた。村上さんにも声を掛けたが、彼女はレース前の外食で、食中りすることを警戒しているため、日本から持参した食料しか口にしない。村上さんのこの行動は、エジプトレースの時もそうだった。また、レース1週間前に現地入りをして、観光しがてら高度順化を図っていたと言う。アタカマクロッシングに対する並々ならぬ彼女の思いは、呑ん衛兵2人組みとは違っている。レース後に、村上さんが弾ける姿が見てみたい。また近藤さんは、スタッフとの打ち合わせ等で忙しいらしく、食事には出掛けられない。もう一人のレースの日本人出場者である岡部(May)さんは、他のホテルに割り振られて宿泊しているらしい。

サンペドロデアタカマの町から見える、沈んで行く夕日は美しい。町全体が黄金色から紫色へと、時間が経つにつれて変化していく。昼ご飯を食べたレストランで、夜も食事することにしたが、Pizza、Pasta、Lomo a lo Pobreの「食の3大黄金トリオ」は外せない。後はワインをガブ飲みすれば、最高の食事になる。それにしても、今までワインを敬遠していたことが、本当に悔やまれてならない。しかし、ワインを飲んだ次の日は、決まって黒色便の下痢をしていた。5人で楽しい食事をしていたが、何を話していたか思い出せない。飲み過ぎである。

ホテルに戻る途中に、ムーチョ・ガバのいる酒屋でワインボトルを3本買い、樺澤さんと佐藤くんは土産物屋でポンチョを買っていた。この店では、昨日私が2着のポンチョを買っているのだから、2人は割引価格でポンチョが購入できたようだ。店の中をよくよく見ると、月紅と月桜のサイズのポンチョも売っていたので、即購入。残念ながら、利菜のサイズのポンチョだけは見つからなかったのだから、ネックレスをお土産に買った。そんなような記憶はあるが、そこからどの道を通ってホテルに帰ってきて何時に寝たのかは思い出せない。そのままベッドに倒れこんで寝ていたようだ。

サンペドロデアタカマの町は、標高2436mの高地にある。樺澤さんや荒井くんが、空気が

薄く感じると言っていたが、私には何も感じなかった。また佐藤くんは、アタカマ入りしてから早朝にランニングに出掛けていたが、息が切れると話していた。ただ1つ確実に言えることは、睡眠が浅いようで、よく夢を見る。昨夜は、近藤さんが体操着にブルマを履いて体育の授業を受けており、マットの上で「でんぐり返し」している夢を見た。そして、寝ていても1~2時間毎に目が覚めていた。これは私だけの身体に起きていたことではなく、話を聞いてみると5人に共通していた出来事であり、これは高山病の一種なのだろうか。さらに、脇腹やお腹のあたりが筋肉痛のようによく攣る。初めは気が付かないうちに汗をかいていて、塩分の過不足による症状なのかと考えていたが、違っていたようだ。この標高だと空気が薄い為に、気が付かないうちに横隔膜に負荷が掛かっており、身体が攣っていたと考える方が適切なように思える。レースのスタート地点は、標高3000mを越えた場所からになるので、「明日の昼は酒を飲まない方がよろしかろう」と判断した。

3月5日(土)

夜中に何回か目が覚めて、ペットボトルの水をガブ飲みした。酔いどれているから、喉がよく渇く。足や横隔膜の辺りが攣るので、ベッドから跳ね起きることもあり、ベッドの中でまどろんでいる時間が長い。寝付けなくても、目をつぶって身体お横たえているだけで、身体の機能の6~7割は休めていると聞いたことがある。そんな睡眠状態なので、自分でも睡眠不足しているのがよく分っていた。サンペドロデアタカマの町では、朝6時では外はまだ暗く、夜明けにはなっていない。その時間では星も瞬いているが、7時になると外は明るくなり、夜が明けてきて金星だけが最後まで輝いていた。砂漠レースに出場するならば、レース前に夜明けと日没の時間は意識して記憶しておいた方が良い。これはレースでは非常に大切なことであり、レースに出ればその意味は自ずと分かってくる。

今日は7時半前にホテルの食堂に行くと、多くの宿泊客は朝食ができるのを待っていた。バイキング形式の朝食なので、行列ができていて最後尾に並ぶ。今回のアタカマクロッシング2011には、NHKの取材クルー陣も来ており、レースのドキュメント番組を制作し放映する予定になっている。実は私は日本を出国する前に、NHKからの取材を職場と自宅で受けていた。日本出国の前日は当直勤務しており、その日の勤務風景の撮影とインタビューを消防署で撮影している。また翌日の日本出国する日も、自宅で家族と団欒する姿や駅まで見送ってくれた状況も取材されていたのである。どのようなテレビ番組になるのかは分からないが、自分が出場する砂漠レースがテレビ放映されることは、本当に嬉しく思う。「子供たちが成長し、録画したものを見せたら、どんな反応をするのか」、とても興味に尽きない。スタッフの皆さんも同じホテルに宿泊しており、朝食後は慌ただしく撮影の準備に追われていた。

朝食を食べながら日本人選手たちと様々な話をするのだが、レース前になると、レースの話や過去のレースでの話をする人が多い。村上さんがサハラレース2009での話を始めた。レース中に、ある外国人選手と一緒に走り、同じペースで前後しながらCPを目指して

進み、いろいろと村上さんに英語で話しかけてきて、気使ってくれていたそうである。村上さんは、その選手の親切さに感謝しつつ、自分のペースは遅いので、「私のことを気にしないで、先に行ってください」と言う気持ちで、「Get away!」とその選手に言い放ったそうである。しかも村上さんは、その親切にしてくれた選手に、「Get away!」を連呼しながらボディランゲージしていたと話していた。後日、日本に帰国した村上さんは、英会話教室の先生にその話をすると、そういう時は「Go ahead!」と言うように教わったそうである。しばらくの間は、村上さんと話をしていると、途中で村上さんに「Get away!」と私が言って、腹を抱えて笑うことが多くなった。

朝食後、レースで使う荷物以外はホテルで預かってくれるので、スーツケースに荷物を詰める作業を行った。10時からLa Casa De Don Tomas Hotelで全体のブリーフィングがあり、各ホテルに分散して宿泊していた選手たちも、荷物を持って集まってくる。そしてブリーフィング終了後には、指定されたグループ毎に順次装備検査が始まる。私は荷造りの途中に、ポンチョを持って樺澤さんと佐藤くんの部屋に行き、「昨日2人が買ったポンチョを着て、3人で写真を撮らないか」と提案した。早速ホテルの中庭でポンチョ3兄弟の写真を撮っていると、プロカメラマンのZandyがやって来て、レース前の写真として撮ってくれた。スーツケースの荷造りは順調だったが、レースに持って行くバッグバッグの方は、50%と大型のバッグなのに装備が入りきらない。それでも、今夜と明日の朝食の食料は、別に分けて手荷物にしたのだが、先が思いやられる。バッグバッグに入りきらない荷物は、バッグの外付けやポケットに仕舞い込んで対応した。

ガラビィーヤの左胸に、川崎市消防局のイメージキャラクターの「太助」のシールを貼り付けた。消防局庶務課の風間係長にお願いをし、今回特別にシールを作ってもらった代物である。一番目立つ場所に「太助」を貼り付けたつもりだったが、ご利益があるかはお楽しみ。

ホテルのフロントから中庭を通過して、ホテルの別棟の奥までピンクフラッグが続いていた。ピンクフラッグは、RACING THE PLANETの企画する砂漠レースではお馴染みの物で、選手たちはピンクフラッグを目印に先に進んで行く。その先が目的地であり、CPやBPにたどり着くための、見落としとしてはいけない目印なのだ。このピンクフラッグがない場所を進むことは、Lost Wayしたことを意味する。レース中であれば、ピンクフラッグを最後に見た場所まで引き返して、フラッグを探してルートを確認してから、進むことになる。レース中に前を進むランナーを目印に進んでしまうと、時としてLost Wayすることになる。また、砂漠に残る足跡だけを追うのも危険である。だから、数100m先にあるピンクフラッグと、先に進んでいる選手の姿を確認しながらレースをして行くことが、Lost Wayしないコツでもある。ただ、疲労が蓄積し日中の暑い最中で、見通しの良いルートで車が通れるような道などでは、何も考えずにその道を進んでしまう危険性がある。砂漠の中で水切れすることはとても辛い、Lost Wayをすると本当に悲しくなる。

ホテルの中庭を抜け別棟へ続く道の間の道路脇に、水路が引かれていた。水路と言うのか小川と呼ぶべきか迷うのだが、人工的にOasisに引き込んでいる水には変わりがない。小川の上には小さな橋が架かっており、橋の上でタバコを吸っているとZandyが来たので、少し話をした。Zandyと話をしていると、Samanthaがやって来るのが見えた。私はSamanthaに南極レースについて話しておきたいことがあり、彼女に声を掛けると、つたない英語に関わらず耳を傾けて話を聞いてくれた。LAST DESERTS 2012(南極レース)に出場を考えているが、私の嫁さんに話をすると、「男はいいよなあー、自分の好き勝手なことばかりできて。私にも2週間の休みをくれ! 子供たちのうち1人を砂漠に連れていけ!」と言われ、取り付く島もない。それでもアタカマレースに完走できたら、次はLAST DESERTS 2012(南極レース)に出場を狙っていると話をした。南極レースは隔年でレースが開催され、出場選手も50名ほどと人数制限がある。これは、チリ政府から南極観測船をチャーターし、ドレーク海峡を越えて行くので、船に乗れる人数が決まっているためである。私は過去にゴビマーチ2008とサハラレース2009を完走しているので、既に南極レースに出場する権利は得ており、招待状はすでに届いている。Samanthaに話をしておけばエントリーを代行してくれると思ったのだが、日本に帰国してから自分でエントリー手続きをしなければならないことが分かった。Zandyに、「もちろん来年の南極レースにも同行するのでしょうか」と聞くと、「俺も南極に行きたいけど、Maryに同行を頼まれないと行けない」と話していた。MaryはRACING THE PLANETの代表者であり、「Maryには、私からZandyも連れて行くように話しておくよ」と言うと、Zandyは素敵な笑顔で喜んでいて。Maryに、私の拙い英単語での会話だけで話が通じるものなのか、心もとない。

10時前にブリーフィングが行われる別棟の中庭へ移動すると、多くの選手とスタッフが集まっていた。装備チェックやレースのパスポートが交付する場所なども作られている。私は砂避けのBUFFを家に忘れてきたので、BUFFを購入するためのスタッフ売店を探すと、一番奥にお店があった。BUFFは必ずしも必要な装備品ではないのだが、4DESERTSシリーズでは、その大会毎にBUFFのデザインが違うので、レースに出場した記念として買うことにしている。10時になると時間通りブリーフィングが始まった。日本人選手は固まって話を聞いていたが、Mayさんの姿はまだ見ていない。村上さんに「Get away!」ネタで話をすると、笑ってしまうのだが、笑うと横隔膜の辺りが攣って痛い。以前の4DESERTSシリーズで、同じレースを走った砂漠フレンズたちの懐かしい顔も見える。ブリーフィングと装備品チェックが終われば、バスに分散乗車してスタート地点の砂漠に拉致される。いや砂漠に帰還すると表現すべきか。私にとって砂漠は聖地であり、素敵な場所で楽しい時間が流れていき、人間の本来の姿に戻れる場所だと考えている。ただ砂漠に行くだけでは味わえない、素敵な出会いが待ち受けているし、そこには1人1人にドラマが存在する。砂漠レースに出場するリピーターが多いのには、「過酷なレース」を求めてと言うよりも、「魅了されるレース」を求めて、世界中から人が集まってくるのではなかろうか。やはり砂漠レースに出

場してみなければ、この感覚は味わうことのできない醍醐味なのであろう。

ブリーフィングの途中で、荒井さんが内容をかいつまんで通訳をしてくれたので助かる。以前までは、BPでのトイレはテントから100m以上離れた場所であればOKだったのだが、今回はトイレで必ず用を足さないといけない決まりが出来ていた。選手・スタッフ総勢約150名が、BPで各々が勝手に用を足せば、衛生的にはよろしくない。その土地や地域を、生活圏にしている砂漠の民にとっては、迷惑千万極まりない行為である。自然保護の観点からも、すばらしい試みだと思った。

1時間に渡るブリーフィングも終わり、次は各グループに分かれての装備品チェックになった。日本人選手のグループは、11時からのチェックの時間帯に入っており、すでに順番待ちの長い行列が出来ている。私は一度ホテルの部屋の戻り、腰に巻いて着けるポーチを取り替えることにした。村上さんと一緒に歩いていると、「村上さんですかあー」と声を掛けてきた人がいる、Mayさん登場。Mayは外国人選手と集まって話をしていたようだが、肩に着けた日本国旗のワッペンを見て村上さんに挨拶をしたようだ。ここで「Get away！」が村上さんの口から炸裂することを期待したが、外れた。

ホテルの部屋に戻って、スーツケースから大き目のポーチを取り出した。当初は、容量の小さいポーチでのレース出場を考えていたが、レース中に行動食を食べたり、サプリメントを飲んだりもするので、大き目のポーチの方が、利便性が高いと判断したためである。バッグバッグから1回1回荷物を取り出しては、手間が掛かりすぎるし、ポーチの活用頻度は高く、大きめのポーチの方が使い勝手が良いと考え直したのである。慌てないでポーチの中身を全て入れ替えたつもりだったが、思わぬミスをしていた。この時は気が付かなかったが、レース3日目になって移し変えていないモノが必要になり、愕然とする破目になる。

装備品チェックでは、レース中のパスポートの交付、装備品の重量測定、審査書類等へのサイン、携行必需品の確認、食糧及び電解質飲料や常備薬とサプリメント等のチェックが行われた。NHKの取材クルーの方も、各選手の装備品に興味があるようで、シートの上に広げられた物をカメラで撮影し、選手にインタビューをしていた。トップ選手だと、バッグバッグの総重量は7~8kgになり、非常にコンパクトに荷詰めされている。ケンの食料のパッキングは、スーパーの袋にまとめて入れてあるだけだったのには笑った。頭の中で1週間分の献立表が出来ているのか、小分けしていない理由は彼なりにあるのだろう。私も最初に出場したMDSでは、ケンと同じように、スーパーの袋に食料品は一括して入れておいたのを思い出す。私のバッグバッグの重量は12.5kgあり、水を積めば重さは14kgを超える。食料品や生活必需品等の消費量が1日あたり約700~800gとしても、常にレース中は8kg以上の荷物を背負ってのレースになる。装備品の不備もなく指摘を受けなかったが、「俺は凧を2機持ってきたよ!」と言って、バッグバッグの外付けしている凧を見せると、スタッフがパスポートに「KITE」と書いてくれた。

バスの出発は13時の予定になっていたが、バスに乗り込んで出発したのは30分以上遅れからであった。バスはサンペドロアタカマの町を離れ、砂漠の一本道を高速走行で進んで行く。バスの振動が気持ちよく寝不足も手伝って、いつのまにか眠りに落ちていた。何十分寝ていたのだろうか、バスがガタガタ揺れ出して目が覚めると、舗装されていない土の上の道をバスが進んでいた。時には小川を越えて、傾斜のきつい坂道も登って行く。後ろの座席の人が前に来て、トイレ休憩をバスの運転手に要求すると、道幅が少し広がっている場所でバスが停車した。数人の選手が用を足しに行ったので、私も彼らの後に続いてバスを降りた。バスが停車した右側は崖になっており、岩陰に隠れて用を足す。ここは砂漠と言うよりは岩石砂漠であり、全くの無音世界である。バスに戻ると直ぐに発車し、凸凹道を登って行く。途中でピンクフラッグが地面に刺さっている場所があり、バスで明日のコースを逆走しているのが分かった。しかし翌日のレースでは、結局そのコースは通らなかったのは、急遽、コースが変更されたのであろうか。

前を進んでいたバスが、小川でスタックして止まっているのが見える。私たちが乗っているバスも停車し、みんなバスから降りて野次馬と化す。また、トイレ休憩になって、みんなが放尿プレーをしていた。スタックしたバスの運転手が、バスのタイヤの下に角材を入れている。運転手はバスに乗り込みバスをバックさせ、選手たちがバスの前から押して手伝っている。バスを一旦バックさせてから、バスに勢いをつけさせて前に進み、一気に小川を越えていく作戦のようだ。バスが前に進み加速して小川を渡ると、ガリガリと音がして、バスの後部バンパーが折れ、残骸が道に転がっている。選手の中からは、「さすが RACING THE PLANETだ!」と歓声が上がっていた。

エジプトレースでは、スタート地点に向かっている途中に、私が乗っていたバスの後方から黒煙が充満してきた。選手が騒ぎ出し、運転手がバスを路肩に止めて後部のハッチを開けて見ると、ファンベルトが焼けていた。結局、代替のバスが来るまで、砂漠の中で5時間ほど足止めされたのを思い出す。今回は、サンペドロアタカマの町から2時間ほどでスタート地点に着くと聞いていたので、この場所からはそんなに時間は掛からないだろう。バスも普通に動き出し、選手を乗せて15分ぐらい走ると、スタート地点に到着した。

バスから降りると、バッグバッグを背負い早歩きで、自分が割り振られているNO.4テントを目指す。テント内の場所取りは、早い者勝ちと決まっているのだ。レース中では、早くテントに戻ってきた者の順に、奥からスペースを確保して行く。私は、この日以降、奥の角位置に寝ることはなく、専らテントの入口付近の場所が定位置になってしまった。テント内に荷物を置き、寝袋をいち早く敷いて、明日の準備に取り掛かる。樺澤さんが凧揚げをしないのかと誘うので、一緒にすることにした。今回持参したゲーラカイトは、赤色と青色の2機。赤色のカイトに、消防局のキャラクターである「太助」のシールを2枚貼り付けて、樺澤さんに貸す。私は青色のガラビィーヤに合わせて、青色のカイトを飛ばした。夜ご飯までにはまだ時間が早いので、2人で凧を揚げて空に泳がせていると、他の選手たち

の呆れ顔を見ることができた。テント村は、荒涼とした溪谷の谷間にある広いスペースにBPが作ってあるのだが、周りの谷が高いので空が狭く感じる。ここは虹の谷と呼ばれる場所だと聞いたが、年間10mmしか雨が降らない世界一乾燥した地域なのに、果たして虹が見えるのだろうか。夕方17時を過ぎると、風が冷たく強く吹き始めた。ガラビィーヤだけでは寒くなり、トレーナーを着込みながら凧揚げをしたが、どんどん風の強さが増して行く。凧揚げを切り上げ、早めに夜ご飯にありついた方が無難だと思い、凧を片付けた。

テント村の中央には、選手やスタッフが飲食できるように丸テーブルと椅子が置かれていて、1つの丸テーブルの上には果物と飲み物が用意されていた。これは大会側からの差し入れで、今日限りの特典で誰でも自由に飲食することが出来る。その丸テーブルの横では、焚き火に大きな薬缶がかけられ、お湯が沸かされていた。暖を取りながら夜ご飯を食べている人もいれば、飲み物を飲んでる人もいる。このお湯でアルファ米やインスタント食品を作って食べるのだが、レース期間中は料理や食事という言葉とはかけ離れた飲食を続けていくことになる。つまり、250km先のゴールまでたどり着けるカロリー摂取が必要なだけで、味や食料品の形に拘らないランナーも中にはいる。私は食事が一番楽しみなので、自分なりの献立を考えて用意してきているが、持参する食料品に関しては毎回失敗している。食料品の重量と味、栄養のバランスを考えて準備するのだが、必ずレース中に胃が食べ物を受け付けなくなり、食べても胃に不快感が残ってしまう状態が起こる。前の砂漠レースで美味しく感じられて食べていたものが、次レースでは食べられなくなることもよくある。得てして、固形物のアルファ米は、特にレース中盤以降になると食べる気力も失せてしまう。お湯戻しをしたアルファ米を、スープの中に入れて雑炊にして食べる工夫をしても、喉に通っていかない。

食事の用意をしていると、テントの前に宅配ピザが置かれていた。こんなご馳走が砂漠のテント前に落ちているはずもなく、Mayさんが親しくなった外国人選手にピザをプレゼントして持参したらしい。私が寝泊まりをするテントには、9名の選手が振り分けられており、テントの中では9人が揃えば寝るだけになってしまう。テントの中ではイギリスのWandaさんが、他の選手に針治療をしてもらっていた。日本や韓国、中国では針治療を昔から行っているが、西洋でも針治療をするとは珍しい。Wandaさんの悲鳴がテント内に響いていたが、針治療は気持ちが良いものではないらしい。夕食を持って丸テーブルに座ると、日本人選手が集まってきての食事になった。だいたい同じ国の人同士が集まって食事しているのは、日本人と韓国人が多い。今回のレースでは、韓国の選手が出場していないので、少し寂しい気がする。今日の夜と明日の朝ご飯は、バッグバッグに背負ってレースをする必要がない重さなので、みんな重量のある缶詰やレトルト食品を食べている。私は卵の燻製を持って来ていたが、これが一番美味しかった。

寝袋に入り寝る準備をして身体を横たえるが、風がとても強く、テントをバタバタと揺らしている。夜の0時頃には風が止み、静かになった。朝方まで数回トイレに起きたが、テ

ントの外は底冷えすること、この上ない。トイレで排尿して外に出ると、戦慄悪寒がして立ってられなくなり、しゃがみ込む。何とかテントまで戻り、寝袋の中に潜り込むが、ガタガタ身体が震えていた。気温を確認すると5℃、夜中のトイレ往復が苦痛になったが打つ手はない。浅い眠りを繰り返し、尿意が生じると寒さに耐えてトイレまでの往復をするのだが、星空だけは美しく瞬き、心だけは暖かく感じていた。

3月6日(日) STAGE1:Navigation By Rock 距離:35.2km 標高3263m~2627m

5時50分に起床すると、すでに樺澤さんとイギリス人選手3名がレースの準備をしていた。今日から、いよいよレースが始まる。アタカマクロッシングと言うレースの存在を知り、出場を意識してから丸4年半。「必ずアタカマ砂漠のスタートラインに立ってやる」と、強く決心した日を思い出していた。自分の考えを、時に流されることなく貫き通せたのは、家族の協力と職場の理解の上に成り立っている。1週間後、サンペドロデアタカマ教会の前でゴールする自分の姿を想像しながら、レースの準備を始めた。外はまだ暗闇に支配されており、空には星が輝き続け、空気が冷たく、とても澄んでいる。夜明けまでには時間があるが、スタート時間は8時と決まっており、7時半からはコース説明のブリーフィングが始まる。

アルファーマにお湯を注いでもらい、コッヘルにお湯を張ってレトルトのキーマカレーを湯に浸す。その合間に、昨日ホテルの風呂場でツルツルに剃毛した両下肢に、ピップエレキバンを張り付けていく。そう言えば、私が風呂場でシャワーを浴びる前に、トイレで用を足していると、ケンがデジカメで写真を撮ろうとしていた。私がトイレのドアを閉めると、わざわざトイレの扉を開けて写真を撮った行為は、痴漢行為の現行犯であり、ケンには犯罪者だ。そんな出来事を、エレキバンを見て思い出したが、特に意味はない。ピップエレキバンは、毎回砂漠レースでお世話になっている品物であり、予め下肢の血管や筋肉痛が起こりそうな位置に張り付けておくと、筋肉痛があまり感じなくなる。筋肉痛の予防対策だが、今回もいい仕事してくださいね。

朝ご飯には、キーマカレーとツナ缶、やきとりの缶詰を食べた。水分補給もしっかりできており、浅い眠りではあったが、10時間は身体を横たえることが出来たので、体調はすこぶるいい。ただ、横隔膜付近の筋肉痛の様な痛みは、時々身体に襲ってくる。問題はバッグバッグの重量で、前検日での測定では12.5kg、ポーチの中身の重さと水を積み込んだ重さを加えれば、14~15kgになる。このバッグバッグの重さは、最初に出場したMDSに匹敵するぐらいの重量なのだ。私の脚力では、全ての砂漠を走り越えて行くことはできないし、そこまでの体力練成をして砂漠レースに臨むつもりはない。決して観光では訪れることのできない砂漠の中がコースになっているのだから、自分流のスタイルでレースを楽しむ。私はレース中には、走れるコースでは小走りをし、柔らかい砂地や斜面の登りは歩くようにしている。しかし、背中の荷物が重ければ膝と腰を痛め易く、まだ身体も砂漠の環境に



順応していない。今日は様子見で1日歩きにしようか、荷物が軽くなるレース3日目辺りまでは歩き中心で行くか、とても弱気な考えが思考回路を占領していた。

7時過ぎになると、空がだいぶ明るくなってきた。辺りは谷が囲んでいるので太陽の姿は見えない。お湯を沸かしてくれたチリの現地スタッフの方が、楽器の演奏を始めた。砂漠の中で聴く贅沢な楽器の音色が心地よく、弱気な気持ちでレースに臨もうとしていた考えが消えていった。もっと楽曲を聞いていたかったが、パッキングが終わっていない。2曲だけ演奏している近くで聞いてから、テントに戻った。テントの中からも、心に響く演奏が聞こえてくる。相変わらずパッキングは苦手で、7時半のブリーフィングが始まっても、テントの中でゴソゴソと準備に追われていた。スタート10分前になって、ようやくパッキングが終了し、準備よし!テント内では樺澤さんが、まだパッキングに追われていた。準備が終わっている佐藤くんに、寝袋を折畳んで袋に収納するように頼んでいたが、私より早い時間に起床していて、この体たらく、実に素晴らしい。

テントの外にバッグバッグを運び出し、トイレに行ってから一息ついていると、スタート3分前のアナウンス。近藤さんにカードのスキャンをしたかと尋ねられ、慌ててスタートライン付近にいる係りのスタッフの下にカードを持って走って行く。全ての準備が整ったのは、スタート1分前だった。バッグバッグを背中に担ぎ、ゆっくりと定位置の最後尾に歩いて行く。英語での10カウントダウンが始まると、スタートラインに集う砂漠狂の血が騒ぎ始めるのか、みんなのボルテージが最高潮に盛り上がる。そしてスタートが切られると、各々が歓声を上げて砂漠へ飛び出して行く。「これから1週間、素敵なお砂漠レースに出場できたことに感謝し、必ずゴールゲートに帰って来る」と左手の指輪に話しかけkissをした。ゆっくりとスタートラインまで歩いて行き、スタートゲートにストックでタッチしてから走り始める。自分のペースで砂漠を走り歩き、他人のペースに巻き込まれないことが、砂漠マラソンでは重要である。優勝争いをするトップ選手たちの駆け引きは、私の伺い知り得ない世界だが、私には私のレースの仕方がある。

昨日バスで登ってきた道を、スタートしてから下って行く。踏み固められた地面に、石が混じる下り道を走る。「ここで走らなければ、砂漠のどこで走れるのか」と言う気持ちになっており、レース前の弱気な考えは、アンデス民謡と共にスタート地点に置いてきた。左手側が東の方角のようで、太陽が谷間から顔を出している。早朝の冷え込みが強かったのも、ガラビィーヤの下に長袖のアンダーシャツを着込んでいたが、10分も走っていると、顔から汗が滴り落ち、アンダーが汗で湿ってくるのが分かった。前後の風景の写真を撮っていると、約30m後方にケンが走っているのが見える。いつの間にか抜かしていたようだ。スタートしてから何人かの選手を抜いているが、順位を気にしてレースをしていないので、誰が前にいるのか分からない。樺澤さんと佐藤くんは先頭集団でレースを進めているだろうか。そのまま30分以上走り続けると、前方でコースは右上の上り道になっており、選手が登って行くのが視認できる。まだ人がバラけていないので、ピンクフラッグ

を追うより、人の姿を目視して進行方向を確認した方が分かり易い。

上り坂の途中でバッグバッグを背中から降ろし、ガラビィーヤの中に着込んでいた長袖のシャツを脱いだ。後から来る選手に、追い抜かれ様に声を掛けられるが、これは暗黙のルールのようにになっている。私のペースぐらいで走り歩きする人は、順位を気にしてレースをしている人は少ないので、何かトラブルがないかの確認なのである。また、「バッグバッグから何か取って欲しいものはあるか」と追い抜き様に、私から声を掛けることもあった。アンダーシャツをバッグの外側のチャックの中に入れておくと、荒井くんが元気に私を追い抜いて行った。彼は砂漠マラソン初挑戦だが、自分のペースでレースをしているように見える。私が最初に出場したMDSでは、前半のオーバーペースがたたたり、CP2では塩分不足も相まって熱中症になり、先を急いで進むと全身筋疲労で身体が攣り動けなくなってしまった。コース上を巡回していたDoctorに発見され、砂漠の中で5本の輸液処置をしてもらい、コース復帰した苦い思い出がある。彼の走り歩きをする姿を見る限り、警戒しながらレースをしているように思えた。

まだレースの序盤であるが、砂漠が涼しい内に、走れるところは走っておく。それにしてもバッグの荷物が重く、その重さで身体が左右に振られながら走っている感じだ。コースは途中から、車も通れるような地面の硬い土に変わり、両側に木の杭が打ち込んである1本道が続いていた。杭の中側には重機が置いてあるのも見える。こんな砂漠の中で、何の工事をするのだろうか。

CP1までのコースはDifficultになっており距離は10.8kmだったが、9時40分に着くことができた。CP1ではSamanthaが出迎えてくれ、彼女に向かって両手で指差し、指を前後に動かしてリロリロ攻撃をすると、Samanthaも笑顔で応じていた。私はCPに着くとバッグバッグを背中から降ろし、必ず椅子に座るようにしている。水筒に水を足し、タオルを水で濡らして頭に巻く。この間に、Mayさんが休憩をせずにCPを通過して行った。Mayさんは今回のアタカマレースを完走すると、日本人女性初となる、4DESERTSシリーズのグランドスラム達成者となる。CPを出る準備が出来たので、バッグバッグを背負いタバコに火を点けて歩き出すと、Samanthaが「Seiji is crazy !」と言って笑っていた。CP1以降は、Moderateコースになっており、12時までには着くだろう。CP1を出てタバコを吸い終わるまで歩いていると、前方に岩壁が広がっており、選手が登っているのが見える。その岩壁を登る為には、手前にあるいくつかの崖の谷間を越えていかなければならない。私は両手にストックを持っているのだが、このストックが私の第3の手足になり、後押ししてくれる。

岩壁をゆっくり登って行くと、南アフリカのAndy Shepardの姿が見える。彼は背中のバッグバッグを気にしているようだった。Andyとは、ゴビマーチ2008で一緒だった選手で、レース中どこであっても笑顔で声を掛け合う仲になっている。Andyに「Let's help something.」と声を掛けると、何やら英語で答えていたが、要はストックを取って欲しいと私は解釈し、彼のバッグからストックを取って手渡した。Andyに、他に何か手伝うこと

はないかと聞いたが、「It is not at all. Thank you.」と言うので、「ゆっくり先に行くから、また後でね」と別れを告げて、先に歩を進めた。

岩壁を登りきると急に視界が開け、傾斜の強い1本道がUp Downしながら遠くまで続いている。ピンクフラッグの先には、前を進む選手が米粒ほどの大きさで見えている。上りは歩くが、下りは走って進んで行く。あの最後の急傾斜の丘を登り切った向こう側には、何が見えるのだろうか。空は青く澄み渡り、土砂漠の中での一人旅、気分は上々！雄叫びを上げて、大きな声で歌い出す。他の人に見られたら、気が触れた輩にしか思えないだろう。しかし砂漠レースでは、信じられないだろうが、私の様な行動を他の選手もとっているのである。Up Downの丘を、鼻歌交じりで越えて行く。最後の傾斜の上りは急であったが、登り切ると下界一面に荒野の砂漠が、見渡す限り広がっていた。空の青さと無機質な砂漠が、大きな1枚の絵のように感じ、パノラマで視界に映る。下界には砂漠の中の1本道が数km先まで伸びて続いており、遠くにランナーがいるのも視認できた。折角だから、この場所でデジカメを使い、タイマーをセットして写真を撮ってみた。果たして上手に取れているだろうか。日本では絶対に見られない光景なので、しばらくの間バッグバッグを背中から降ろして、砂漠の景色を堪能する。砂漠の中での贅沢な時間を味わった。

荷物を背中に背負い直し、急な下り斜面を駆け下りた。そのまま直線で下り続けるのかと思っていたら、途中で道が左側に曲がっており、その先は右に大きくカーブしている。丘の上からは、おおよそ300mほどの標高を下り降りるので、直線的に降りるには傾斜が急すぎる。道が迂回して下りるようになっているのは、人の手によって人工的に作られたようにも見える。もしかしたら私が通ってきた道は、昔インカ道として砂漠を越えて行った人たち作り、交通していたのかと思うと、非常に感慨深い。砂漠の中の1本道を自分のペースで走り歩きして越えて行く。地面は硬い砂地に石が混じっていて、起伏が激しい。砂漠には太陽の光を遮るものなどは皆無で、空には雲も見えない。

前に外国人女性がいたので、追い抜きざまに声を掛けるとMayさんだった。Mayさんは、今回のアタカマクロッシングを完走すると、日本人女性では初となる4DESERTSシリーズのグランドスラム達成者になる。昨年11月の南極レースにも出場され、今大会でも多くの砂漠フレンズとの再会を楽しんでいたようである。1本道が終わると、ピンクフラッグが干上がった河川の中に見えてきた。昔はアンデス山脈の雪解け水が流れていたのだろうか。川幅も広く、クネクネと曲がり道が続いており、川を下るコースになっていた。レース初日から冷たい川に入らなくて済んだが、石の多い砂地を、前を進む2人組の選手を目印に追いかける。2kmぐらい干上がった河原のような道を進むと、急に視界が開けだし、地面の硬い砂と土が混合した起伏のある道に変わった。CP2までは遠くないと感じていたので、小走りしながら前を進んでいた2人を抜かして行く。右手の方角に、人が1人立っているのが見えた。ピンクフラッグからは外れている場所にいるので、何をしているのかと思っていたら、私の方へ走って近づいて来る。NHKのテレビクルーの人が、カメラを片手にやって来たのだ。

砂漠の中で選手の撮影をするのも、大変な労力を要すると思う。そのまま1km弱ほど走り続けるとCP2に到着、近藤さんが笑顔で出迎えてくれた。

ここまでは、特に筋肉痛や頭痛などの症状はなく、高山病の症状と思えるものは表れていない。バッグバッグを降ろして椅子に座り、水筒に水を移し変えてから行動食をポーチに詰める。荷物の重さだけが気にかかり、足腰に負担が掛かっているのだけは否めない。行動食に用意したパリンコと海老の華の煎餅を食べるが、とても美味しい。Mayさんが後からCPに着いたが、水の補給だけして直に出て行った。CPで休憩するかしないかは、本人の自由ですが、Mayさんのそのタフネスぶりには脱帽です。私はどこのCPでも、最低10分程度は休むことにしている。ボーとして休んでいるのではなく、次のCPまで行く準備をしていると、それぐらいの時間が経過してしまうのである。エビオスや固形塩を飲み、タオルを濡らして頭に巻きつけてから出発。

足場が悪い柔らかい砂地に、大きな石が転がる起伏の激しい道、走れるところは走って砂漠を横断して行く。途中でMayさんに追いついたので、「インカの神の贈り物」と言ってビーフジャーキーと煎餅をプレゼントしておいた。遠くに溪谷のようなものが見えるが、選手がその辺りで消えて見えなくなる。溪谷の手前に中間地点を示すフラッグが立っていた。CP3までの距離は10.2kmなので、残りは5kmほどの計算になる。溪谷地帯に入ると、足場は柔らかい砂地で上りになっていた。歩きに変えて進んでいると、両下肢に違和感が出てきた。固形塩を前倒しして早めに飲んでいると、スタートしてから小用をしていないのに気がついた。小まめに水分補給はしていたが、砂漠レースで尿が出なければ、脱水症状になりかけていると判断するのがセオリーである。最初は気にしていなかった両下肢の違和感が、痛みが変わって増強していく。歩くペースも遅くなり、バッグバッグの重みが苦痛に感じる。長い溪谷沿いの道をノロノロ歩いていると、何処からともなく1匹の蠅が頭の周りに飛んで来た。頭に巻いたタオルの水分が欲しいのか、手で追い払ってもブンブン旋回している。100m、200mと歩いて進んでも、蠅も一緒になって飛んで来る。この蠅も相当な強情なヤツか、暇なのか。それにしても自分が歩く速度は、蠅に追い越されるほどでしか進めないとは、本当に情けない。

前方に1台の車が止まっているのが見えた。蠅と一緒に車に近づいていくと、観光客の夫婦と娘が声を掛けて応援してくれた。手を上げてスペイン語で「Hola!」と挨拶すると、婦人が英語で「The checkpoint 1km ahead more.」と教えてくれた。あと1kmも歩けばCPに着くと分かり、喜んだ。10分歩いても20分歩いてもCPは見え、登りの溪谷の道がクネクネと続く。「あのクソババー、ぬか喜びさせやがって」と大声で叫ぶが、その声も谷の斜面と足場の砂地に染み込んでいく。バタバタと何か風になびく音が聞こえてきた。歩を進めて行くと、その音が段々と大きくなり、CPの目印になっているRACING THE PLANETの幟旗が見えて来た。旗は強風に煽られて元気よく揺れているのだが、CPの姿は見えない。溪谷の登り坂もここまで、そこから50mほど下った場所にCP3があった。口から出そうになった

「Give up」の言葉を何回も飲み込み、歩き続けて途中で腰を降ろして休まなかったのは、正解だったと思う。休みを入れると足の筋肉が冷えて、余計に動き難くなるからである。5kmに及ぶ砂地の上りの難所を乗り越えたので、残りはBPまでの3.5kmでSTAGE1終了となる。

渓谷の入り口から続いていた道は、四輪駆動車が通れる広さの道幅があり、途中で何回か車と擦れ違っている。CP3を出てしばらくは歩いていたが、下り坂なので走り始める。渓谷から抜け出たので、視界が急に開けてくる。遠くにアンデス山脈が望め、手前側には荒涼とした砂漠地帯が広がっている。景色が良いから写真を撮りながら進んでいた。ふっと気が付くと、ピンクフラッグがない。私が進んでいる道には、1本も目印の旗が地面に刺さっておらず、「Lost way」したと思い後ろを振り返った。今まで下ってきた坂道の、500m先に選手がいるのが見える。その選手が私に向かって手を振り、右側の方向を手で示して合図をし、その方向に消えて行った。砂漠マラソンをしていて、レース中に水切れとLost wayすることほど、精神的なダメージが強く悲しいEventはない。意気揚々と下って来た道を、今は頭をうな垂れて上っている。選手が消えた辺りでピンクフラッグを確認し、右に曲がったつもりだったが、先に進むと行き止まりになっていて、足跡だけが残っている。先程の右に曲がる前のピンクフラッグの場所まで再度戻り、目を凝らして先程の選手を探すと姿が確認できた。その方向に進んで行くと、ピンクフラッグが隠れるように地面に刺さっている。ドリフターズなら、「ハァ〜、ビバドンドン♪」だなと気を取り直して、前に行く選手を追いかけて走る。車が交通できるような道を走らせないで、足元の悪い石礫砂漠にコースを取らせるとは、流石にRACING THE PLANETのレースだと、妙に感心していた。何故なら、私が間違えて進んでいた道は大きく迂回しているが、今進んでいる道と合流していたからだ。前の選手に追いつき、「Lost wayを教えてくださいありがとうございます」と声を掛け、走り続ける。ようやく今日のBPが見えてきた。選手のゴールを知らせる懐かしい太鼓の音色が、砂漠に響き渡る。ゴールゲートに、ストックでハイタッチしてJump! そのまま両足が攣ってしまい動けなくなってしまった。慌ててスタッフがテントから飛び出てきて、私のバッグバッグを降ろすのを手伝ってくれた。スタッフの介護を受けながら椅子に座り、STAGE1のゴールの味を噛み締めた。

STAGE1 35.2km 6時間50分21秒 68位

ゴールでは樺澤さんが出迎えてくれ、「4位でゴールした」と嬉しそうに、そして誇らしげに話していた。樺澤さんにテントまで水を運んでもらうと、荒井くんもゴールして隣隣のテントで休んでいた。荒井さんのテントの中には彼しか居らず、他の選手はまだ砂漠レースを続けている。自分のテントに入ると、テントの中では佐藤さんとイギリス人選手3名が早くもリラックス状態で休んでいた。樺澤さんの話では、上位20位以内にテント・メイト5人が入っていて、今後もテント内の熾烈な角位置争いが勃発するとのこと。私がこのテントの奥の角位置で寝るためには、私がリタイヤしない限りGETすることはできないだろう。

テントに戻っても筋肉痛は続き、全く尿意がしない。まずは粉末のVAAMを水溶きして、胃の中へ流し込んだ。私が用意している水筒の容器は、2.5ℓのチューブ付きの水筒と500mlのボトル1個だけ。2.5ℓの容器には水だけしか入れず、500mlの方には電解質飲料（VAAM）を入れて飲むようにしている。スタートしてからゴールするまで排尿していないのは、完全な脱水症状。VAAMを2回作り、一気に飲み干してしばらく様子を見るが、排尿して尿が普通色に戻るまでは、水分補給を継続しなければならない。

頭に巻いたタオルを外し、テント前の焚火でお湯を沸かしているのので、タオルを湿らしに行く。タオルを熱いお湯で湿らし、顔から手足を拭いて行くと気持ちがいい。さらに、タオルをお湯で洗い直してから全身を清拭した。濡れタオルが身体に沁みるのは、お湯の熱さではなく日焼けの痛みなのだが、疲労感が抜けていくようで、とても心地がよい。焚火を起こしてお湯をサポートしてくれるチリの現地スタッフの人に、「Muchas gracias」とスペイン語で感謝の言葉を言うと、「お前は昨日、凧を揚げていただろう。今日は凧揚げをしないのか?」と聞かれた。「今日は足が痛むので、明日にするよ」と、英語とボディランゲージで答えたが、お互いに意味を理解し合うのに時間がかかった。

レースではBPに着くと、ペットボトル1.5ℓの容器に入った水が、1人に3本ずつ支給される。MDSでは、この水で翌日の朝までの食事、更には飲み水としても使わなければならない。しかし、RACING THE PLANETが企画する4DESERTSシリーズでは、お湯はフリーで支給されるので、自分で湯を沸かす手間が省けるし、その分の水分補給に制限がない。このお湯を最大限に利用できることは、砂漠レースをする選手にとっては非常に有難い。一度テントに戻って、液状バンテリンを身体に塗りたくる。隣で休んでいた佐藤さんに、「後で背中に塗ってくれないか」とお願いをし、ペットボトルを片手にぶら下げて歩き出す。サーバーテントにメールチェックに行くが、両下肢の筋肉痛があるのでロボットが歩いているようだ。

私宛に届いていたメールを確認すると、嫁さん、友人の金谷(かなけん)さん、宮崎消防出張所の早坂所長、野川救急隊の熊谷隊長から、応援メッセージが届いていた。ビィーフジャーキーを摘みながら、PC画面を見つめてメールの内容を読んでいると、突然に目の視点が前後し出した。目を瞑って様子を見るが、とても気持ちが悪い。最悪なことに、吐き気まで催してきた。メールの送受信は、ローマ字か英文でないと文字化けしてしまい、読むことができない。送られて来たメールを読んでいると、文章の合間毎にスペースがあると読み易い。しかし、ローマ字での文章が続くと、見慣れていないのでとても読みづらく、意味が把握できないこともある。これ以上は身体的に耐えられないと判断し、サーバーテントを後にした。

あまりの気分不快さにトイレに直行したが、吐き気は治まっていた。その代わりに、お腹が下っていて下痢便開始。今回のレースでは、BPに工事現場で使用されているような仮設トイレが3基並んで設置されており、「必ずトイレで用を足すように」と決められている。そのトイレには、大型のトイレトペーパーが最初に取り付けてあったが、レース2日目に

は紙切れになっていた。設置された紙が無くなれば、各自が持参したペーパーを使うか、水を使うかで処理することになる。トイレから出てテントに戻る途中に、前から歩いてきたアメリカ人選手に声を掛けられ、「お前はゲイか?」と聞かれた。私がガラビィーヤを着てレースに出場していたから、彼は私のことをゲイだと聞いてきたと瞬時に思った。彼に、「これはガラビィーヤと言い、エジプトレース2009に出場した時に、ハンハーリ市場で買ったものだ。私は4DESERTSシリーズでは、ゴビマーチ、サハラレースでもガラビィーヤを着て完走している。これスタイルが私の砂漠レースでのユニホームなんだよ」と英単語全開の説明をしたら、彼は「Great!」と言って肯き、親指を立てて拳を握り、私の目の前でポーズをとっていた。砂漠レース以外の場所でも、女性用のガラビィーヤを着ている人がいれば、相当怪しい人間に見られるのでご注意ください!

自分のテントに戻り、濡れタオルを日焼けした顔に乗せて一休み。夕方からはアタカマ砂漠では風が強くなり、お湯で濡らしたタオルも直ぐに冷たくなる。テント入口に確保した自分のスペースに、寝袋を敷いて休んでいると、日本語で何やら話し声が聞こえた。樺澤さんと佐藤くんがNHKスタッフの取材をテント内で始めたのである。「オイオイ!」と思っても、文句を言う気力もなく疲れており、時折訪れる身体の攣りに耐え忍んでいた。

1時間ほど身体を横たえていると尿意が出てきた。どんどん水分補給を続け、明日の朝までには脱水症状を克服しておかなければならない。トイレに行く途中に南アフリカの選手(Angelique Tostee)から、「君は、俺の国ではとても有名な砂漠ランナーなんだよ!」と話し掛けられた。私が、「Are you true? Is it reality?」と聞くと、「I am true」と答えていた。何で有名なのか聞いてみたが、彼が話す英語が早口で意味が分からず・・・残念え～ん、切腹、byギター侍(古いかな?) 放尿した後ゴールゲートの方へ行き、村上さんの帰りを待つ。20分ほど待つと、全身黒尽くめの上下のウェアに身を包んだ村上さんが見えて来た。先にゴールしていた日本人選手たちと近藤さんの出迎えを受けてのフィニッシュ、これでSTAGE1日本人選手全員ゴールとなる。テントに戻り横になっていると、Wandaさんが戻ってきた。Wandaさんの顔つきを見ると、相当疲弊した表情をしている。日中の気温は40℃位までしか上昇していないのだが、高山病と長い時間太陽に当たっていたのが原因なのだろう。レース2日目までは、砂漠の気候に慣れるまでに、リタイヤする選手が非常に多い。未だ帰らぬテントメイトのRAWLLINS Austine(アメリカ、女性)とHOU Fan(中国、男性)は大丈夫であろうかと、とても心配するが、Wandaさんの後に帰ってきた。この時、Fanさんはリタイヤしていたが、その事実を知ったのは翌日になってからになる。

夕暮れ迫る中、風が強くなり騒ぎ出す。焚き火の煙が、私達の反対側のテントに流れていくので煙害がないのが、せめてもの救い。夜ご飯は、村上さんとケンと一緒に食べた。荒井くんや佐藤くんも集まってきて今日のコースの話題になったが、CP3の手前にいた観光客の話で、場が盛り上がる。佐藤くんもケンも遭遇しており、やはり「あと1kmぐらいよ」と言われていたので、相当長い時間あの場所で応援していたと思われる。それにしても、

あの5kmの長い溪谷の登り道には、私だけではなく全員が、うんざりしていたそうだ。私がCP3を出て坂道を下りLost wayした話をすると、Mayさんがその時の私を見ていたと話し出した。突然左側の谷間から現れ、直ぐにまた左の方のコースに消えて行ったと言う。おそらく2回目のLost wayをして袋小路の道に戻り、前の選手を確認した時のことだと直ぐに分かった。いやいや恥ずかしい場面を見られてしまったが、Lost wayした時は本当に焦る。

今日のレースで樺澤さんは4位、佐藤くんは12位と健闘した話になる。ケンちゃんと私の見解では、「明日、樺澤さんがリタイヤすると、南極行きは絶望的になる」との話で一致した。笑いながら話していたが、本人の樺澤さんには相当なプレッシャーに感じていたのではなかろうか。エジプトレース2009では、初日に5位ぐらいだった順位から一転して、レース2日目にリタイヤしている。3日目以降は立ち直り、レースを続けて上位争いをしてきたが、砂漠レースの初日2日目は鬼門なのである。一度リタイヤした人は、町に帰るかレースが終わるまで選手・スタッフらとテントで行動を共にするか選択しなければならない。体調が戻りレースに復帰するにも、医師の許可がなければレースには戻れないのである。順位を意識してレースする面白みは、完走を目標としている私には分からないが、樺澤さんや佐藤くんには、闘争心溢れる活躍を期待している。

スープや水を飲み続けた結果、ようやく尿も正常化したので、寝袋に入ることにする。樺澤さんから、「マゼラン大星雲と小星雲を教えようか」と嬉しいお誘いを受けたが、明日にしてもらうことにした。夜中に4回ほどトイレに行ったが、寒さより星の輝きに魅せられる方が勝っている。砂漠の中では地上の灯りが皆無であり、この場所は標高が高いためなのか、他の砂漠より星がよく見えて近く感じる。この星群をインカの人々も見ていたのかと思うと心が温かくなり、自然に星空を眺めている時間が長くなった。

3月7日(月) STAGE2:The Slot Canyons 距離:41.8km 標高2627m~2335m

今朝は6時頃に起きて準備に取り掛かる。最初に寝袋を折畳んで片付けて、アルファ一米にお湯を注いでからトイレに用を足しに行く。私の排便は朝にするのだが、日本とチリの時差12時間あり、ようやくチリの時差に慣れて用を足すリズムが変わってきた。用を足してテントに戻ろうとすると、イギリス人選手に、「君は俺の国では有名人なんだよ」と話しかけられた。昨日の夕方南アフリカの選手に同じことを言われたが、悪い気はしない。今日のブリーフィングも7時半からだったが、樺澤さん同様にテントを出るのは2人して最後だった。荒井くんブリーフィングの内容の注意点を要約してもらおうと、CP1までは川越のコースになっていて、川を下って行くと言う。朝一番でアンデス山脈の雪解け水が流れる川に入れるコースを作るとは、コースディレクターもよくよく考えている。日中の暑い時間帯に川に入れるなら、選手から喜ばれるだろうが、気温が10℃ぐらいの時間帯では悲鳴になるだろう。

靴全体をカバーする砂避けのゲータは封印し、バッグバッグの取り出し易い場所にしま



った。私は川を越えて行くコースでは、靴を脱いでサンダル履きで攻略する作戦を立てている。最初は靴を履いてレースをするが、靴が水に濡れると判断したらサンダルに履き替えるつもりである。ゴビマーチ2008では、レース初日、スタートしてから500mも進まない内に河川渡河の場所があり、ゲータを付けた靴のまま川の中に入りレースを続けた。川から出ると、靴とゲータ、靴下が多量に水分を含んでおり、両足に重りをつけている感じで、走り歩きを余儀なくすることになる。30分もすれば自然に靴下や靴の中は乾き始めるのだが、またもや川越のコースがあり、とても苦しめられた経験がある。始めは楽しんで渡河を続けていたが、足裏の皮は水分と摩擦により肉刺ができて、肉刺の中に肉刺ができて行く。そして普通に歩くだけでも痛みを伴い激痛に変わっていく経験から、今回はサンダルでの川下り作戦を考えていたのである。

南アフリカのAndyと写真を撮って硬い握手を交わし、お互いの健闘を誓い合う。マイポジションはスタート・ゲートの最後尾。英語での10カウントダウンを合図に選手が走り出す。私はスタートとゴールする時は必ず左手の指輪にKissをして、ゲートの横断幕にストックでタッチする。応援してくれる家族に、職場の同僚や友人たちに、「必ずゴールゲートに帰還します」と言う思いを込めての自分流の儀式。車のクラクションが派手に鳴り響く中、ゲートを潜り走り出す。

最初は石礫が混じる土漠地帯の谷間を越えるコースになっており、谷間では小さな川を越えて行く。下りも急斜面であれば、上りも同じ。谷を登りきって走り出すと、起伏のある足場がさらに悪い石礫砂漠が続いていた。私の脚力では走りきれないと判断し歩きに変えると、コース上に何か白い物が見える。近づいて行くと動物の骨が横たわっており、頭蓋骨と背骨の辺りは白骨化していたが、尻尾の部分には皮と毛が付着していた。砂漠レースに出場していて、レース中に白骨化した動物の死骸を見るのは2回目だが、自然の厳しさが胸に響いてくる。

3つ目の谷を越えて行くと、前を進んでいる選手の流れが、下方に見える谷間の川沿いに、平行して移動しているのが視認できる。谷の斜面を下りながら選手が進んでいる方向を確認すると、川沿いの渓谷地帯へ向かっていた。私が見ている谷の上からは横方向に川が流れており、選手は右側へ進路をたどっている。右側に視線を移すと川は渓谷地帯を縫うように流れていて、川に群がる蠅のようにしか見えない。朝日は昇っているのだが、渓谷沿いの川は日陰になっている。走り歩きをしているからガラビィー一枚で寒くはないが、気温は10℃に満たない気温。吐く息は白くはないが、大きく空気を吸い込んでの呼吸をすると胸の奥が痛くなるのは、高地の影響だと考えざるを得ない。こんな朝っぱらから、冷たい川へ入れるコースを考え出したのは、チリのLocal ManagerであるJavier Aguileraの仕業であろうか。

谷底の川を、靴を履いたまま渡りきり、渓谷沿いの川もストックを巧みに使って乗越えて進んだ。靴は濡れずに済んだが、サンダルに履き替えるのは時間の問題だ。河川沿いの

ブッシュをかき分け、手足に切り傷を作りながらピンクフラッグに誘導されて行く。しかし、とうとう靴からサンダルに履き替える川幅の大きさの場所が訪れた。私がバッグバッグを背中から降ろして、靴からサンダルに履き替えていると、オーストラリアのBull Bradley D. が、「Follow me!」と言って右手で合図しながら、渡河地点の手前に立って微笑んで待っている。Bradleyとは、昨日も前後してレースをしていたので顔を覚えていたが、私が体調不良を起こし、止まってしまったと思ったようだ。Bradleyに、「Do not mind it. Because I overtake it immediately.」と答えると、彼は優しい笑顔を残し、先に川を渡って進んで行った。Bradleyとは不思議とBPでは会わないものの、コース上ではよく会って会話を交わしていた。

同じテント・メイトのWandaさんの姿が前に見える。彼女は昨日11時間以上掛けてのゴールだったが、回復しているのだろうか。Wandaさんと前後して河川を渡り、また川の中を進みピンクフラッグを追い駆ける。川を渡河する時は、私が持っているストックで水深を測り、Wandaさんにアドバイスしてから越えて行った。WandaさんはMDS2008やサハラレース2010に出場していたようで、彼女は私のことを知っていたようである。MDS2008のパンフレットには、私のゴールシーンの顔写真が掲載されていたので、それを見て知っていたのだろう。

川の水深は浅い場所では足首程度だが、深い場所だと膝上ぐらいまで濡れる深さがあった。川の兩岸にある獣道のようなブッシュに覆われている道を、川を左右に渡って越えながら下流に進んで行く。ブッシュは背丈より高い場所もあり、ストックでかき分けながら歩くのだが、棘があるので皮膚に触ると擦り傷ができて痛い。川の水が溪谷の土砂を削って流れているので、茶色く濁っている。川の水は「冷たい」と言うよりは、「痛い」と表現した方が適切だろう。溪谷の谷底を流れる川自体がコースになっているので、道がなければ川に入ったまま進んで行った。溪谷の谷間には太陽の光が届かず、影になっている場所もあり、川の中の岩場も乗越えて行くので、とても砂漠レースをしているとは思えない環境。サンダルを履いているので歩き続けているが、コース的には非常に面白い。湿地帯のような足場を歩いていると、トンボが集団で飛んでいた。河川の上にワイヤーを張り、荷物を運搬するゴンドラのようなものがある。だいぶ年季の入った代物に見えるが、現役で活動しているのだろうか。

溪谷地帯を抜けると両側の岩石が左右に開け、河川敷のスペースが広がった。河川敷には、川の水の恩恵を受けていてブッシュの他に樹木も生えており、生命力を感じる。視線を上げて溪谷の上の方を見ると、石の多い土漠地帯が広がっており、とても荒涼としている。ブッシュ地帯を越えて足場の悪い泥土を歩いていると、CP1の手前にある幟旗が見えてきた。CP1では、Samanthaが笑顔で出迎えてくれたので、リロリロ攻撃をしておいた。CP1は柔らかい砂の上に設営されており、サンダルを脱いで裸足になると気持ちが良い。水筒に給水しながらSamanthaに、「まだ川を越える場所はあるのか?」と聞くと、もう1ヶ所だけ

あると言う。その先は谷間を上りトンネルを抜け、左に曲がって峠の尾根伝いに進んで行くコースだとの説明を受けた。Samanthaに4年前のアタカマレースで、日本人の女子大生の選手がトンネルを越えて左に曲がらず、直進を続け10km先まで歩いて行ってしまい、Lost Wayした話をする、あの時は大変だったと話していた。私は日本で、その女子大生の方に直接お会いして話を聞く機会があり、とても印象に残っていた。峠の先には素敵な大砂丘下りもあり、今日のコースは楽しめそうだ。

CP1に別れを告げて、サンダル履きで歩き出す。遠くにはリカンカブール火山やアンデスの山々が見えて、手前にはススキのような植物が生えているのだが、実に趣がある風景に感じる。柔らかい砂地の上を進んでいると、前から馬に乗った人が現れた。この辺りには牧場があり、観光客相手に乗馬をさせているようだ。車が通れる道を2km以上歩くと、道を横切るように大きな川が現れた。川の水深は深くはなく流れも緩やかだが、20mぐらいの川幅がある。Samanthaの話では、川を渡るのはこれが最後なので、川を越えてからサンダルから靴に履き替えることにする。前方400mぐらいを2人の選手が歩いているのだが、その先にも数人の人影が確認できる。「もう谷間に入る道が現れても、良い頃合いだと」考えて何気なく右側のピンクフラッグを見ると、谷間に入る道へ続くブッシュにピンクフラッグが続いていた。前を歩く選手に大声で叫んで呼びかけるが、聞こえていない。根気よく叫び続けていると、1人が何気なく私の方を振り返った。私は持っていたストックを大きく振り回して合図をすると、ようやく2人はLost Wayしていることに気が付いたようだ。

先に谷間の上り道を進み、左手の山の上を見ると豆の様な人影が動いているのが見えた。あの場所まで選手を登らせるとは、恐るべしRACING THE PLANET! 「アタカマクロッシングでは、MDSがピクニックに感じる」と言っていた、砂漠レースの先輩隅田さんの顔が思い出される。前後に選手がいないことを確認して、岩陰で放尿開始。今日は、川下り中にも尿意を催し、排尿しているので、脱水にはなっていない。水分補給をする時は、一口分の水の量を口に含み、30秒ぐらい掛けてゆっくりと飲み込んで行く。谷間の道と言っても峠を切り開いた道であり、ここも昔はインカ道として使われていたのであろうか。後からLost Wayした選手が追いついて来て、お礼を言われた。彼らの話では、2人の先にも4人選手が先行していてLost Wayしていたとのこと。彼らも4人に声を掛けて、正規のルートに戻って来ているようだが、Lost Wayすると精神的に疲れる。

クネクネした長い上り道を歩いていると、谷間の崖の間に石で作られた橋が架かっていた。橋の長さは30m程の長さがあり、明らかに人為的に作られた工作物である。橋を渡って先へ進むと、左側は峠の崖の斜面になっており、右側にはCP1付近のOasisが、眼下に広がっていた。上り道は続いていたが、目の保養には最高の景色を見ながら歩いているので、苦痛には感じない。坂道が終わって道が少し平坦になると、左側へ回り込むように道が続いていた。道の先には、岩盤を繰り抜いて作ったようなトンネルの入口が見えてきた。トンネルに近づいて行くと、「アタカマレースでは、幾多の選手たちがこのトンネルを潜った

のか」と言う思いが、込み上げて来た。トンネルの中はとても涼しく、遠くにトンネルの出口の明かりが見える。トンネルの中を進んでいくと、中間地点ぐらいに大きな石が置かれていた。石の真上を見上げたが、トンネルの上部が崩落した石ではないことが分かる。車を通行させない目的があるのだろうか。

トンネルを抜けた正面は道幅が広く下り坂になっており、選手の心理では真っ直ぐ進みたくなってしまふ。前方から1人の選手が、下り坂を登ってくるのが見えた。私が彼に崖の方を指差し「This Way」と大声で教えたが、応答はなし。Lost Wayをした彼は疲れ切った表情を浮かべているのが、遠目にも分かる。トンネルを抜けた左側は崖になっており、かなりの急勾配の斜面になっていた。崖の入口に、数本のピンクフラッグが地面に突き刺さり、気持ち良さそうに風に靡いて呼んでいる。崖の急斜面を上りながら、確か数年前のアタカマクロッシングに出場して、日本人女性で初めて完走した友佳子も、「トンネルを抜けたから、真っ直ぐ坂道を下って行きLost Wayした」と話していたのを思い出した。

流石に今回の日本人選手では、トンネル後にLost Wayする輩はいないと思っていたのだが、ケンがLost Wayしたと後から聞いた。ピンクフラッグを確認しないで6kmほど進んで気が付いて戻ってきたらしい。トンネルの出口に戻った頃にはボトルに入れた水も空になり、峠を越えてからは尾根沿いを走りCP2へ着いたと話していた。今日のCP2にはCUT OFF TIMEが設けてあり、14時までには通過しなければならない。「制限時間との戦いもあり、必死になって走ったよ」と、テントに帰還してから引き攣った笑顔で話していた。

崖の斜面を登りきると、素敵な景色が目に飛び込んできた。「砂漠レースをしていて、本当に良かった」と思えるのも、地球が感じられる景色に出会えるのが、魅力の1つになっている。苦労して登って来た谷間の道に、全身黒尽くめの姿の選手が見えた。村上さんだと思い、大声で呼んでみたが、気が付いてくれただろうか。起伏のある尾根道をピンクフラッグに導かれながら進んで行く。地面が硬いため、ピンクフラッグが挿せないのか、動物の糞にフラッグが挿してある。野生のアルパカを見たかったが、出会うことはなかった。この崖の上からの景色があまりにも素晴らしいので、バッグバッグを背中から降ろして見惚れることにする。眼下にはオアシスや岩山があり、天境線まで砂漠が続いている。空は青く無音の世界だが、地球の息吹が聞こえて来るようだ。

荷物を背負い直し、小走りに走ってみると、何とも表現できない幸福感が心に押し寄せてくる。前に行く選手に追いつき、「もうそろそろ大砂丘下りがある筈だよ」と話し掛けると、「本当にそんなコースがあるのか」と信用していない。500mほど行くと、崖際でピンクフラッグがそよ風に揺られていた。私が後ろを振り返って、「本当だったでしょ」と言うと、彼は「Oh My God!」を連発し天を仰いでいる。「彼に先に行くよ」と言ってから、一気に大砂丘を下って行く。傾斜に臆することなく、足を上げて走り続ける。こんなに楽しい砂丘下りは、初めての経験だ。崖の上から下までは300mぐらいの距離があったが、全て柔らかい砂の砂丘地帯であり、転倒してもケガをする危険は全くない。それにしても、この砂丘

地帯がどのようにして出来上がったのか考えると、とても不思議である。大砂丘を下りきり、靴の中に入った砂を取り除く。靴には足が入っているからスペース的には多量の砂は入らないと思いがちだが、靴の中の半分以上のスペースに砂が入り込んでいた。越えてきた大砂丘を見上げると、彼は砂丘の1/3も下りてきていない。起伏のある砂丘地帯を歩いて行くと、ようやくCP2が見えて来た。

CP2には、13時過ぎに到着。CPで休んでいるとNHKスタッフの伊場さんがカメラを回しながら話し掛けてきた。「あの大砂丘下りを、もう一度やりたい」と話すと、伊場さんはあの大砂丘を、取材の為に2回カメラを回して下って来たそうである。大砂丘の上まで登って行くには、車では行くことができない。選手が通って来た道とは違うルートで大砂丘の上まで歩いて行き、片道45分かけて登って行ったと話していた。あと1時間で村上さんがCP2に到着できるのか、とても心配になったが、是非とも砂漠だけではなく時間の壁も乗り越えてもらいたい。

CP2を出ると、柔らかい砂地から地面が硬い下り坂が続いていた。溪谷を下る道のように、車も通れる道になっている。基本的に車が通れる場所の先にCPを作らないと、選手に支給する水やテントの設営が出来ない。クネクネ曲がる坂道を下って行くと、アスファルトの道路が横切っていた。道路の手前にはパトカーが止まっており、地元の警察官が手を振っている。選手が道路を横断して砂漠地帯に入っていくので、安全管理をしていたのだ。前に3人の選手の姿が道路の向こうの砂漠に見える。石礫の多い土漠地帯を越えながら、前の選手との差を縮めて行き、追いつき追い越す。その先にも2人の選手の姿があり、「何人たりとも俺の前を歩かせねえー」と気合を入れて、小走りをする。しかし、追い越すことができたのは、彼らの姿を確認してから40分も経過してからだった。殺伐とした土漠と石礫の大地から、低い灌木のブッシュが混じる土礫漠を乗り越えて、自分のペースで走り歩きを繰り返す。5人の選手を追い抜き、さらに進むと前に道路が横切っているのが、また見えて来た。今度は道路の下にトンネルがあり、潜り抜けて行く。この日陰で休んでいた2人の選手も抜き去り、さらに前方に見える1人の選手を追いかける。

アタカマ砂漠の昼頃の気温では、暑さは厳しく感じない。この砂漠で一番暑い時間帯は、太陽が傾き西日になる15時以降の時間帯である。トップランナーや上位でレースを進めることができる選手は、この時間帯はテント村に到着し身体を日陰で休めている。彼らが酷暑の砂漠の中で格闘するのは、オーバーナイトステージ以外にはない。灼熱の大地に身をさらし、一日中砂漠と太陽と乾燥と戦いながらレースをしているのは、後続のランナーたちなのである。レースでは、いち早く砂漠を乗り越えて行くか、時間を掛けて暑さと戦いながら進んで行くかは、選手の体力次第。砂漠レースで優勝した選手も、完走した選手にも、同じ250kmに渡る砂漠のコースが用意されており、ゴールゲートが共通の目標地点なのである。

砂漠の中に木々が生い茂る場所があると、ホっとする気持ちになるのは、砂漠の民も同

じだと思ふ。Oasisに近づいて行くと、小さな竜巻が旋回しているのが見えた。ピンクフラッグは竜巻の方角に延びており、とても身の危険を感じる。竜巻は地面から20~30mの高さまで砂埃を巻き上げながら、横方向に移動していた。竜巻は同じ場所で発生しているようで、壊れては再生を繰り返している。竜巻が発生していた場所は、硬く乾燥したひび割れた地面になっており、砂はすべて巻き上げられて無くなっていた。何事もなく竜巻の横をすり抜けて行くとCP3に到着。CPでは、シンガポールのLawrenceが椅子に座って休んでいた。CP3に着くまでに、自分のペースで走り歩きをした結果、CP2から7人の選手を抜かして前に進むことができた。順位を気にしてレースをしていなくても、前に行く選手を追い越して先に進むことが、とても楽しく感じられたStageだった。

CPで休憩しがてらCP3からBPまでの距離を確認すると、残りは10.5km。コースはCP2からBPまではModerateになっているので、平坦なコースが続くと予想できた。スタートしてからは、7時間15分の時間が経過しており、現在の時刻は15時15分。「BPまでは、暑さとの戦いになるな」と覚悟を決めてから歩き出す。CP3があった場所は、背の高い木々に覆われたブッシュ地帯、先に進んで行くと突然に視界と道が開け、とても歩き易い硬い地面の道が続いていた。道は人工的に整備されているような印象を受けたが、車も交通できる道幅があり、利用されているのだろう。言うまでもなく、砂漠レースではアスファルトの道を歩かせるコースはない。水分が抜けきった低い灌木の間に続く平坦な道が、どこまでも続いている。「走ろう」と言う気力が私には残っているのだが、何歩か走ってみると続かない。目の前にある道、灌木や遠くに見えるアンデスの山並みも、陽炎になって景色が歪んで見える。腕時計の気温計を見ると、45℃を表示していた。身体の疲弊は正直であり、私の精神力とは裏腹に体力が消耗している事実気が付いた。

香港のWang Richard Y. L.の姿が、土砂漠の先に見える。彼とは、サハラレース2009に出場した時のテントメイトで、英語はもちろんのこと、日本語も流暢に話せるBilingual!彼に速歩で追いつき、「Richardさあーん、Do you enjoy desert race?」と話し掛けると、サングラスを掛けた表情からも読み取れるくらいに、素敵な笑みを浮かべていた。しばらくは話をしながら一緒に歩いていたが、砂漠レースでは自分のペースで進まないで疲労が溜まっていくのは、お互い了承済み。Richardさんとは、前後しての抜きつ抜れつのバトルに突入しながら、砂漠レースの醍醐味を楽しみ合う。背の低い灌木地帯が広がる荒野に、1本の大きな木が見えている。大きな木の手前の地面に、CP間の中間地点を示す旗が地面に挿されており、残り5km少しとBPまでの距離がつかめた。ピンクフラッグの誘導は、大きな木の方向へ伸びており、木を通り過ぎて歩いていると、ピンクフラッグは右横方向に続く車が通れる道幅へ続いていた。この道は地面も固く歩き易いのだが、暑さにやられて走ることが出来ない。アンデスの夏の日差しは容赦なく照り付け、朝との寒暖差は40℃になっており、寒さに凍えて川下りしたのが今日の朝の出来事だったとは思えない。

後ろから大型の観光バスが砂埃を巻き上げ、同じ方向に向かって走り去って行く。何か

観光する場所でもあるのかと思っていたが、答えはBPに着くまで分からなかった。観光バスの中の人々が、もの珍しそうに私にカメラを向けていたり、手を振っているのが見える。こんな砂漠の中の1本道を、荷物を背負ってレースしているのだから、不思議に思わない方がおかしい。今日のレースを振り返ると、スタートして朝の寒さが残る中に溪谷の川下りをさせ、谷間の峠の山登りと大砂丘越えて行く道。ここまでは足を使わせて、起伏は在るが平坦に近い道を、永遠と20kmに渡って日中の暑い時間帯に用意をしている。寒暖の差を考え、肉体的にも精神的にもハードなコースを作り、コースディレクターの意図がよく伝わってきた。2時間ぐらいかけて歩き続けると、右手の方角にテント村が見えてきて、観光バスも停まっているのが分かる。この暑さの中での行進で、3名の選手を抜かしたので、CP2から合計すると10人をおかわしてBPに着くことができた。ゴール前ではレース・スタッフのTan Torunが、「Seiji, Please reach a goal without jumping today.」と言っている。ゴール前のパフォーマンスをしながら、ストックを右手に束ねて持ち、ゴール・フラッグに触ってから、ゆっくりとゴール・ゲートを潜り抜けた。

STAGE2 41.8km 9時間33分16秒 63位

「90位ぐらいの順位かな」と自分では予想していたのだが、自分の順位を聞いて驚いた。まだ、半分ぐらいの選手がコース上におり、砂漠と格闘しているのである。この場所には水を湛えた塩湖があり、観光客が水着を着て泳いでいる。遠目に見ても、塩湖の水が澄んでいるのが分かった。支給されたペットボトルの水を抱えてテントに戻ると、6人の選手が早くもゴールしている。テントの角位置の手前で、樺沢さんが横になっているのを見ると、このテント内では3~4番目に戻ってきたことを意味する。私はテントの出入り口付近に自分の場所を確保してから、樺沢さんに「樺ちゃん、どうだったの？ リタイヤはしていないよね？」と聞くと、「今日は死にました。順位も29位と落ちちゃいました」と、顔色もが悪く、気怠るそうに答えていた。「リタイヤしなかっただけ、結果オーライじゃないか」と励ましにならないフォローをしておいたが、南極レースを目指す者にとっては、レースに出場するための出場権の問題もあり、完走しなければ資格が得られないのである。彼のことが、明日からのリカバリー・ショットどうするか、考えながらの休息になるだろう。

私の身体状況については、調子は悪くないのだが、股間に股擦れが3ヶ所できており、これが現在の自分の最大問題になっていた。レース中には、あえて履き慣れた下着を身に着けているのだが、明日から下着を履かないで走り歩きをすることにする。身体をお湯で濡らしたタオルで清拭し、股擦れした患部にゲンタシン軟膏薬を塗布すると、少し痛みが治まった。右足裏には、大きな水脹れを伴う肉刺が形成されていたが、痛みはさほど感じない。肉刺は安全ピンを刺して水抜きだけの処置をしておいた。今回のレースで私は朝昼晩の3回、痛み止めを飲み続けているので、薬効が表れているのかも知れない。

昨日から考えていた荷物の軽減についてだが、何かを減らすとなると、食料品を処分す

るしか方法がない。昨日は準備した行動食の半分も食べなかったが、今日の分で用意した行動食は全て食べきっていた。これからのレースを戦っていく上で、胃がアルファ一米を受け付けなくなることも考えられる。熟慮した結果、行動食(食料品)の処分をするのは止めにした。食べ易く栄養価の高い行動食を、他の選手やスタッフに分け与えて処分するよりも、荷物になっても行動食を残しておけば、保険としての役割は大きいと判断したからである。

ゴミ箱から捨ててある空のペットボトルを取り出し、小型ナイフでボトルの上部を切り取る。この容器の中にお湯を入れてもらいに行き、タオルと靴下の洗濯を始めた。靴下の汚れ方はひどく、細かい粒子の砂が入り込んでいるので数回洗う必要があった。明日以降もこの靴下を履くので、容器に入れたお湯の中でジャブジャブ洗う。洗った洗濯物は、テントの屋根の部分に置いておけば、30分もしない間に乾いてしまう。

洗濯も終わったので、バッグバッグの横から凧を取り出し、塩湖の畔で凧揚げをすることにした。凧を揚げると塩湖の上空へ、爽やかに吹き上げる風に身を任せながら、気持ち良さそうにアタカマ砂漠を泳いでいた。「おーい、凧よ。そこからレースを続けている仲間が見えるのかい? みんなをテント村に案内してやってくれ!」と思いながら、凧を飛ばす。凧揚げをしていると、日本で留守番をしている月桜を思い出した。多摩川河川敷に月桜を連れて、よく一緒に凧揚げをしに行くのだが、1人で凧揚げをするのは砂漠に来た時だけ。そんなことを考えながら、家族のことを思い出していた。NHKスタッフの伊場さんから取材を受けたが、「今回もエジプトレースの時のように、村を通過した時に子供達と一緒に凧揚げをしたい」と、自分の気持ちを話しておいた。

一度テントに戻ってから、サーバーテントへメールのチェックをしに行った。嫁さんや友人の金谷さんからメールが届いており、精神的な栄養剤に感じる。砂漠の中で自分宛に来たメールを読むことほど、日本を近くに感じることはない。実際には、地球規模で考えると、日本の裏側の砂漠にいるのだから、距離的には遠く離れている。しかし、応援メールを読んでいると、「心は近くにあるな」と感じずにはられない。メールテントを出ると、近藤さんから「肩の日本国旗が取れかかっているよ」との注意を受けた。「安全ピンで国旗やワッペンを留めていると、ペナルティーを受ける」とのアドバイスもあり、テントに戻ってから佐藤さんに裁縫セットを借りて、縫い付ける。凧と凧糸は持っていたが、「次の砂漠レースからは裁縫セットも持参しなくては」と反省し、少し恥ずかしい気持ちになった。

地平線の砂漠の彼方に沈んでいく太陽も美しいが、アンデスの山々に沈む夕日も美しい。太陽と反対側に見えるリカンカブール火山が、紫色に染まっている。山並に見惚れていると、紫色から黄金色に染まり変わってから、日が暮れていった。11時間以上かけて、ケンちゃんはようやく帰ってきたが、まだ村上さんが戻ってきていない。辺りは暗闇に包まれているが、照明によって光を浴びたゴールゲートが選手の帰りを待ちわびている。今日からCUT OFF TIMEが設定されており、ゴールにはスタートしてから12時間後の20時までに着



かなければならない。制限時間10分前に、ヘッドライトを灯した村上さんがゴールした。村上さんは、これから食事と休憩を開始するが、12時間後にはSTAGE3のスタートが切られる。トップ選手たちは、既にテントの中で就寝し、明日のレースに備えて休んでいる。レースでは、トップ選手ばかりにスポットライトが当てられがちだが、完走だけを目指し、食欲にゴールを目指している選手がいることを忘れてはならない。トップ選手にはトップ選手のレースの駆け引きや苦悩もあるだろう。共通して言えることは、どの選手も砂漠を越えて目指して来たものはゴールゲートであり、希望の道である。砂漠レースに出場する選手には、それぞれに様々なイベントが発生するが、村上さんのゴールを決して諦めない姿勢には称賛に値する。

遅めの夕食を食べながら、ケンとレース中の話の花が咲く。ケンはトンネルを抜けてLost Wayした後、崖上の尾根沿いの道を走っていると、マレーシアのTanさんとJackが口論しながら歩いているのに追いついたようだ。「あの2人、本当は仲が悪いのではないか」との、印象を受けたそうである。その時に、Jackのバッグバッグの中の水筒から伸びているチューブの元栓が開いていたようで、水がジャバジャバと漏れ出していたようだ。またJackは、CP2でスタッフに水のペットボトルを至急された時に、「俺は医者だ、水なんかいらぬ」と拒否したそうである。スタッフから、「あなたが医者でも、砂漠レースでは水が必要よ」と諭され、水を受け取っていたとケンが話していた。Jack伝説、始まる。ちなみにJackは、アルミックシートをイスラムの人が頭に巻くタービヤンのように巻き付け、暑さを凌いでレースしていたそうである。エジプトレース2009では、ケンがコースの途中でアルミックシートを身体に巻きつけ、灌木の木陰で休んでいたが、「類は友を呼ぶ」と言ったところか。

3月8日(火) STAGE3:The Atacamenos Trail 距離:40.0km 標高2335m~2453m

朝、目が覚めると、テント内に寝ている人の人数が、減っていることに気がついた。このテントでは9名の選手が寝泊まりしていたが、アメリカのAustineと中国のFanさんの姿が見えない。二人ともリタイヤして、サンペドロデアタカマの町に帰ってしまったようだ。足裏の肉刺の水抜きをしてから、肉刺の上からテーピングで被覆する。股擦れしている患部にはゲンタシン軟膏を塗り、日焼けした顔や肌には日焼け止めクリームを塗りたい。ケガの治療を最優先にしたが、外の冷え込みは強い。お湯を貰いに行き、ご飯の準備をしながら、配布されているHandbookに目を通し、コースの距離を確認した。Difficultコースは、非常に変化に富んでいるStageで、レースをしていても面白くて楽しい。Moderateコースは、起伏の少ない平坦な道を進むだけなので、面白味に欠ける。今日のCP3からBPまでの11.5kmは、Difficultコースになっているので楽しめそうだ。

食事をして身支度を整え、用を足して準備よしの状態になったが、既にブリーフィングは始まっていた。話を聞いていた荒井くんによると、今日は川を渡河するコースはなく、昨日と同じくCP2とBPにCUT OFF TIMEがあり、時間も同じで14時と20時。CP3から先は、BP

が見えていてもShort Cutせずに、ピンクフラッグに従って進むようにとの注意事項も話されていた。BPを目指してShort Cutして進むと、渡ることのできない崖や谷間が存在するようだ。荒井くんには、毎回ブリーフィング内容を通訳してもらい要点だけ教えてもらっているの、非常にありがたい。

スタート前に写真を撮ろうとしたら、デジカメのバッテリー切れのサインが表示されていた。ポーチの中に入れた予備バッテリーを探すが、見つからない。スタート5分前のアナウンスが聞こえるが、それどころじゃない。テントに戻って、バッグバッグを引っ繰り返して予備バッテリーを探したが、見つからない。泣きそうである。荒井くん事情を話すと、コースの写真を撮りながら、レースをしてくれるとのこと。私のレーススタイルは、砂漠の景色を堪能し、砂漠での出会いを求めているので、写真は大事な記録となる。レースが終わってから、体験記を書くのにも、写真は重要な役割を果たしている。「予備バッテリー、頼むから出て来てくれ」と祈りながら、スタートした。

スタートしてからは、塩湖の横を抜けてブッシュを越えて行く。地面は塩湖の水が干上がって、カラカラに乾いた塩の塊になっており、この塩の塊は非常に硬くゴツゴツしている。この塩の大地の上を進むので、足裏が痛くバランスが取り難い。地表面を塩の塊が覆う大地でも、灌木が育っているのには生命力の神秘を感じる。これも地球の息吹なのかと思いつつ、ブッシュに手足の肌を引っかきながらも、前の選手を追いかける。さながら、「藪漕ぎ番長ブッシュに行く」の状態である。ブッシュが密集している地帯では、視線を遠くに移してみると、植物が枯れたサバンナ地帯のコースとの印象を受けるが、地面の上を進んでいると塩湖の凸凹にしか感じない。5kmほど直進すると、塩湖地帯から直角に左へ曲がる道に、選手が進路を変えていた。道の足場は少し柔らかい土砂漠に変わったが、車の轍の道で走り難い。自分のペースでゆっくりと走っていたが、右足裏の肉刺が靴の中で潰れたのを感じ、歩きに変えた。

朝ご飯のアルファ米も残さずに食べたのだが、お腹がグーグー泣いている。ホタテの貝柱の燻製とイカの燻製を食べて、水分補給をすると少しお腹が落ち着いた。今回の砂漠レースでは、酒のつまみシリーズとして、消化に悪い胃の中で膨れてくれる食べ物を何点か持ってきていたが、正解だった。ビーフジャーキーだけは初日に食べて気持ち悪くなっていたので、全部ケンにあげている。エジプトレース2009でもケンにはジャーキーをお裾分けしているが、Stage3終了後に「もっとビーフジャーキーを下さい」と要求してきやがった。あのハペロ野郎、カルボナーラのインスタント食品以外にもレパートリーを増やしがれ!

足裏の肉刺の痛みは、20分ぐらい歩き続けると感覚が麻痺し、痛みが消えた。そのまま歩き続けていると、進行方向の一本道の先にCP1が見えて来た。CPには医師もいたが、足裏の治療はせずに先に進むことにする。CPでメディカルの治療を受ければ、身体を休み過ぎさせる結果、筋肉が冷えて硬直してしまい、歩き出すにも苦痛が襲ってくるからだ。水筒

への給水と行動食の包装ゴミを捨て、自分が決めている10分以内の休憩を終了させCP1を後にした。

C1からは柔らかい砂地に地面が変わり、靴が砂のクッションで沈んで行く。足裏の肉刺には優しい環境だが、歩くスピードは上がらない。砂地と言っても平坦な地形ではなく、太鼓橋を越えているような起伏がある道である。この道も四輪駆動車が通れる道にはなっているが、両側には灌木が生えている。進んでいる方向の前方には、横方向に緑の木々が広がって見え、Oasis地帯になっていた。Oasisの後ろには、アタカマ特有の山岳地帯がそびえているが、山には雪を頂いておらず、岩礫の山が見える。Oasisに向かって歩いていると、踏み固められた土の道が、正面に広がるOasis地帯と平行して横切っており、ピンクフラッグが右方向へ続いていた。この道の上にも、柔らかい砂が風によって運ばれてきている。正面の山の中腹に、大きな天文観測所のような施設が見えるが、何の建物なのであろうか。

数km進むと、ピンクフラッグが歩き易い硬い土の道から、再び左方向にあるOasis地帯へと伸びている。凸凹した硬い地面の灌木が点在して茂る道を、Oasisの方向へ進路を変えて進んで行く。CP2へ向かって歩いて硬い土の塊を踏んだ時に、左足裏の肉刺が潰れる気配を感じた。肉刺は大きな水脹れになっていたので、肉刺が潰れた時には、足裏の水泡が破けて出た水が、靴下に染み渡る感触が伝わるのである。この時、私が心配していたのは、足裏の肉刺の痛みより股擦れの痛みだった。今朝から下着を履かずにレースに臨んでいたが、痛み到我慢ができなくなり、バッグバッグを背中から降ろしゲンタシン軟膏薬を塗布した。ガラビィーヤの裾を捲り上げ患部を見ると、痛々しい。「下着で擦れた、股擦れ」と言うと、皮膚が赤くなった程度の印象に聞こえるが、下着には汗と砂埃を吸着している。この下着を洗濯もせずに履き続け、2日毎に廃棄していく作戦だったが、世界一乾燥しているアタカマ砂漠では、少し無謀だった戦法なのかも知れない。汗の水分に吸着された身体の塩分と砂が、下着から水分だけが蒸発してヤスリの役目を果たしていた。レース中は、常に両手足を動かしているのだから、股間の下着がヤスリの状態になっていれば、皮膚の損傷が激しいのも肯ける。ケンがホテルで両乳首に、絆創膏を貼り付けていた光景を思い出していた。

CP2はOasisの手前にあった。アタカマ砂漠では地平線を見るのがなく、必ず天境線はアンデスの山々だったので、距離感を掴むのが難しかった。自分の走り歩きのペースから、予想する距離の方が信頼できていたので、目視で距離感を測ることは諦めた。

CP2でルーティン・ワークをこなし、CP3へ向かう。車の轍が続く踏み固められた土の上を進んで行くと、道路が見えてきた。アスファルトの道で、時折大型車が走っているのが見える。砂漠の中にある車の走る車道には、信号機は皆無であり、交通する車は100km/h以上のスピードで走っている。遠くまで見渡せるから交通事故も起こらないと思うが、道路を横断する場所には、必ず地元の警察官が安全管理に立っていた。「Hola!」とスペイン語で

挨拶すると、私にカメラを向けたのでポーズを取って応じる。道路を横断してからブッシュの多い土漠を進んでいると、前にRichardさんの姿が見えた。その先1kmぐらいにも人影が見えるので、アンデス山脈と人影と自分の位置を直線で結び、どの方向へ進むのかの目印を、山の地形に目視で刻み込む。砂漠を進む時はピンクフラッグを目印にするが、前方を進む選手との距離が開いている時には、とても有効なLost Wayしない方法なのである。Richardさんを追い越して、背丈以上のブッシュが生い茂る土砂漠地帯を歩いていると、急にお腹が下ってきた。コースを外れて用を足し、汚れたトイレトペーパーはビニール袋の中に入れて処理した。以前までは、「レース中に使用したペーパーは、燃やすか埋めるかして対応をください」とのことだったが、今回のレースでは各選手にビニール袋が貸与されている。汚物の入った袋は、CPで廃棄すれば問題ない。

私がコースに戻ると、Richardさんが追いついてきた。突然、私の姿が見えなくなり心配していたようだ。CP3は山の裾野に広がる砂漠の途中に作られていた。斜面を登ってCPに到着すると、私が開口一番に汚物の入った袋を持ち上げて「Treasure!」と言っても、反応なし。皆さん、お疲れのようです。

ここからが、今日のメインイベントのDifficultコース。CP3を後にし、小石が混じる砂漠地帯を進むのだが、私の嫌いな上りが続く。そして、砂丘の谷間が現れて、大きくUp Downしながら越えて行く。砂漠地帯を進むと、暑さを一段と感じる時間帯になって来た。左頬と両膝裏、首の周りの日焼けが熱傷になっており、皮が剥け始めている。首周りは出来るだけBUFFで覆い、頭に巻きつけた濡れタオルの余長でカバーしていたのだが、太陽の殺人ビームにやられていた。地面が砂地の砂漠地帯から、硬い岩盤が剥き出しになって石礫が混じる道を上って行く。硬い地面の礫の上を歩いていると、両足裏の痛みが激痛に変わる。汗が眼に入ると塩分濃度が高いのか、すごく痛い。歩くペースも落ち込むと、後ろから来た選手にどンドン抜かれた。礫の斜面を越えて行くと、地熱のためか一段と景色が陽炎で歪んでんで見える、砂丘地帯に変わった。柔らかい砂地だと足を取られ易いが、足裏には優しい環境である。砂丘を走って下るとスタッフらしい人影が見えた。近づいて行くと、BPまで残り4kmだと教えてくれて、水の補給もしてくれた。500mlのボトルに水を入れてもらい、VAAMを溶いて一気に2回も飲み干して一息つく。スタッフと別れて砂丘上ると、テント村が視野に入った。直線距離では4kmも離れていない場所に見えるのだが、どんなコースが用意されているのか。

砂丘上りは嫌いだが、砂丘下りは大好きになっていた。足が痛くても砂丘を下っていると、楽しくて仕方が無い。40歳過ぎたオッサンが、奇声を発して砂丘を下る姿は、普通の人から見れば「気が触れたのか」と思う状態であろう。しかし、砂漠を楽しんでいる私としては、自分が子供時代に戻って遊んでいる感覚でしかない。砂漠の中で大声を出しても、気にする人はいないし、声は砂に染込んで消えてしまう。砂丘のUp Downは、高低さ50mぐらいのものから100m以上ものまであり、喘ぎながら砂丘の谷間を越えて行く。砂丘の下に

Oasisが見えた。Oasisは右方向に伸びており、ピンクフラッグもOasisの中へと続いている。このOasisは、溪谷の下にある川の水から恩恵を受けているようだ。急傾斜の砂丘を、奇声を上げて下り降りる。前にいた選手は左右に動きながら下っていたが、砂丘下りは直線的に攻めるのが楽しい。

Oasisの草木の中をかき分けて行くと、小川が流れていた。ほんの数100m離れた場所に、砂漠があるとは思えないほど緑に包まれたOasis、小走りしながら抜けて行く。左上方に、手を使わないと登っていけない崖の急斜面があり、ピンクフラッグが続いていた。崖を登って進んでいると、崖の中腹に人工的に造られた用水路があり、水が引かれて流れている。「この辺りに村があるのか」と思って辺りを見渡すが、人が住んでいるような建物は見つからない。溪谷の崖を上ると、石が転がる土砂漠が広がっていて、谷間を越えた位置にBPが見えた。BPに先着している選手が、テント村を歩いている姿も確認できる。直線的な距離をたどればBPまでは1km程度だが、ピンクフラッグは谷底にあるOasis地帯を左旋回するように立てられていた。土砂漠の斜面を下って行くと、右手のOasisの中に人が住んでいるような建物と家畜小屋のようなものが見えた。村ではないようだが、人が住んでいる形跡はある。この砂漠の中で、どのように生活しているのだろうか。

土砂漠の起伏を越えて行くと、太鼓の音が砂漠の乾いた空気に乗って聞こえて来た。ゴールは近い。目の前に、道幅の狭い急斜面の砂地の上りがある。砂地に足をねじ込みながら一歩一歩上って行くが、靴底が砂で滑って押し戻される。ようやく半分ぐらい上ると、女性スタッフがコース脇にある大きな石の上に座って、声援を送っていた。スタッフが手にしているのは、ボンボンであった。よくチアリーダーが持っている様な、ビニールテープを放射状に切って丸くした代物である。ボンボンは、保温用のアルミックシートに切り込みを入れ、丸くして作ったようである。両手にストックを持っていたので、ストックを砂の中に差し込んで、4本足で進むようにしてストックを巧に使って上りきった。STAGE3のゴール・ゲートも視界に入り、小走りしながら踊りだす。ゴール前で指輪にKissをしながら、ゲートにストックでタッチしてラインを通過した。ゲート脇のテントでバッグバッグを地面に降ろし、少し休憩して呼吸を整える。越えて来た砂漠を横目に見ながら、ゆっくりと歩いて自分のテントに帰還した。

STAGE3 40.0km 9時間07分15秒 67位

テントに荷物を降ろしてから、足の治療を優先して行うことにした。ゲータを外して靴を脱ぐのも、股擦れが痛くて一苦勞。バッグバッグの中からメディカル・キット取り出し、サンダルに履き替えてからヨチヨチ歩きでメディカルへ。椅子に座りながら靴下を脱ぐと、両足とも肉刺の水疱が破けていて、あまりの肉刺の巨大さに、OH MY GOD!この大きさは5回出場した砂漠レースの中でも、過去最大級のものだと自負をした。ちょうどNHKのカメラマンの方がいたので、肉刺の映像を撮ってもらった。タライの中にダーティーの水を入れ

て両足を洗い、ついでに、腕と顔の汚れもきれいに落とす。決して自分が支給された水は使わない、そして減らさないのが味噌なのである。タライから足を出して西日にさらせば、5分も待てば水に濡れた皮膚は乾燥する。メディカル・テントの中に入り、治療は自分でする旨を医師に話し、絆だけを借りることにした。足の関節が硬くなっているので、足裏の肉刺に合わせてテーピングを切るのに時間が掛かる。肉刺の皮は残っているので、消毒した後、ゲンタシン軟膏薬を塗り、テーピングで固めて処置完了。自分のテントへ戻り、ガラビィーヤをテントの上に干していると、荒井くんに遭遇した。荒井くんには、通訳や写真撮影でお世話になっているので、「記念に俺の靴下を上げるよ」と泥だらけの靴下を見せると、「何で僕なんですか、岩瀬さんにあげれば良いじゃないですか」と拒否された。自分もこの靴下を洗って履く気持ちにはなれないので、ゴミ箱へポイチョしてから合掌。

私の寝袋の上に、日本女子体操の田中理恵選手のグラビア写真の切り抜きが置いてあった。レース前に宿泊していたホテルで、ケンと村上さんが小説と週刊誌の交換をしていたのを思い出す。村上さんがケンに渡した週刊誌に、田中選手の記事と写真が載っていて、それを切り取って密かに砂漠レースに持ち歩いていた岩瀬賢一。私の嫁さんとケンの話をすると、「あのジャガイモ」と嫁さんが呼ぶ理由が、何となく分かった気がした。

テントで休んでいると、イギリスのWandaさんが話しかけてきた。Wandaさんが話す英語はBritish Englishなので、聞き耳を立てても意味が理解できない。分かり易く、ゆっくり話をしてくれるのだが、隣のテントにMayさんがいたので、通訳してもらい話をした。Wandaさんは、お父さんの仕事の関係で12歳まで長崎県の佐世保で育ち、日本語を聞くと懐かしいと言っていた。当時は日本語で話していたそうだが、イギリスに帰ると次第に日本語を忘れてしまい、今では日本語の単語を時折思い出さず程度になっていると言う。Mayさんに通訳してもらい、お互いの子供の話やレースの話をした。毎回砂漠レースで外国に来ると、英語が理解できれば、さらに見識が広がり、楽しい旅が出来ると思うのだが。

サーバー・テントに行きメールをチェックすると、砂漠フレンズの藤岡さん、赤坂さん、森さんからメールが届いていた。嫁さんと金谷さんからもメールが来ていたが、文字化けして読むことが出来ず残念。スープを飲みにお湯をもらいに行くと、チリ現地スタッフのRodrigo Olivaresさんから、「今日は風を揚げないのか」と聞かれた。「今日は、足が痛いから、風揚げを止めておくよ」と答えると、とても寂しそうな表情をしている。テントに戻り風を取り出して、Rodrigoさんに「俺の代わりに風揚げしてくれないか」と風を手渡すと、とても嬉しそうな表情をして風を揚げだした。Rodrigoさんに、スペイン語で風は「ボランティン」と言うことと教わり、チリでは風揚げは7月にすることが多いとも聞いた。Rodrigoさんとの会話は、英単語をメインにしながらか、それぞれの国の風の絵を砂の上に描いたりして、とても楽しかった。スペイン語と日本語を、お互いに理解しようとする心があれば、言葉も気持ちも通い合うものである。

夕闇迫る中、風がどんどん強くなってきた。ゴール付近で村上さんを待っていると、ゲ

ートが強風でグラグラ揺れて、飛んで行きそうになっていた。慌ててスタッフと一緒にゲート・ポールを支え、ゴールゲートをゆっくりと地面まで降ろした。夕方から突風が吹き荒れるのは、アタカマの地形の影響なのか、それとも一気に気温が下がるためだからであろうか、とても不思議だ。テント村の谷の正面に、黒尽くめのウェアを着た村上さんらしき人が、歩いているのが見えた。CUT OFF TIMEまでの時間が迫る。制限時間15分前に、マレーシアのタンさんがゴールした。タンさんに声を掛けて握手をし、あきらめずにゴールした健闘を称えて祝福したが、とても疲れた表情を浮かべている。それでも着実に完走に向けてのゴールを踏めている満足感が、誇らしげな目に表れていた。

アンデスに沈む夕日を眺め、黄昏れている三人衆がいた。その後姿には、男の哀愁を漂い、匂い立つ独特の雰囲気醸し出している。砂漠の向こう側に、明日を探しているような、そんな印象さえ受ける。樺澤、佐藤、岩瀬の3名、絵になります。彼らは、ゴールゲートの先まで村上さんを迎えに行き、砂漠に腰を下ろして座っていた。彼らが、急に立ち上がって、谷間の下を見ながら声援を送り始めた。村上さんが帰還してきたようだ。急斜面の砂丘を上りきり、確実にゴールに近づいてくる。鳴り響く太鼓の音と、ゴール前に集まってきた選手たちの歓声を受け、村上さんは倒れていたゴールゲートの旗を持ち上げて、ゆっくりと潜り抜けゴールした。連日、12時間近く砂漠を歩いている姿には、とても敬服し強さを感じる。

最後方のランナーの後に付いて、ピンクフラッグを回収し歩いていたスタッフ、急斜面の途中でボンボンを持って応援してくれたスタッフを迎えに行き、荷物を運ぶのを手伝う。スタッフと選手が協力してこそ、素敵な砂漠レースが運営されていることを忘れてはならない。村上さんとケンと一緒に、遅い夜ご飯にありついてから就寝した。

3月9日(水) STAGE4:The Infamous Salt Flats 距離:42.8km 標高2453m~2315m

夜中のトイレへ行った帰りに、星空を見上げていたら流れ星を見ることができた。砂漠に来ると、必ず流れ星に出会えるから素敵だ。また、昨日のCP1からCP2へ向かう途中で、山の中腹に見えていた天体観測所のような大きな施設建物は、緑色の光線を出していた。深夜のトイレ往復も、底冷えする寒さがなければ、最高なのだが。

朝は通常通り6時に目が覚めた。目覚まし時計がなくても、テントメイトが起き出して、レースの準備をガサガサし始めるので、物音で目が覚めてしまう。私は砂漠レースでは、必ず耳栓をして寝るようにしている。これは他人のイビキが聞こえないように、予防しているアイテム。今回は就寝中に、テントでは歯軋りも聞こえていたが、耳栓は必需品である。朝ご飯を食べていると、自分の横に黒い犬が座っているのに気が付いた。まだ夜明け前なので、外は暗くヘッドランプの明りで行動している。朝はアルファーマイとスープが基本で、レトルト食品をおかずにして食べていたが、いよいよアルファーマイが食べられなくなってきた。アルファーマイの半分までは、無理しても胃に流し込んだが、それ以上は箸が

進まない。食欲はあるので、スープを多目に飲みながら行動食のスナックを食べ、満腹感を得てからレースの準備を始めることにした。

残ったアルファ米を犬に食べさせていると、ケンがテント内での出来事を語りだした。夜中にケンが寝ていると、「シャーッ」と物音が聞こえて目を覚ましたそうである。「始めは何の音か分からなかったが、あれはペットボトルに放尿していた音に間違いありませんよ」と言っていた。ケンのテントにも女性がいるので、ちょっと驚きの行為である。しかし、寒さで外に用を足しに行けない時は、寝袋の中でペットボトルの中に小用をする行為は、有効な手段である。その尿を入れたペットボトルは温かいので、寝袋の中に入れておけば良い。それにしても、寝袋を濡らさずに器用に小用を足せたのか、疑問も残る笑い話であった。

朝の時間が経つのは早いもので、ブリーフィングが始まっている。バッグバッグの中身の荷物が減ってきているので、だいぶパッキングが楽になり速くなって来た。今日は少しだけ、テントの外でブリーフィングを聞くことができたが、英語で説明しているから分からない。荒井くんがいると言う安心感があるので、聞く準備もできていない。今日も川越えのコースがなく、嬉しいような悲しいような複雑な気持ち。CP1までの9.3kmはDifficultコースになっており、CP2～CP3は14kmのExtremely Difficultコースになっている。難しいコースほど、コース・ディレクターの遊び心が伝わってくるので、どんな一日になるのかワクワクしてくる。昨日までに120km近く砂漠を越えてきているから、残すは約半分の距離。今日のSTAGEだけ乗り越えられれば、オーバーナイトステージは惰性でクリアできてしまう。そんな思いを胸に、My Start Positionである最後尾に並ぶ。自分では並んだつもりだったが、選手がみんな私の方へ向いているのは何故。スタートしてからの進行方向が、テント村裏側の斜面に続いているようで、気が付かなかった。気を取り直して、My Positionに歩いて行き、カウントダウンが始まる。

スタートしてからは、石礫と土砂漠が混在する荒れた地面を登り、起伏しながらの上りが遠くまで続くように思えた。最後尾のスタートで上りのコースだと、前に行く選手が道をふさいでいるので、抜いて行くのに体力を消耗する。カメラマンのZandyが、地面に顔を付けるような姿勢で写真を撮っている。「Zandy!」と声を掛けると、カメラのレンズ越しに私に気が付いたようで右手を上げていたが、シャッターを切ってくれたであろうか。途中、柔らかい砂地に足を取られても、緩やかな上りは続いている。前方にケンが歩いていたので声を掛けて抜かして行った。しばらくしてから、ケンは私より速いペースで走り始めたようで、私を追い抜いて引き離し、少しずつ砂漠に姿を消すように遠ざかって行った。

前方に進む人影が見えなくなると、砂漠地帯の大きな谷間を越えており、選手が数十人確認できた。何度経験しても砂丘下りは楽しいが、上りだけはどうしても好きになれない。砂丘上りでは、先に越えて行った人の足跡に自分の足を重ねて歩くのがコツ。足跡は、たいがい「ハの字」に付いていることが多く踏み固めてあるので、柔らかい砂地に足をねじ



込まなくても上って行ける。また、傾斜が急勾配だと、砂地に足を取られて滑るので、ストックを後ろ側へ回して体重を支えるようにして上るのもコツである。

谷間を上ると、天境線の彼方にアンデス山脈が霞んで見えた。その手前には、広大な茶褐色の砂漠地帯しか見えない。Oasis地帯の緑は全く視認できず、ピンクフラッグは砂漠へと続いている。地平線上なら、目視で見える距離が4~5kmと目安になるが、谷の上から砂漠を見下ろした天境線までの距離感はつかみ難い。アンデス山脈の根元まで延びている砂漠地帯は、山脈が霞んで見えるために、目視でも20km以上あるような印象を受けた。全ての選手には、詳しいコース状況は知らされておらず、把握しているのはブリーフィングで説明されたコース状況と、その日の距離とCPまでのコースの難易度、標高差ぐらいの情報しか知らされていない。

谷間の底が300m以上ある砂漠越え、いくつもの礫砂漠を越えて行くと、深い谷間にピンクフラッグのグの姿が消えていた。谷の上と言うより、「崖の上のポニョ」。これから下り降りて行く場所に、度肝を抜かれ足が止まった。足場は砂地に岩石が剥き出しになって混在し、誤って足を踏み外したなら、数100m下のOasisまで転げ落ちることは間違いない。今まで経験したことのない、垂直に見えるような急傾斜の下りが、谷底のオアシスに続いていた。正面の崖の中腹には、水平に続くインカ道のようなものが続いているのが見える。

大きく1回息を吸い込み、右手の拳で心臓を叩き、意を決して崖下へ踊り出す。ピンクフラッグは、崖の下り始めは左右に大きく点在し、緩やかに降りて行く道標になっていた。ところが、途中からは傾斜がさらに急になっており、ピンクフラッグとは関係なく、真下のオアシスに吸い込まれるように走り降りていた。「体の重心を前に置き過ぎると、転倒したらOasisまで転げ落ちる」と思い、足を動かし続ける。視線は隈なく足元の状況と自分が進むべきルートを探し、足は砂に吸い込まれないように高く上げていた。その時は、まるで自分が空を飛んでいるような錯覚を起こしており、気分爽快。目の前に広がるインカ道まで、空の階段を駆け下りているような気分だった。Oasisが近づくと、足場が砂地から岩盤と礫が多くなり、身体が自然に右方向へ傾いていった。身体にスピードがついていて、止まれない。前方にOasisの木々が生い茂っており、夢中で右手で木の枝を掴むと、バランスを崩しながらもケガをせずに止まることができた。

木の枝を掴みながら岩盤を滑り降り、背丈以上の高さに生えたブッシュをかき分けて進むと、小川が流れる谷底へ着いた。川を飛び越え渡っていると、Zandyが写真を撮っている。Oasisの緑の中を川沿いに進んで行くと、整備された上りの道が現れ、観光客の姿も見え始めた。整備された道を上って行くと、休憩できるようなスペースにウッドデッキもあり、キャンプもできそうな雰囲気を感じる。道の中腹にCP1が見え、程なく到着した。CP1で休憩していると、Samanthaが英語で話しかけてきて、「ビデオレターがどうしたと」と言っているが、意味が分からない。NHKのカメラマンの方に通訳してもらおうと、「家族宛にビデオレターを送るインタビューをするか」と聞いていたようだ。カメラに向けて日本語で家族

へのメッセージを伝え、英語で通訳してもらいSamanthaに話をしてもらおう。靴の中も靴下も砂だらけなので、ゲータを外して全て脱ぎ、足に付いた砂も払ってからCPを出たら、20分以上時間が経っていた。後で聞いた話だが、このCPでは、お互いの走力の違う樺澤さん、佐藤くん、荒井くん、ケンの4名の日本人選手が集まったそうで、とてもレアだからと記念撮影をしたそうだ。

CP1で腰を落ち着けすぎたために、動き始めは筋肉が冷えて強張っていて足が痛い。CP1からは小高い峠の山頂まで登りが続き、山頂からは右側にOasisを眺めての下り道、バッグバッグを揺らしながら走り出す。道を下りきると、ピンクフラッグは川沿いに立てられており、砂漠地帯とは思えないほど、緑豊かな光景である。このまま川沿いの道に進むのかと思いきや、左の方向の石の斜面の上りに旗が続いていた。危うく旗を見落とすところだったが、滑りやすい悪路を上りきると右手にはフェンスで囲われた場所があり、フェンス沿いに走って行く。木が茂った地帯から、足場が砂地の上りに変わり歩いていると、右手にゲートが見えてきた。ゲートの辺りは山の斜面の中腹にあるような場所で、ゲートの中には学校が見えた。フェンスで囲まれた中は村のようで、ピンクフラッグが続いている。ゲートは白石を積み上げたブロックで作られており、「BIENVENIDO AL VALLE DE JERE」と上部にプレートのような物で書かれていた。ゲートの右側にはブロック造りの検問所のような建物があり、女性が一人立っていた。私が彼女に手を振って「HOLA!」と言うと、手を振り返してくれた。プレートに書かれていた文字はスペイン語で、「JERE谷へようこそ」と言う意味のようだ。

道幅は10mぐらいあり、地面は土砂だが硬い。ゴビ砂漠では、村に入ると両側に背の高いポプラ並木が続いていたが、アタカマ砂漠の村では両側に木の電柱が続いていた。村の中の家はブロックやトタンを使った平屋造りがほとんどで、大きな家は見当たらない。人影もほとんどなく人の気配を感じないが、前方の道の真ん中に人が立っている。自分のペースで走りながら近づいていくと、NHKスタッフの伊場さんだった。「村に入りましたが、子供たちと凧揚げをするのですか」と聞かれたが、子供たちの姿は全く見えない。おそらく村のゲート付近にあった学校で、勉強しているのだろう。今回も凧は2機バッグバッグに横付けして持ち歩いていたが、村の子供たちと一緒に凧揚げをし、凧をプレゼントしようと考えていたのである。村の入り口からは平坦であったが、中心部に入っていくと道は下り坂になっていて、遠くに砂漠が広がっているのが見える。村人と子供の姿を追い求め、ピンクフラッグに従って走って行くが、人には出会わない。ようやく村人の男性が、2歳ぐらいの女の子を抱きかかえて歩いているのを見掛けたが、話しかけられる雰囲気ではない。結局、村人の方も数人見かけた程度で、村を駆け抜けてしまった。

村の出口まで来ると、整備された道から砂漠地帯に変わっており、小高い丘の上に十字架が見える。ピンクフラッグは十字架の近くまで伸びており、前に行く女性選手の姿が砂丘の向こう側に消えた。村の坂道で見えた状況だと、砂漠地帯は10kmぐらい続き、その先

にOasis地帯の緑が見え、さらに後方にまで砂漠地帯が続き、アンデス山脈の裾野が広がっているように見えたのだが。砂丘を歩いて上がり十字架の場所まで来ると、一見緩やかな下りの土砂漠地帯が視界いっぱい飛び込んできた。この区間はModerateで、CPまでは13.5kmの距離がある。Oasisにたどり着くまでは、太陽光線を遮るものは何もなく、砂漠の照り返しも浴びることになる。先行する選手の姿を視認できるのは、砂漠地帯では道が平坦であれば、4~5kmぐらい先までは可能。自分がいる場所と前に行く選手、そしてOasisの3点を頭の中で結び、最終的に自分が目指す方向をアンデス山脈の山並みの地形と照らし合わせて記憶しておく。

前を歩いている女性の選手は、香港のFergusson Emmaさん。だいたい私と同じペースで走り歩きしているので顔見知りにはなっていたが、挨拶を交わす程度で話をしたことはない。彼女の耳には、いつもイヤホンが入っており、音楽を聴きながらレースをしていた。彼女のノリノリの英語の歌が無音世界の砂漠に流れ、リズムに乗って歩くステップが砂漠に刻まれて行く。Emmaさんを小走りで抜いて行くと、土砂漠地帯に起伏が現れた。どこの地形でもそうだが、レース中は平坦なコースがいつまでも続くものではない。数回の大きな起伏の斜面を上り下りしながらOasisを目指して進んで行く。途中でお腹がグーグー鳴りだしたので、行動食を食べようとポーチを開けたら、サプリメントしか入っていなかった。CP1でビデオレターに気を取られて、行動食をバッグバッグから移すのを忘れていたのである。バッグを地面に降ろして、ガサガサと行動食を移し変えていると、右前方から四輪駆動車が走って来る。砂漠の約1km右側には、進行方向に平行して道路が走っており、時折車が交通しているのが見えていた。四輪駆動車はレース・スタッフが乗っているのもで、道路脇に停車していたのだが、私に異変が起きたと思い込み近づいて来たようだ。私が歩き出すと、車から右手の親指を立てる動作をしているのが見える。私に「大丈夫か」と合図を送っているように感じたので、私は両手で口を塞いでから大きく手を広げ、「投げKISS」の動作をすると立ち去ってしまった。

行動食を食べながら、陽炎が昇る焼けた大地を歩き続ける。砂漠地帯の数kmは、どうにか小走りできていたが、異様に暑さを感じ始めたので歩きに変えた。砂漠地帯を2時間近く放浪しながら越えてOasisに入った。Oasisと言っても、大きな木が点々と立っているだけで、川も見えず地面は砂地のように柔らかい。ピンクフラッグを追いかけて、迷路のような大きな木の間を抜けて行くと、ようやくCP2が見えて来た。CP2をそのまま素通りしようとしたら、Doctorに呼び止められて「休んでいきなさい」と言われたが、休憩と水の補給をしなければ次のCPまで持つ訳がない。「この元気さを見てよオー」と言うパフォーマンスだったのだが、そうは受け取られなかったようだ。

CP2からは、いよいよアタカマ塩湖の硬い地面を越えて行くルートになっていた。車の轍がある道は少し歩き易いが、塩湖の塩の塊が剥き出しになっている大地を、走って越えて行けるだけの脚力を、私は持ち合わせていない。塩の塊の間から緑や茶色の草が顔を出し

ていて、遠くにロバのような動物が見えるが、塩湖に生える草を食んで生きているのだろうか。このような砂漠でも生きている動植物があると、地球で育まれている生命力の力強さを、心で感じてしまう。塩の塊の大地を想像すると、足で踏めば固まりは脆く崩れると思ってしまうのが、一般的な考え方だ。しかし、アタカマ塩湖の塩の塊は、ハンマーで叩かないと割れないほど硬く、溶岩が固まったようにゴツゴツとしていて非常に歩き難い。靴裏に硬い塩の突起物の刺激を受けながら前に進んで行くが、歩くのにも苦勞する。

地面は見渡す限りの塩の砂漠が視界に広がり白一色、上を見ると空は紺碧の青さを湛えて広がっていた。塩湖砂漠の空気は熱く乾燥し、選手たちの疲労を加速させて行く。砂漠では、都会では味わえない静寂との戦いも強いられる。レースをしながら砂漠を越えて行くと、自然の厳しさ、美しさ、生命力を体感することができ、地球の息吹を身体に取り入れることができる。五感に染み渡る過酷な環境から、生命に対する素晴らしさを学ぶと、自然に涙が目頭に滲んでいた。

月碧(ルノア)、元気にはしていますか？ 父ちゃんは、月碧のことを考えない日は、一日もありません。砂漠の向こう側には、いつの日か月碧に会える日が来ると信じています。

塩湖を渡っていると、茶色い道が進行方向に対し、水平方向に続いているのが見える。茶色い道は灌木のブッシュであり、小さな川が流れている兩岸に低く生えていた。川の水量は少なく水深は10cm程度で、水が溜っている小川とでも表現すべきか。川幅は約1.5mだったので、ストックで川の深さを確認してから、勢いをつけて飛び越えた。さらに塩湖を越えて行くと、2つ目の灌木地帯があり、小川にぶつかった。ストックを川に刺して深さを量ると、水深は約25cmあり、川幅も3mぐらいある。川の水は濁っており、川底の泥はヘドロのように汚い。勢いをつけただけでは飛び越えられないし、靴は濡らしたくなかったが、両手のストックを握り締め、ジャンプ一番川へ飛び込んだ。川の中にストックを突き刺し自重を預け、小川の向こう側へ反動を利用して飛び越える。着地した時に、左足の靴だけ水に濡れたが、被害が少なく渡り切ることができた。この小川の中を渡った選手の靴は、泥だらけになったに違いない。

アタカマ塩湖もようやく終わりが見え、ピンクフラッグの行き先が土砂漠地帯に変わって来たが、その先で竜巻が発生している。竜巻は30mほどの大きさがあり、地面から砂埃を巻き上げているのが、よく見える。STAGE2でも竜巻に遭遇しているが、ピンクフラッグが竜巻の方向に向かって延びているので、気分的には嫌な感じ。つむじ風とは違い、砂埃が渦を巻いて空に向かって回転しているのが良く分かる。何事もなく灌木が生えた土砂漠を越えて行くと、CP3が見えて来て、ほどなく到着。ここからは平坦な道が続き、BPまで残り6kmの道のりになる。

CP3で休憩していると伊場さんがカメラを回していた。テレビクルーの人は何人もの選手を取材し、時には重いカメラを持って選手と併走し、また翌日のコースの下調べ等もしているので、疲弊しているのが表情からも読み取れる。アタカマクロッシングの90分番組を

制作するのに、相当量の映像を撮っているようだが、帰国してからの編集作業も大変だろう。

私はCPを出る時に、必ずスタッフに感謝の言葉を言うようにしている。「Thank you CP3！」と、いつもの様に手を振ってCPに別れを告げ、BPを目指す。残りの距離は短く、起伏の少ない平坦な道が続くが、走る気力と体力が残っていない。自分のペースで歩き始めると、伊場さんも追いかけて来て、インタビューを受けながら先へ進んだ。西日が傾いて気温が上昇して行く中、直射日光の強い紫外線が皮膚を焼き焦がして行く。日差しは強いが湿気が全くないので、「暑い」とは感じない。ただ日焼けした肌が、日差しが強くなると「痛い」と感じるようになる。首筋と膝裏の辺りに痛みを感じていたのだから、手袋を外してからタオルを首筋に巻きつけ、直射日光の攻撃から露出していた肌を防御する。何気なく顔を手で触ってみると、手指にザラザラした感触があった。汗の塩分と砂埃が混じり、垢にまみれて付着していることが、容易に想像できる。左頬の辺りは皮膚が剥けているようで、手指で触るとガサガサしている。「BPに着いたら、足裏と日焼けの治療が必要だな」と思い、土漠地帯を歩いて行く。

車が交通できる道幅の、平坦な道を2kmぐらい歩くと、右手にBPのテント村が見えて来た。しかし、ピンクフラッグは、整備された道沿いに続いており、テント村に直線距離で向かうようには立っていなかった。テント村を右に見て、大きく左へ迂回しないとBPへは行けないようだ。起伏はないが凸凹はある踏み固められた道をひたすら歩く。前に二人組みの選手が見えていたが、ようやく速歩で追いつき追い越すことができた。前方に香港のEmmaさんも歩いていて、彼女の速歩は異常に速く、差はどんどん開くばかり。道が右方向にカーブして進んでいると、太鼓の音色が聞こえてきて来た。Emmaさんが先にBPにゴールした音だろう。彼女に刺激されたように、ゆっくりと走り始める。テント村は見えているが、ゴールゲートは見えて来ない。ようやく陽炎が昇る道の先に霞むようにゲートが見え、足を止めずに走り続けると、ゲートで出迎える近藤さんや荒井くんの顔があった。両手を上下に羽ばたかせて、左右に蛇行しながらゴールへ向かう。ゲートではいつもの儀式を行い、指輪にKissをしながら心の中で嫁さんに帰還報告をした。

STAGE4 42.8km 9時間34分30秒 59位

荒い息を弾ませながら、ゲート脇にあるテントで小休止。チップをスキャンしてもらい、1.5ℓの水を3本支給してもらった。今回のレースからは、携行しているチップをスタート前とゴール後にスキャンして、タイムを計測している。この作業により、PCさえあれば世界中どこの国にいても、速報でどの選手がゴールしたかどうかが確認できるらしい。このテント村を迂回してきたコースだが、その場所には白く輝く塩湖が広大に横たわっていた。レース中に苦戦していたゴツゴツした塩の塊の塩湖ではなく、ジャリジャリとした土砂のような感じの手触りで、とても歩き易い。塩湖には大型バスで乗りつけた観光客の姿も見

える。湖には水はなく、塩の結晶だけが広大な湖に広がっており、天境線にはリカンカブール火山が大きく聳えている。こんな雄大な景色を味わえるのは、砂漠の中の贅沢であり、酒さえあれば良いツマミになるのだが、無理な注文である。

重い腰をようやく上げて我が家へ帰還すると、テントメイトの6人は既に到着していた。あなたたち、スピード違反でチリの警察官に捕まりませんでしたか。バッグを降ろし、靴を脱いで座ると、さらに一息つくことができた。樺澤さんと佐藤くんに、「今日はどうだった？ 体調は大丈夫？」と、私から聞いておきながら、彼らの返答はほとんど聞いていなかった。テントの中で腰を下ろした瞬間に、疲れがドッと出てきて、思考回路が遮断されたようです。そのまま横になり、20分ぐらいしてから、バッグバッグからメディカルキットを取り出して、足裏と日焼けの治療に出掛けた。足も狭い靴の中から開放されて、気持ちよさそう。サンダル履きで、ヨチヨチ歩きをしながらメディカル・テントへ向かった。

メディカルでは、昨日のように自分で治療をしようと考え、まずは足裏を入念に洗った。ついでに、頭から顔・手・体幹部・股間・足、耳も鼻もきれいに洗い清拭開始。身体を拭いたタオルとは今生の別れをしたのは当然の成り行きである。意気揚々とテント内に入り、Doctorに「自分で治療するから鋏を貸して下さい」とお願いし、鋏を借りて準備良し！ 足裏を見ると、超巨大な物体が目に入った。右足裏の肉刺は直径10cmぐらいあり、肉刺の中に肉刺ができていて、肉刺の中に砂が入り込んでいる。肉刺に安全ピンを刺して穴を開け、水抜きをし、針の先で砂を取り除くが上手くいかない。15分ほど格闘してからDoctorに、「I gave it up.」と治療をお願いした。DoctorのLlona Barash, M. D. とDJ Kennedy, M. D. が快く了承してくれたが、私の足裏の肉刺を見て、「写真を撮っていいか？」とカメラを持ち出して撮っていた。やはり、素人では自分で治療するのもにも限界があるし、症例の写真を撮るぐらい大きな肉刺だったと納得した。足裏の治療が手際よく終わったので、首筋の日焼けもお願いすると、またもやDr. DJが写真を撮りだした。日焼けと言うより熱傷の状態のようで、痛みは言葉では表現できない。「日焼け止めクリームをよく塗るように」と、Dr. Llonaからアドバイスを受けたが、残念ながらクリームは使い切ってしまう残っていない。明日からは日焼けしないように、首筋の保護を考えながらレースをしなければと思い、メディカル・テントを後にした。

テントに戻り、デジカメのバッテリーが切れたことを樺澤さんに話すと、嬉しいことに予備バッテリーを貸してくれると言うではないか。同じメーカーのデジカメなので期待が持てる。しかし、樺澤さんが取り出したバッテリーを一目見ただけで、「違う」と分かってしまった。自分のデジカメにバッテリーを入れようとしても、やはりサイズが合わなかった。樺澤さんに写真を撮ってもらいに塩湖の方へ行き、「この写真は年賀状で使うから、カッコイイ写真頼むよォー」と言ってポーズを決める。写真では、アタカマ塩湖の塩塊は白く雪のように見え、湖面に立つと氷の上にいるとの印象を受ける。この写真は、誰が見てもワカサギ釣りに来たオッさんにしか見えないだろう。

夕暮れが砂漠に沈み込む時間帯になると、風が強く吹き始めた。砂漠に沈んで行く夕日は美しい。夕日を眺めていると、NHKスタッフの駒井(コマケン)さんが話しかけてきた。コマケンさんは名前の知れたトレイルランナーで、奥多摩全山を1週するハセツネCUP(71.5km)の山岳レースでも、8時間台でゴールする猛者である。私もハセツネには4回出場し完走しているが、18時間ぐらい掛からないとゴールできない。「コマケンさんも、4DESERTSシリーズにエントリーして走れば良いのに」と、お誘いをしておいた。私の話を聞いて、コマケンさんは「宍戸は砂漠レースを旅として考えている」と理解してくれたようで、とても嬉しかった。他の競技者は、レースだから競争しに来ている輩もいれば、家族との絆のために出場している者もいる。砂漠レースに対する思いは、選手一人ひとり異なるが、砂漠を越えて行く距離とゴールは同じである。そのレースの中で素敵な出会いや再会があり、絆で結ばれた仲間として国境を越えて選手同士が友達になれるのだから、楽しくない訳がない。

夜ご飯にありついた頃には、外は真っ暗闇で、空には星が煌々と瞬き始めていた。焚火の中で大きな灌木がパチパチと音を立て燃えており、火の粉が風で舞い上がっている。炎を見ているだけで、気持ちが安らいでいき、心地が良い。仲間たちと今日のレースについて語らう、至福の時間がゆっくり流れる。風が強く寒さに震えていたが、心は温かだった。

3月10日(木) STAGE5:The Long March (Continued) 距離:73.6km 標高2315m~2431m

昨夜は22時前には寝袋の中に入ったが、寝付いたのは深夜の2時過ぎだった。隣で寝ていたイギリスの選手が、ガサガサと寝袋の中で何かしており、物音が耳に障ってなかなか寝られなかった。両耳に入れた耳栓を通して音が聞こえてくるのだから、堪らない。テント内の地面はいつも平坦とは限らず、傾斜していることもある。また、地面が凸凹だったり、穴が開いていて窪みになっていたりすることもあった。昨夜は、テントの奥から入り口に向かって下る傾斜が付いていたので、イギリスの選手が寝返りを繰り返していたように思う。朝、起きてみると、彼の大きな身体だけが、他の選手とは違う向きにあり、一人でスペースを占有していた。

いよいよオーバーナイト・ステージの朝を迎えた。昨日までの4日間で、アタカマ砂漠の大地を160km余り越えて来たことになる。今日のSTAGEでは73.6kmの距離があるが、夜中の0時までにはゴールをしたい。寝袋を畳んでバッグに仕舞い込み、朝ご飯の準備に取り掛かる。テントの外に出ると外はまだ暗く、足元を照らすヘッドライトが必要。天空には星が煌き、天の川の中に南十字星が見える。テントの外は非常に寒く、身体から露出している肌からは、熱が奪われて行くようで、手足と顔が冷たくなった。とにかく寒い。温度計を見ると、気温は5℃になっている。上着はユニクロ仕様の軽量ダウンジャケットを着ていたが、ズボンは薄手のジャージだったので、下半身からも体温が逃げて行き、アタカマの大地に吸い取られていくようだ。まずは温かいスープと味噌汁を飲んで、身体を落ち着かせ

る。夜明け前の薄暗い時間帯から、選手それぞれがレースの仕度を始めていた。

リカンカブール火山の辺りから、朝日が昇ってきた。太陽が昇り沈んで行くのは、自然の摂理だが、地球を一番身近に感じられる時間帯なのかも知れない。砂漠レースでは、人が住めないような極地を越えて行き、過酷な自然環境を目にすることもある。同じ地球だとは思えない不毛の大地で、自然が織り成す造形美に出会い、その場所で人との接触を持つと、心が洗われて純粋な気持ちになれる。自然の恵みとは、人間が生きていく上で必要な食べ物を得るだけでなく、心の触れ合いも然りと思う。

朝ご飯に、アルファ米にレトルトの具財をかけて食べていたが、半分しか食べられない。やはり、胃がご飯を受けつけなくなってしまった。昨日の黒い犬がいたので、アルファ米をスプーンにのせて食べさせると、器用にご飯を食べている。この犬も、オーバーナイトステージの73.6kmを走りきることにになるとは、この時は誰も想像し得なかった。犬はCP1までの15kmの区間を3位で通過し、CPではスタッフから水を貰って飲み、選手を追いかけて走り歩きを続けて、翌日の昼前にはBPに戻ってきたと、後から聞くことになる。

いつもパッキングの準備に追われてブリーフィングの時間に間に合わなかったが、食料品が少なくなってきたので準備が捗る。佐藤くんは、毎朝ぎりぎりまで寝袋に入り身体を休めていたが、私にもそんな余裕があればいつも羨ましく思っていた。今日のコースを確認すると、15.0km-12.7km-14.5km-13.5km-8.5km-9.4kmの73.6kmとなっている。STAGE5のコース表は2枚あり、私は1枚目のコース表を見ていたのだが、レース中に間違いだと気付くことになる。CP4までの55.7kmを20時までに着ければ、深夜0時までにBPへ着けると考えていた。最後尾に並んで、スタートを待つ。今朝の冷え込みは、上着が1枚必要なぐらいに寒く、選手達もぶるぶる震えている。走り始めれば身体が暖くなるのだが、それまでは耐えるしかない。今日のレースはロングステージなので、夜には寒さとの戦いもあり、夕方から吹き荒れる強風がどのように影響するのかも、少し心配になっていた。

カウントダウンが始まり、選手が塩湖に飛び出して行った。塩湖は起伏が少なく、柔らかい塩の結晶の上を走って行く。朝日に照らされた体からは、汗が蒸発し煙が出始めた。吐く息は白く、手袋していても手の指先が凍るように冷たい。1kmほど進むと、レーススタッフ2名が前方にいて、水を配っていた。スタートして間もない場所だったので、そのまま挨拶だけしてスルー。こんなに早い時点の場所で給水ポイントを作る理由が、私には理解できなかった。塩湖の地面もソルトフラットも徐々に牙を剥き始める。ゴツゴツとした塩の塊の硬い地面が現れ、小幅なスタンスで歩いていると、足裏の肉刺と股間の股擦れを刺激して行く。痛みは15分も耐えて歩いていれば、次第に麻痺していくのだが、最初からこれだと気が重い。

塩湖には所々に窪地があり、池のように水が溜まっている。この水はとても澄んでいて、透明度は抜群だったが、生き物の影は見られなかった。塩分濃度が高いせいで、生物も息できる環境ではないらしい。乾燥した灌木が塩の塊から顔を出していて、この灌木は、



根っこに近づくと茶色く、葉の方は緑色に息づいている。それにしても毎度のことだが、硬い塩湖の塩岩の間から、地上に顔を出して息吹くとは、生命力の力強さを感じる。自分は、その大地を踏み越えて行くのだが、この灌木は非常に硬く棘が鋭く、足の脛や腕に触れると無数の擦り傷が出来た。植物の棘も、この乾燥した気候では、わずかに存在する水蒸気を有効に保水する為のものなのだろう。灌木の生える大地から、背丈ほどの藪の中を漕ぐようにして進んで行くと、CP1が見えて来た。朝一から塩湖を渡らせ、泥と塩が混在する不安定な足場へ誘い、藪漕ぎするような場所をコースに設定する、コース・ディレクターの喜ぶ顔が目につく。そんなCP1までは、Extremely Difficultの15kmコースになっており、2時間半以上も時間が掛かってしまった。

CP2からは、比較的柔らかい砂が混じる土砂漠になり、灌木の他に木々の緑で覆われた地帯も抜けて行く。起伏のある柔らかい砂地では、私の脚力では走り切れないので歩きに変える。走れるところは走り、疲れて走れない場所は歩くようにし、自分のペースでレースをして行くのが、一番疲労が溜まらない方法である。完走を目指すなら、勝負にこだわり競争することよりも、自分のペースで淡々と歩を進めた方が賢明だと思う。ただ、体力に裏打ちされた走歩力が無ければ、砂漠レースには出場しない方が良いでしょう。レースは長丁場なので、フルマラソンを3時間や4時間で走る人も、砂漠レースでは実力を発揮しきれない人もいます。1週間分の荷物を背負い、舗装されたアスファルトの道は無く、40℃を超える気温の中をレースするのだから、普通のマラソンとは同じ尺度で考えること自体が間違っている。

また、砂漠レースに出場していると、「何が楽しいのですか?」と、よく聞かれることがある。私は出場を決めた砂漠レースのために、1年以上の月日をかけて走り歩きの体力錬成をして行く。家族で買い物に行っても、商品棚にあるフリーズドライの食品があったりすると、「レースでこの食品は使えないか」と、考え込んでしまうこともある。1年中砂漠レースのことを考え、準備しながら装備品を揃えて行き、砂漠フレンズと情報交換しているのが楽しい。砂漠レースで仲良くなった外国の選手との交流も続き、メールのやり取りや家に遊びに来たりすることも素敵だ。時には、「そんなに自分の身体を痛めつけて、何が楽しいのだ。マゾだとか・・・」とも言われたこともあるが、砂漠レースだけは、自分で出場してみなければ、その楽しさを絶対に理解することはできないだろう。理由は、砂漠レースを一度でも走ったことがある人が、また砂漠レースに戻って来る確立は50%を超えている事実が証明している。ただ、辛いだけのレースのために、人は大金を支払って、はるばる海外まで出掛けて砂漠に行き、身体を痛めつけに行く物好きは居るまい。「言いたい奴には言わせておけ」と思い、今では逆に「砂漠レースの何が面白くないと思うのか」と聞くようになってしまった。

CP1～CP3までの18.7kmは、代わり映えのしない土砂漠地帯を越えて行く単調な起伏が続く、コースとしては面白味に欠けている。CP3の手前からは長い一本道が続き、その奥には

アンデスの山の裾野が広がっていた。この時は、CP1～CP3までの距離が27.2kmあると思っ  
込んでいたので、CP3までに予定より2時間以上も早く着き、精神的にも余裕があった。コ  
ースの距離感が怪しく、CPに早く着きすぎるとは感じていたが、景色が良いので気にも留  
めていない。「もう一度、大砂丘下りがしてみたい」と言う欲求に駆られながら、CP4を目  
指すぐらいに、疲労感も少ない。実際にはCP3～CP4までの距離も8.5kmで、Moderate to  
Difficultになっていたが、自分が見ていたレースのHANDBOOKには距離は13.5kmでModerate  
コースとの記載になっていた。

CP4を目指して小走りしていると、砂漠の表情が変わり景色が一変する。そのまま直進し  
て行くと思っ込んでいた私の考えが、甘かったことを思い知らされる。地面は岩盤と礫に  
なり、石が混在する礫砂漠の様相を呈してきた。砂漠には灌木の姿は皆無となり、大地の  
表情も数kmごとに表情を変えて行く。約1km先を歩く選手と300m先に行く選手を目印に進ん  
でいたが、2km先にも3つほど動く人影が視認できる。「Moderateコースなのだから、岩壁越  
えのコースはあり得ない」と思いつつ、小石の混じる硬い地面から砂地へ、また礫へと姿  
を変える砂漠を越えて行くと、右前方に大きな砂丘を湛えた岩壁が顔を現した。「このまま  
直進して、あの砂丘上りをするのか」と、妙な胸騒ぎをしながら砂丘の中腹を見上げると、  
4人の選手が取り付いていた。

「さすがRACING THE PLANETの4DESERTSシリーズで、最も過酷な砂漠レース」と位置付け  
ているアタカマクロッシング、決して期待を裏切らない。大砂丘越えに挑んでいる4人の選  
手の動きを見ながら、自分が進むべきルートを手の中イメージし探して行く。砂丘の上  
まで行くには、目測で400m～500mの登りが続くように見える。4人は、「日光のいろは坂」  
を上る車のように、左右への旋回を繰り返しながら上っている。大砂丘の手前まで、まだ  
距離があるが、恐ろしいほどの急傾斜に砂面が横たわっているのが分かる。砂丘の手前  
には大きな岩盤があり、私の前に行く選手は大きく右へ廻り込みながら砂丘に張り付いて行  
く。私は岩盤の左から直進ルートで大砂丘を攻めることにした。砂丘の上り始めは砂が柔  
らかく、靴が砂の中に沈みこむ。しばらく歩くと、砂丘の斜面は踏み固められた砂のよう  
に硬い砂地になっていた。大砂丘を登り続けると、やはり傾斜が強くなり直進しては上り  
きれなくなる。蛇行しながらジグザグに砂丘の斜面を上り、中腹辺りで足を止めて水を飲  
んだ。顔からは汗が滝のように滴り落ち、息は弾んでいる。頭上には青空が一面に広がり、  
太陽が我が物顔で容赦なく照りつけている。自分が見ている視界には陽炎が立ちこめてお  
り、景色が歪んで見えるほどだ。後ろを振り返り、砂漠の大地全体を見渡すと、荒涼とし  
た不毛の茶褐色の大地が広がっていた。遠く天境線の辺りには、リカンカブール火山も見  
えており、私の背中を後押してくれていたような錯覚に、思わず微笑んでしまう。「大砂丘  
を登りきったら、君の写真を撮らせてもらおうよ」と心の中で呟き、休憩終了。デジカメの  
バッテリーが、暑さで復活してくれていることを祈りながら、斜面に足跡を着けて行った。

Guatemalaから出場している3人の選手に、大砂丘の頂上付近で追いつく。彼らはTEAMを

組んでレースしているようで、同じユニホームに身を包み、一緒に行動をしていた。テント村では彼らの姿をよく見ていたが、レース中には初めて会う。彼らは私より速いペースの選手達なのだが、何かアクシデントでもあったのかと思い話しかけてみた。ロングステージなので、彼らなりの作戦を立てて行動しているとのことで、一安心。彼らが、「3人一緒に写真を撮ってくれ」との要望を言ってきたので、快くシャッターを切る。私のデジカメで、リカンカブール火山を背景にして自分の写真を撮ってもらったが、上手く写っているか楽しみである。大砂丘の上から、自分が越えて来たアタカマ砂漠を眺めながら、大きく深呼吸をする。大砂丘へ向かってくる選手が、下界に広がる砂漠に点々と蟻のように見える。「とても贅沢な時間を過ごしているな」と心の奥底から思い、タバコに火をつけると、充実した幸福感に身体が包まれていった。

大砂丘の上は、地表が岩盤に覆われた歩き難い場所が続いていた。奇妙な形をしている地面は、何かの鉱石か石灰岩で形成されているのだろうか。起伏は少ないが地面は非常に硬く、水溜りが年月を重ね干上がり縁で囲まれたような岩盤の上を歩いていると、「地球が惑星である」という認識を、強く私にさせていた。前を歩いていたGuatemala3人組みが、何やら大声で話しているのが聞こえる。数十秒間同じ場所から動かずに話をしているようであったが、次の瞬間、彼らの姿が、突然前方から消え去った。「この岩盤地帯の先に何があるのか」と考えると、自然に歩く速度が速くなっていた。

岩盤地帯の先まで来ると、急斜面の崖を下って砂丘地帯の稜線へ続くコースになっていた。視界が眼下に広がって、澄み渡る青空が開放感となり、この急斜面では歩くより走るほうが楽しそうに感じる。「オラー」と大声で叫びながら崖へ飛び出した。崖を走って下って行くと、砂丘の稜線からは一段と傾斜が急になっていて、加速するばかり。左右は数100m下まで砂丘が裾野を広げているので、落ちたらコースへ復帰するのも困難極まりない。足裏に力を入れて踏ん張るようにブレーキをかけてみたが、なかなかスピードは落ちず止まれない。足裏から肉刺の潰れた感触と痛みが、同時に脳を刺激した。それでも、身体を後方へ反らせて足をバタバタさせブレーキをかけると、砂丘下りの中腹辺りで止まることができた。足裏の痛みを耐えながら、スピードを殺して歩いていると、砂丘の下にCP4があり、手招きをして微笑んでいるように幟旗が風に揺られている。

CP4に着きバッグバッグを背中から降ろして椅子に座ると、足裏の肉刺がジンジンと痛み出す。CP4にDoctorがいて治療もお願いできたが、「残り18kmでBPに着くから、治療は後回しにしよう」と考え、10分後にはCPと別れを告げて歩き出していた。実際にはBPまで残り32kmあったのだが、この時は全く知らず、「この調子で行けば、日没までにはBPにたどり着ける」とさえ、頭の中で計算していた。平坦で地面の軟らかい土砂漠地帯を越えて行くと、20分ぐらいで足裏の痛みが麻痺して来て、普通に歩けるようになった。前に行くGuatemala3人衆を追うが、流石に引き離される一方だった。自分のペースを見失わず、一人旅を続けていたが、西日が暑い。日差しが首筋や胸元の皮膚に突き刺す当たり、熱傷のようにヒリ

ヒリ痛み出す。何気なく温度計を見ると、気温は45℃を表示していた。さらに驚いたことには、今の時間は17時40分だと言うことである。14時頃の気温が40℃だったのだから、西日が如何に強烈な日差しで照り付けているか、想像できるだろう。アンデスの夏の太陽は、灼熱のアタカマ砂漠を焦がし、直射日光と輻射熱で陽炎に包まれて歩いていると、火災現場にいるようだった。

アタカマ砂漠が、音を立てて騒ぎ出してきた。夕方からの強風が始まったのである。風はどんどん強くなり、砂埃を巻き上げて行く。風が強くなると気温も下がるので、とても歩き易くなるのだが、向かい風だけは勘弁して欲しい。18時40分に温度計を見ると、気温は34℃になっていた。1時間で気温が10℃も下がるアタカマ砂漠、日没までに1時間以上あるが、CP5にようやく到着した。

CPにはスタッフの姿しか見えないと思っていたら、テントの裏に止めた四輪駆動車の後ろでGuatemala3人衆ともう1人の選手が休憩していた。バッグバッグから長袖シャツ、ヘッドランプ、赤色点滅灯を取り出して、夜の闇に備える。長袖シャツは、ガラビィーヤの中に着込んでいると、スタッフのSamanthaが「SEIJIは侍みたいだ」と話し掛けてきたので、ストックを刀に見立てて振り回すと喜んでくれた。左側にテントが2つ張られており、私たちの笑い声に誘われたのか、テントの入口からこちらを見ている選手の顔が見えた。「おかしい」と直感的に感じたので、Samanthaに「あと10kmでBPに着くよね」と聞くと、「BPは20km先で、CP6を越えて行かなければならない」との答えが返ってきた。ポーチに入れていたHandbookをSamanthaに見せて確認すると、私が見ていたSTAGE5の次のページにも、STAGE5が記載されているではないか。つまり、STAGE5には①と②のコースがあり、②のコースを選手にレースさせたと言う訳になる。あと20kmあるかと思うと、どっと疲れが押し寄せてきた。NHKの取材クルーの人に、「テントで休んでいかないのか」と聞かれたが、私はLONG STAGEの途中でテントの中で寝ることは考えていない。一気にBPを目指しコースを陥落させるのが、私の砂漠レースでの流儀である。私より先に休んでいた4人に、先にCPを出してもらい、「道先案内人よろしく！」してもらいたかったが、出て行く気配すら感じない。バッグの後ろに付けた赤色点滅灯のスイッチを入れ、ヘッドランプを頭に付けてから、強風が吹き荒れる砂漠へ歩き出した。

車が通れる道幅の広い道を歩いていると、下半身が涼しくなってきた。走る気力も無く、黙々と歩き続け、気温を見ると19時20分で22℃と表示されている。この2時間弱の間に、20℃以上気温が下がったことになる。左手に見えるアンデスの山並みに太陽が沈んで行き、徐々にアタカマ砂漠が夜の闇に包まれて行く。風はさらに強くなり、アンデス山脈からの吹き降ろす風が左前方から身体に当たり、汗で濡れたガラビィーヤが冷たく感じ、歩く邪魔をする。見渡せる限りの雄大な砂漠の中に、自分一人しか存在していない。自分の周囲3km四方には全く人の気配はなく、「ゴー、ゴー」と言う地鳴りのような風の音だけが、聞こえていた。ピンクフラッグには黄色い蛍光スティックが取り付けられており、夜の砂漠ではその

小さな灯りを頼りに進んで行く。LONG STAGEでは、50kmの道のりを越えると、選手が道に迷わないように配慮しているのか、直線的なルートを提供することが多くなる。それでもレースによっては、時には川越えや峠越えのコースも出てくるが、今は直線的な一本道が、数km先まで暗闇の砂漠の中に続いていた。

星が天空に少しずつ増え始め夜空に瞬き始めると、素敵な天体Showが始まった。空を見上げながら歩いていると、日中の疲れも忘れて癒される。砂漠の中で熱せられた身体の熱も、冷たく吹き荒れる風によって冷却されていった。流れ星は天体Showに華を添え、天の川は無数の星屑を満面に湛えて雲状の光の帯となり、我が物顔で天空に横たわっている。オーストラリアの砂漠では、天の川の星の光で自分の影が地面にできると言う。太陽や月の光で自分の影ができることは、周知の事実。地球上の物体に影を生じさせる天体は、太陽、月、金星、天の川の4つだけしかないそうだ。

風の音以外に、何か物音が聞こえたような気がしたので後ろを振り返ると、1人の選手が暗闇の中を走って近づいていた。その選手はヘッドランプの灯りを消して走っていたので、影が走っているようにしか見えない。抜かれた時に手を叩いて選手を褒め称えたが、アメリカ国旗のワッペンを肩に付けた男性選手だったが、誰だったかは分からなかった。2時間ほど歩くうちに、道は「コ」の字になっていたことが分かった。「コ」の字先の道は、谷間へ続く足場が柔らかい土砂地の上りになっており、CPが近いことを匂わせている。幟旗がバタバタと風に煽られる音が聞こえ、歩を速めて近づいて行くと、幟旗が風で狂ったように暴れていた。CP6は岩場の陰に隠れるように設置されていて、なるべく風の影響を受けないような工夫がされていた。

CP6では、下半身を冷やすと筋肉が固まり動けなくなると思い、ガラビィーヤの下にズボンを履いたのだが、靴を脱がずにズボンが履けたので、何か得した気分を感じられた。スタッフから、「BPまでは残り10km、谷を上って平坦な道を越えてから斜面を下り、フラットな道を歩いたらゴールだ」との説明を受けた。ここにはNHKのテレビスタッフの伊場さんがいたが、彼らもテレビ番組を制作するためとは言え、選手と同様にテント暮らしをしながら取材を続けている。砂漠の中でテレビカメラを持ち、選手が来るまで根気良く待ち構え、併走しながらインタビューや撮影をしていた。そんなアタカマクロッシングも、終わりに近づいている。ここまで約230kmの砂漠を越えてきたが、目指すは今日のゴールだけ。その日のゴールにたどり着けさえすれば、明日が必ず見えて来る。BPで痛めた足を引きずって歩いているけど、翌朝に靴を履いてスタートラインに立てば、選手が目指すのは「その日のゴールだけ」なのである。

CP6のスタッフと伊場さんに別れを告げ、砂漠の谷へと登って行く。休憩後の歩き始めは、筋肉が硬直しているため足が痛い。「水曜どうでしょう」のエンディングテーマ曲である、「1/6の夢旅人2002(樋口了一)」の歌を口ずさみ、「そんな風に、そんな風に、僕は生きていんだ、生きて行きたいんだあー♪」と大声で歌う。谷を上りきると、谷下のCP6の方向か

ら声が聞こえてきた。Guatemala3人衆もCPに到着したようだ。谷の上は足場の固い道が直線で続いており、時折スタッフの車も通り砂埃を巻き上げて行く。また1台、後方から車が近づいて来たので、車に向かって手を振り、スーパーマンのポーズをすると歓声を上げてくれた。あの声の持ち主は、主催者のMaryの声だったように思う。谷の上ではいつの間にか風は無風になっていた。1kmぐらい先の闇の中では、赤色点滅灯が揺れ動き、先行している選手が夜空の向こうにあるBPへ誘ってくれている。行動食を食べ、バッグバッグに入れた水筒からチューブ伝いに水を飲むと、水が冷たい。チューブの部分だけは外気に曝されているので、日中に飲む水はぬるま湯になっている。そのギャップが楽しく感じられた。

過去の砂漠レースでLONG STAGEの夜を思い出し、星空を見上げて歩き続ける。私が唯一LONG STAGEの夜にバディーを組んで歩いたのは、船尾さんだった。ゴビマーチ2008では、23時頃に日没を迎えたのだが、バディーを組まないと先へ進ませてもらえなかったのである。船尾さんとはCPでたまたま一緒になり、「星が舞い踊るような夜空を見上げ、途中で休憩しながら朝まで一緒に歩いていたな」と感傷に浸っていた。そんな思い出を一瞬で吹き飛ばすような光景が、突然目の前に現れた。私が見ていた星空の左方向から、明らかに流れ星とは違う小石程度の大きさの赤く光る物体が、彗星のように尾を長く引いて水平方向へ移動している。その光る尾は段々と長くなり、赤く光る物体のサイズが一瞬大きくなったなと思ったら、大きな閃光を発して消えてしまった。数秒間の出来事だったが、あれは隕石が大気圏に突入した物ではないかと、私は考えている。

歩き易かった車の通れる道から、左斜め方向へコースアウトして行くように、ピンクフラッグが延びていた。地面は足元が柔らかい砂地になり、起伏もある。砂地を進んで行くと、コースを示す蛍光ペンライトだけが砂漠の暗闇の中に浮かび上がり、あたかも空中に縄梯子が掛かっているように見える。私がアタカマクロッシングで一番楽しみにしていたValle De La Luna(月の谷)へ、ようやく来ることができた瞬間でもあった。スペイン語で月を意味する言葉はLuna、末娘の月紅(ルナ)の名前を付けた語源である。ペンライトで照らされた砂丘の橋を渡りながら、家族の顔を思い浮かべていた。太陽が沈む前に、月の谷を見てみたい気持ちもあったが、三日月が優しく私を見守り、南十字星が天空で微笑んでいる姿の谷は、とても趣がある。あまりにも星空が素敵に瞬き、三日月が谷から顔を出している景色が美しかったので、バッグバッグを背中から降ろして座り、しばらく見惚れてしまった。

急斜面の砂地の坂を上り、大き目の砂丘を下って行くと、左右に蛇行した下り道になっていた。左右の両側からは、丸みを帯びた背の高い岩盤が迫り出し、まるで砂が流れる渓谷下りをしているような錯覚を覚える。「こんな場所で宇宙人に拉致されたら、どうなるのだろう」と、奇想天外な発想をしていた。前方から話し声が聞こえたので耳を澄まし歩いていると、前からNHKの取材クルーの方が数人で、重そうな撮影資器材を持って、月の谷を歩いて上がって来た。「お疲れ様です」と声を掛け、BPまでの距離を聞くと、「もうすぐで

す。あと1~2kmでBPに着きますよ」と言うのではないか。この言葉を鵜呑みにし、ぬか喜びをしたのは、私だけであった。

月の谷を抜けると、車が交通する道幅の広い整備された道に出た。ピンクフラッグは左折を促すように道に示されており、道路に出ると、暗闇の中に浮かび上がる地平線上に、町の灯りが瞬いているのが見える。「ようやくサンペドロデアタカマの町に戻って来た」と言う安心感と嬉しさが胸に込み上げ、身体の血流が熱く滾り、涙が込み上げてきた。エジプトレースの時にもLONG STAGEの夜に、砂丘の谷間から地平線上に広がる町の灯りを見つけた時は、涙を流していた。どうも、40歳を超えると涙腺が弱くなり困る。喜び勇んで速歩で足場の硬い道を進むが、一向にBPが見えて来ない。とっくにNHKスタッフと出会ってからは数キロ先まで歩き続けている。「あの腐れNHKスタッフ、何が1~2kmでBPに着く」だと、悪態をつきながら、速歩する速度は緩めない。右手の砂漠の中に、隠すようにBPの灯りが見え隠れしているのに気が付いた。太鼓の音も聞こえて来て、前に行く選手がゴールしたことを伝えている。整備された道から大きく外れ右旋回して歩いて行くと、LONG STAGEのゴールゲートが一際明るくライトアップして浮かんでいた。ラスト100mは、ゆっくり走りながら万感の思いを込めて、左手の指輪にKissをしながらゴール。

STAGE5 73.6km 16時間04分30秒 50位

目標としていた0時に数分遅れてのゴールだったが、終わってみれば予定通りにBPに着けたことが嬉しかった。ゴールでは近藤さんが出迎えてくれたが、寒さに震えている。朝まで帰還してくる選手を寝袋に包まりながら待つスタッフも、大変な仕事である。焚火に当りながらスープを飲み、身体を暖める。LONG STAGEを戦った後は、興奮してなかなか寝つけないので、ゆっくりと時間を過ごす。熱いお湯にタオルを濡らし、身体の隅々まで清拭していくと気持ちが良い。冷え込みが強くなってきたので、自分のテントに戻ると、寝るスペースがない。先着している6名が、左右に分かれて3人ずつ広々とした位置で寝袋に入って休んでいた。そんな時は、寝ている人に向けてヘッドライトを照射して、無言の圧力を加え、声を掛けずに起こしスペースを開けさせる。佐藤さんとWandaさんには悪かったが、私も休みたいので仕方が無い。

3月11日(金) 休日

LONG STAGEを終えた朝は、8時過ぎに目が覚めた。持って来ていたアルファーマイは食べ尽くしたので、インスタントラーメンを朝食にする。談笑しながら食事をしていると、近藤さんがサーバーテントから荒井くんを呼んで、何やらPCを操作していた。10分ぐらいして荒井くんが戻ってくると、「日本で大きな地震が発生し、300名以上の方が亡くなっている」と言うのではないか。詳しく話を聞くと、東北、千葉、岐阜辺りの3ヶ所で、震度7の地震が発生し、津波による被害も甚大だと話していた。佐藤くんから携帯電話を借りて自宅へ電

話連絡するが、繋がらなかった。実家に電話すると父親が電話に出て、ガス電気水道のライフラインが停止し、電話も不通になって掛からない場所が多いとのこと。私の家族にケガ等はなく全員無事で、私の家族を車に乗せて嫁の実家に預けて来たから心配するなどのことだった。日本で大震災が発生したことは認識したが、地球の裏側の砂漠の中にいるので、何もできない自分もどかしかった。

村上さん、タンさん、Jackの3人は、途中のCPで仮眠を取り、現在CP6を出てBPへ向かっているとの情報もたらされた。12時前に、タンさんとJackは素敵な笑顔で一緒にゴールを迎え、村上さんも最終ランナーにはなったが、LONG STAGEもクリアしたので、アタカマクロッシング完走をほぼ手中に収めた。村上さんがゴールすると、真っ直ぐトイレに直行して行く。彼女の言い分では、制限時間との戦いがストレスになり、お腹が緩くなってしまったとのことであった。

午後、私と樺沢さん、佐藤くん、ケンの4人で、アタカマ砂漠の砂を採取しに出かけた。1.5ℓのペットボトル一杯に砂を詰めたが、これが相当の重量になる。私は砂を集めながら、菅生救急隊の大木くんの顔を思い出していた。彼は今年の元日に入籍をしてお祝いとしてアタカマ砂漠の砂をプレゼントする約束をしていたからである。大木くんが喜ぶ顔を想像しながら、「嫁さんを大事にして、幸せになるんだぞ」と呟きながら砂をかき集めた。

今日は休日なので、円卓に集まり話をしていると、タンさんとJackも加わり賑やかになる。Jackはレース中に、「荷物が重いから」との理由で、食料を全部捨ててしまい、腹が減っているから、「何か食べ物を恵んでやってくれないか」とタンさんが言い出した。善意ある日本人選手の余剰分のスープやスナック菓子がテーブルに置かれ、Jackが嬉しそうに食べている。Jackは、「これで命が繋がれた。明日はレースに完走できそうだ」と、喜んでいて。Dr. Jack、「日本人選手は、あなたの診察だけは絶対に受けたくない」と、口を揃えて言っていましたよ。Mayさんは食欲旺盛のようで、用意した食料を食べ尽くしたそうである。荒井くんからアルファ米(五目御飯)を譲り受け、とても喜んでいて。荒井くんのお勧めのアルファ米の食べ方は、コーンスープをかけて食べる方法である。砂漠レースでしか味わえない調理方法だが、最高に美味しくなると力説していた。

夕方、焚火の近くにチリの現地スタッフのRodrigoさんがいたので、声を掛ける。LONG STAGEでは、村の子供たちと一緒に凧揚げができず、凧を渡すことができなかったのも、凧が大好きなRodrigoさんにプレゼントした。Rodrigoさんは、子供のように喜んでくれたので、とても嬉しかった。荒井くんにお願ひし、記念にRodrigoさんと一緒に写真を撮ってもらおうと、Rodrigoさんから名刺を渡され、「写真を送ってくれ」と頼まれた。今は便利な時代になっていて、日本に帰国してからPCで写真をRodrigoさんにメール送信した。スペイン語の翻訳もPCで変換できるので、返信されてきたRodrigoさんからのメールも、簡単に翻訳して読むことができた。PCや携帯電話の通信機器は、世界中どこの場所でも繋がれていると認識すべきである。



20時頃から星空観察会があるというので、テント村の丸テーブルの前に行ってみた。まだ星も瞬き出したばかりで、満天の星は見えていない。佐藤さんに電話を借りて嫁さんの実家に電話をしてみた。時差が12時間あるので、日本では12日の朝8時になる。不通だった電話は呼び出し音が鳴り、嫁さんが電話に出て話しをした。家では地震によるケガも被害も無かったが、ライフラインは止まったままとのこと。東北地方では津波による被害が甚大で、福島にある原発の1号機と3号機が爆発したと話していた。母親の生まれは福島県の相馬市で、親戚関係は漁業を生業としているので、とても心配していることだろう。

しばらく待っていると天空に星が広がり始め、文学者の先生による星空観察会が行われた。先生が英語で星座や星について説明してくれていたが、何を言っているのか分からない。私は南十字星と、日本では逆に見えるオリオン座を飽きることなく眺めていた。星空観察会は30分ほどで終わり、21時過ぎには就寝した。

3月12日(土) STAGE6:Final Footsteps to San Pedro 距離:9.3km

いよいよレース最終日、8時頃に起きて準備を開始した。毎日、日の出前から起き出してレース前のパッキングを行い、8時にスタートしていたが、今日は時間差スタートのWinning Runなので、選手はのんびりしている。スタートする順番は、今日までの総合順位により3つのグループに振り分けられており、私は第2グループで10時半スタートになっていた。バッグバッグの荷物も、装備必需品だけになると、6kgしかないのが軽く感じる。これにアタカマ砂漠の砂と水を積むので、重さは10kg程になっていた。ケンと朝ご飯を食べながら、「サンペドロデアタカマのホテルに戻ったら、ワインを飲みまろう」と話す。昼過ぎには完走メダルを首にかけ、祝杯を挙げている姿を想像していた。

第1グループのスタート時間が近づいたので、私はスタート地点から100mほど先へ行き、応援することにした。カウントダウンが始まり、第1グループのスタートが切られると、驚いたことにケンが先頭で走って来るではないか。ケンもエジプトレースで砂漠レースの楽しさに魅せられて、アタカマにエントリーしてきた。彼は今までに世界20ヶ国以上を、自分の気の向くままに独自の旅しているトラベラーだが、キチンと会社勤めをしている。私の嫁さんからは嫌われているが、憎めないジャガイモである。選手全員に声援を送り、Winning Runを楽しむように手を叩いて囃し立てた。タンさんとJackの笑顔も見える。最後尾からスタートした村上さんも、速歩で砂漠に消えて行った。

第2グループのスタートが近づき、これまでレースしてきた仲間たちと握手を交わす。南アフリカのAndyに勝負を挑まれたが、「俺が勝つよ」と、うそぶいておいた。アタカマクロッシング出場を思い立って4年半の歳月が経つが、今日で「完走」と言う最高の舞台が整う。今まで流してきた汗は、決して自分を裏切らなかった。また、家族の協力と職場の理解がなければ、ここまで来られなかったことに感謝し、My Start Positionの最後尾に並ぶ。英語での10カウントダウンが始まり、家族一人ひとりの顔を思い浮かべてスタートを切った。

STAGE6では、スタートゲートがゴールに運ばれてしまっているのが悲しいが、ゴール前では最高のパフォーマンスを表現したい。

少し上りの土砂漠の道を越えて行くと、礫の岩場が現れた。手足を使ってよじ登り、岩場地帯を抜けると、遠くにオアシスが見える。起伏のある小石の混じる道を走り歩きし、サンペドロデアタカマの町を目指す。走れる場所は走り、疲れたら歩く。だが、決して足は止めない。足を止めるのは、景色に見惚れた場所とCPだけと決めている。今日でアタカマ砂漠の太陽ともお別れかと思うと、直射日光さえも愛おしく感じる。灌木も生えていない土砂漠を、前を行く選手たちが点々進んで行き、砂漠の彼方のオアシスに消えて行く。砂漠地帯を横切るように、舗装された道路が見えて来た。警察官が道路上に立ち、私の方を見て手を振っている。あの道路を越えれば、町は近い。道路を横断し、車が交通できる硬い地面の道を走り、町へと続くピンクフラッグを追いかける。

緑の木々が生えるオアシス、その手前にある川を越えて行くと、人が居住する日干し煉瓦(アドベ)の家が見えた。サンペドロデアタカマの町に入ったのである。町の入口では人通りはほとんどない。背後から足音が聞こえてきたので振り返ると、デンマークのJensen Anders K. が獣のように走って来る。Andersは、エジプトレース2010に続き、このレースでも優勝した。彼は4DESERTSシリーズ完全優勝を目指しているようだが、私は南アフリカのライアン選手の方がAndersより速いと思う。ライアンは、4DESERTSシリーズで最初に完全優勝を成し遂げた選手だが、ゴビマーチ2008での時間差スタートの時に、彼に抜かれた速さは、とても同じ人間の仕業とは思えない砂漠での走り方だった。

自分のペースで走っていると、第3グループでスタートした樺澤さんが、2位争いをしながらAndersを追いかけて行った。彼の背中に向けて声援を送ったが、「ハァー、ハァー」と呼吸も弾んでおり、返事をする余裕も無いようだ。何人もの第3グループの選手に抜かれながら、見慣れたサンペドロデアタカマの町の店屋が建ち並ぶ一角が見えて来た。通行人も町角に立って応援してくれている。ピンクフラッグに従って町角を右に曲がると、町のメインストリートに入ってきた。1週間ぶりに戻ってきた町並みが、これほど懐かしく感じるものなのか。道端で寝ている犬に、「俺はアタカマを制したぞ」と言ってみたが、反応はない。微かに、歓声と音楽が聞こえている。ゴールは近い。町中を走り続けると、眩しいほどの光の中にゴールゲートが浮び上がって見えた。仲間やスタッフの笑顔が、私のゴールを待ちわびているように見える。思わず胸に熱いものが込み上げ、涙が出そうになったが、涙より歓喜の方が勝り、爆発しそうだった。

アタカマ砂漠に刻んで来た250kmの足跡を、より印象深いものにするためには、記憶に残る芸をしなければならない。サンペドロデアタカマ教会の前で立ち止まり、「アタカマの舞」を披露しながら大歓声を受ける。砂漠レースのゴールでは、すべてのランナーが最も輝ける場所なのである。ここでパフォーマンスをしなければ損をする。左手の指輪にキスをし、嫁さんへの感謝と愛情を表し、ジャンプ一番ストックでゴールゲートにタッチして潜

り、私のアタカマクロッシング2011が終わった。

STAGE6 9.3km 1時間26分47秒 68位

アタカマクロッシング2011総合計距離:242.7km 52時間36分39秒 総合順位56位

ゴールゲートの中では、Samanthaが完走メダルを持って待ち構えており、「Seiji～、Congratulations」と言いながらメダルを首に掛けてハグをしてきた。満面の笑みを湛えた仲間の顔が、完走の喜びを爆発させている。その輪の中に自分の姿を投じることができるのは、とても気持ちが良い誇らしい。「まずは、Pizzaを食べなければ」と思い、ゴール脇においてあるPizzaを頬張った。エジプトレース後も、ゴールでPizzaを食べていたが、1週間ぶりに食べる調理された料理の味は格別に美味しく、しばらくはPizzaを見るとゴールの思い出が甦ることになるだろう。腹が落ち着いたので、広場の奥の片隅でタバコに火をつけようとしたら、NHKスタッフの伊場さんがインタビューをしてきた。私は、「いつの日か子供たちを連れて、一緒にアタカマクロッシングに出場したい」と話をした。今までに出場してきた砂漠レースの中で、断トツに楽しかったレースであり、素敵な砂漠の景色を堪能できたアタカマ、この大地を子供たちにも見せてあげたい。カメラに向かって、「南極レースにも出場してみたいが、まずは嫁さんの説得と家族の了承、職場の協力があって、初めて出場が可能になる」と話しをすると、伊場さんが泣いていた。「何で伊場さんが泣いているのか」と不思議に思っていたが、1時間後にその答えが分かることになる。

仲間のところに戻り、記念撮影をすると全員が誇らしげな顔で、カメラのシャッターに納まっていた。私の希望では、「南極レース2012に出場し、みんなと氷床の大地の上で再会したい」、そんな思いを心の内に秘めている。ピンクフラッグを手に持ちながら、気持ちはすでに南極へ飛んでいた。「犬ぞりによる南極大陸横断」の志半ばで、アラスカのマッキンリーで消息を絶った植村直己さんが恋焦がれていた南極、その世界を走り歩いてみたい。

宿泊しているホテルに戻り、スーツケースの中に入れておいたワイン3本を取り出し、祝杯を挙げる。ホテルのカウンターに部屋のチェックインの時間を確認しに行くと、私宛に一枚のFAXが届いていた。海の彼方の何万kmも離れた日本から、嫁さんが送って来てくれたFAXには、「完走おめでとう、南極行きを許可します」との嬉しい内容のものであった。アタカマクロッシング完走と、南極レースの許可が得られたことに感謝し、歓喜しながら泥酔するほどにワインを飲み続けた。

アタカマクロッシング2011には、世界33の国と地域から110名の選手が出場し、87名が完走した。その内、日本人選手の出場は7名(男性5名、女性2名)で、全員が完走を果たした。